

法王の財政策の爲に來世の救済に關する保證即ち赦免符を賣買して居た事の非を暴くことになつたので、是が導火線となつて諸方に宗教改革の運動を惹起した。此運動は狹義の文藝復興とは區別せられるものであるが、結局同一の自由精神を基礎としたもので、且つ中世的解釋を離れて古義に復らうとする點に於て一致して居る。ただ文藝復興は之を文藝學術に於てし、宗教改革は之を宗教に於てする所に相違があるのみである。而して文藝復興が單なる復古を以て足れりとせず、漸次自覺心を喚起したやうに、宗教改革も次第に傳説を離れて心情に訴へ宗教の眞義を明にしようとした。然し精密に言へばルターの思想事業には中世基督教の影響が多大であつて、其が神祕學者の手に成つた『獨逸神學』を出版して之を激賞したに拘らず、宗教改革の事業は之に影響せられたものではないといふやうな意見もあるが、廣く考へれば文藝復興以外の宗教運動には神祕説と結合する點もないではない。而して又希臘的文藝復興と共通點を有する宗教運動には希臘的自然主義も含有せられたが、此思想は後十八世紀に於て自然宗教として發達した。

宗教改革者は初め心靈の信を重じて神學の知を排したが、然し漸次信徒の團體を生ずると共に教義を確定する事を要するに至つた。是に於て初は古傳説を證權として居たが、更に哲

學を以て之を論證する事を要するやうになつた。其結果羅馬教會と同じくアリストテレスの哲學によつて新教の神學を建立しようとした。主として其任に當つたものはルターと同じくキッテンベルクの希臘語學教授たるメランヒトン (Philipp Melancthon 自一五八三至一六四一) であつた。メランヒトンは創見を缺いて居たが該博で組織に長じて居た。アリストテレスの學によつて折衷的に神學を構成し、理性及び經驗による知識以外に聖書の天啓を以て有力な認識原理とした。宇宙は神の造つたものであるが、倫理上には自然智によつて事を決してよい。然し此智も亦神授であるから、結局終極は神に歸すべきもので、天啓の方が高いといはねばならぬ事になる。

此神學に従つた諸學は長く新教大學に行はれて十八世紀に及んだが、然し一面には反對もあつた。舊教は固より、神祕家も、又自然宗教家も之と争つて居たが、當時争論の最も烈しかつたのは神祕家との間に起つたものである。

二 神祕説——ヤコブ・ペーメ

十三世紀のマイスター・エックハルト以來、神祕的氣風は獨逸に多く行はれて居たが、今や

是が新教の組織及び神學に對する反抗として民間に勢力を得るに及んで、正統のルター派から狂熱的壓迫を受けて來た。元來ルター派は初めは恰かも是等神祕家のやうな自由信仰を主張したのであつたが、今は反つて之を忘れた觀がある。然し大勢は抑へる事は出來ない。シュレジーエンの貴族たるシムンクフルト(Schwenkfeld)の如く、初めルター派であつたが、後、晚餐式に就て意見を異にし、一切の信條に反抗して來たものがある。またセバステイアン・フランク(Sebastian Franck)の如く、一切の史的事實を象徴と解釋し去るものもある。是等の神祕家中、一面には自然研究と結合して自然哲學を説くものもあつたが、又他面には神祕的要素に重きを置いて、遂に獨逸哲學の濫觴といふべきものを生じた。即ちヤコブ・ベームである。

ヤコブ・ベーム(Jakob Böhme) 自一五七五至一六四八はゲーリッツの附近の人で、農家に生れ靴工となり、終に其仲間の長となつたが、傍ら學を修め、自然哲學者、諸神祕家の書を読んで、一六一〇年『曙光』(Aurora)といふ書を公けにした。其書には詳しく題して「哲學占星學及び神學の根源或は母、或は自然の記載」といつてゐるが、之によつて其の問題の存する所を知り得る。謂へらく、眞の天啓は學者に下らないで反て昧者に下るものである、ルターも無學

で當時の學究僧官に抗したのであつた。然るに末流は之を知らず、數すべきの極みである。今や新しい天啓の時が來た、曙光其處に現れて居る、と。斯くして習俗に抗して獨逸語を以て著述したが、僧侶は之を嫉視して、遂に之を禁止した。然しベームは毫も屈する所なく、更に數書を著した。其の書き方は一體に晦澁で、又無用な然も誤まつた語源穿鑿を事として居る所もある、然し、其の思想は玄深であつて、實に後年の獨逸哲學の基礎を開いたと言はれて居る。其の問題は主として宗教に關すること、之に自然哲學を混合して居る。約して之を次の二問題に歸することが出来る、即ち(一)神に近づくの途如何、(二)如何に罪業を説くべきか。

第一問に對しては、物界大にして心界もまた遠い、人は此間に立つて如何にすべきかといふ懸念が起るが、然し又一方に神の力と質とが一切に働く所を見れば、神必しも遠いのではない、ただ各人の心に存するものと見るべきである。斯る説は異教だといふものがあらば、答へて曰はう、我はただ哲學的に説いたのである、と。

第二問は更に困難である。もし神が萬物に具はるとしたならば、如何にして罪惡を説き得られようか。抑も自然の發生は神自身即ち自然の分割によるものではあるが、人々は其の分

割體を以て恰かも全體であるかのやうに思惟するから、此に鬭争が起り罪惡も生ずるのである。然し罪惡は無から生じない、神が斯く分割して雑多となり罪惡を生ずるとすれば、其根源に此罪惡が存在しなければならぬ。即ち神性中に既に善惡の對立が存在して居るのであつて、萬物も亦此二性を享有して居るのである。例へば火の如く、生活と破壊との二作用を有して居る。神は「然」(Yes)のみならず、「否」(No)である。然らば何故に斯く對立するのであるか、曰くただ對立によつてのみ示現は可能であるから。

神の本性は「恒久の靜止」である、根源の基礎であつて、又基礎以上のものとも言へる。「永久の一」「本質ならざるもの」「全而無」である、即ち一切の反對矛盾を包括し、此上に立つものである。或は之を無對象の意志とする。隨て其は自己を視る働きしかない。斯くして自己發現をなし、神中の自然たる根據以上の根據即ち「非根據」に對立する。斯くして「示現すべき意志」「觀念的力」「力に於て示現せられる活動」の三部に分れる。即ち宗教上に所謂神父神子聖靈の三位一體説に相當するものである。なほ之を哲學上の本體、屬性、作用の三範疇に相當するものと見ることが出来る。

以上の三性を代表するものとして三天使がある、即ちミカエル、ルチファー、ウリエル

(Michael, Lucifer, Uriel)であつて、是が世界開闢の第一段に相當する。第二段に於ては神性の原的性質たる七種の形體(Gestalten)が現れる。是等七性の發展は永久に行はれるもので之を Qual とす。蓋し Qual から Quality 即ち性質とす。語が導かれるが、Qual 即ち煩悶ともいふべき語は quallen, Quelle とす。語から導かれるものである。即ち性質は或事物の煩ひ悶へて動搖已まざる所から發するものである。是等性質中、鹹(澁) 甘苦火光音形の七種を區別する、而して初三は神父に相當する天使ミカエルに當り、火はルチファー、殘三は聖靈及びウリエルに相當する。故に事物の性質を定めることは一性の運動をなすことに他ならない。斯様に味や感覺性質やを混説し、又 Qual の語源の如く牽強附會の説(Quality は羅句語 Qualitas 即ち qualis 「如何」に導かれる。)を立てる所に其の學識上の缺陷を示して居るが、一種の奥妙なる見解を比喩で説いたものと見るべきである。

此發展から特に此現實世界を生じたのはルチファーの墮落に因する。天使ルチファーは其の智と力とに誇り、自ら神に擬して世界を創造せんとして神の怒を招き、終に墮落して地獄界を作り其中に住することとなつた。然し此に又神の愛も現れ、絶えず此地獄の惡魔によつて脅威せられる世界を救濟せんとする。斯くして此地獄界と愛の世界との中間に物質界が存在

することとなる。

此物質界を認識する作用は感覺である。故に此感覺を翻けて精神により天使を、心靈により神性を認識することが出来る。蓋し人は本來一切と同質であるから、之によつて一切を知ることが出来るのである。

倫理に關しても亦之と同じく、現世を脱離して神に近づくことを究竟の理想とする。

ペーメの説は此の如く用語も精密でなく、論述も組織を缺いて居るが、其中に含まれて居る深奥の意味には、後年の獨逸哲學の特色たる内觀的形而上學的性質を暗示するものが少くないのである。

第四節 自然研究的文藝復興

一 自然研究の發達

文藝復興は一面に人性の自覺を喚起すると共に他面には自然觀に大變動を來した。蓋し中世の自然觀はアリストテレスの物理書を基として之を聖書の所傳と符合せしめたものであ

る。アリストテレスによれば、天地は二元的に相異つて居る、天は清輕の原素から成り、完全にして其中に神が住して居る、地は濁重で、隨て中心となり、諸天體は日々其周圍を廻轉すると見て居る。紀元二世紀アレクサンドリアの數學家地理學者たるプトレマイオス(Ptolemaios)が之を組織して天文説を作つた。種々の惑星の運行が必しも一律でないので、其等に對して特殊の小迂回をする軌道を設定した。是が地中天動説と名づけられるもので、一見知覺に一致し、又經典にも背かないから、長く行はれたのであつた。然し之に對する駁論は次の二點から生じ得る。即ち(一)計算上の不一致、(二)空間の相對性。而して攻撃は先づ(一)から生じて來る。

是より先きニコラウス・クザヌス(Nicolaus Cusanus 自一四〇一 至一四六四)は尋常智識を超越する境地を説き、最上の智は一切の反對を融合するものとして、隨て之によつて知られる神は一切の反對性を包括するものであるとしたが、之が発現して生ずる自然界には無限はなく、隨て運動に無限なるものなく、場所の決定や運動は凡て相對的であるとした。それで其の結論として地球を中心と確定する説は疑はれるやうになつた。

此説はまだ地動説を明言するには至らなかつたが、運動の相對性を説くに及んで既に古説

の根據を動搖せしめる所があつた。然もなほ思辯に傾いて居たが、十六世紀に至り、人々實際に自然研究を試みるに至つて事情が一變し、計算上の難點が暴露せられるやうになつた。自然研究は初は宗教と結合して接神論となり祕法となつて居た。ピコ・デラ・ミランダの如きは其の著しい例である。然るに一方には十三世紀のロージャー・ベイコン以來養成せられた實驗的精神は益發達し、且つ數學を以て自然を説明せんとする企圖を生じた。文藝的に自然の美を歎賞すると共に科學的に自然の美を探求せんとした。當代の先驅者たるレオナルド・ダ・ヴィンチの如きは藝術家で又科學者であつて、正しく其好適例となるものであつた。然し當時はなほ思辯に勝るものが多く、ジロラモ・カルダノ (Girolamo Cardano) の如きはピタゴラス派等の數說に負ふ所あると共に、占星術などにも負ふ所が多かつた。隨て一方には又魔術的興味を以て自然に接するものがあるのも怪しむに足りない。蓋し中世の人々は自然を以て祕密的魔力の存する所として之を恐れて居たが、今や此祕密を發見して人の爲に其魔を驅使せんと欲するに至つた。彼のファウストの傳説の如きは、正しく當時の學者の心事を表したものと云つてよい。アグリッパ (Agrippa von Nettesheim) の如きは學の不確實空漠たる事を嘲ける著を出した。然し漸次、自然全體を御する事の難きを見ると共に、其の一部を

取つて祕法を講ぜんとするものを生じた。鍊金術の如きは即是である。其説は荒唐無稽であつたが、之によつて化學醫學の發達に資する所も多かつた。就中最も名高い人は瑞士のバラツヘルス (Paracelsus 自一四九三至一五四一) である。謂へらく、神は基督及び自然となつて顯れて居るから、之に應じて神學と哲學との二學が生ずる。自然は凡て生に充つるもので、人は小自然である。人體を構成する物質は水銀、硫黃、鹽の三素から成つて居るが、此の身體中に各人の本質を形成する原質ともいふべき *Archens* なるものが閉ぢ込められて居る。此の「アルケウス」によつて各個體は相差別するのであるが、是が其の力となるもので、疾病は畢竟此の「アルケウス」を他の精靈が犯すから生ずるものである。即ち地水火風の四大に相應する魔があるから、恰かも其魔力に對抗する力を有するものを使用すれば病源を去る事が出来る。斯様にして諸種藥品の研究をなした。

二 自然哲學

(一) 自然哲學の端緒

以上諸研究によつて漸次自然哲學を生ずるに至つた、而して伊太利は此點に於ても先鞭を

つけた。然し其初は空想に富み、テレシオ (Bernardino Telesio 自一五〇八) の如く、乾濕二素によつて自然を説明する所、宛として古代希臘の哲學である。此説は唯物論的であつたが、パトリッチ (Patrizi) は宇宙有生論を唱へて、他の點から又古代希臘の哲學に近づいた。

(二) 新天文説

此際新に的確な自然研究が生じて、アリストテレスの説を根本的に破壊し去るに至つた。其はニコラウス・コペルニクス (Nicolaus Copernicus 自一四七三) の天文説である。コペルニクスは宇宙の単一性及び相對性の二點からプトレマイオスの天文説を駁し、地球の周圍を諸天體が廻轉するとするよりも、寧ろ地球其のものが運動すると見る方が單一に説明が出来るとした。而して運動は元來相對的であるから、常識的外觀に反するものでも必しも不可ではないとして、太陽中心地球運動の説を唱へた。即ち諸惑星の太陽系を形成し、其外に又諸恒星の天があるとしたのである。コペルニクスは初め此説を藏して他に示さなかつたが、漸次洩れ聞くものがあつて弟子によつて先づ傳へられたので、遂にニュールンベルクの僧官オシアンダーに托して出版した。オシアンダーは其序文中に、數學者の論理的遊戯の如きものであると辯して置いたので幸に教會の問題ともならなかつた。斯くして此書は非難もせられず、

又注意もされず、ただ多少の壓迫を受けたのに止まつたが、後熱烈な一自然哲學者を生出するに至つて許多の迫害を受くるに至つた。即ちジョルダノ・ブルノーである

(三) ジョルダノ・ブルノー

ジョルダノ・ブルノー (Giordano Bruno 自一五四八) は南伊太利ナポリ王國中のノラといふ所で生れた。學を修める爲にドミニカン派の修道院に入つたが、直ちに異端を以て目せられ終に抑壓に堪へずして、一五七六年此處を逃れて流浪の生活に入つた。佛英獨等の諸都市に於ける大學等で、其の修め得た記憶術や思考術 (中世のライムドックス・ルルスの發明した一種の機械によつて推理をなす術) を教授して糊口の資を得、傍ら學を攻めて居た。佛英等の宮廷では好遇されたが、其猜介の性は人と相容れず、殊に學者僧侶と和する事を得ず、到る所、席暖るに追なかつた。倫敦滞在の時には伊太利語で主著を公けにしたが、オックスフォードの學者とは初から意見が合はなかつた。獨逸は學界も多少自由であつたが、北方の新教徒はやはり此の南國人の氣象とは一致しなかつた。斯くして懷郷の念に堪へなかつた所へ、エネチアの貴族から聘せられたので終に難を冒して伊太利に入つたが、貴族の欲する所に従はなかつたので、終に告訴され、一五九二年捕縛せられて羅馬に送致せられ、爾後長い審問を

受けて一六〇〇年二月十六日羅馬のカンボ・デイ・フィオリといふ廣場で焚殺された。其の死に臨んで刑吏に豪語し「刑を受くる我よりも刑を行ふ汝こそ恐怖に戦慄するらめ」と言つたことは有名である。近年各國の人胥謀つて此地に記念像を立てた。

其の學說の基礎は(一)先づ認識論的には相對性原理を基礎として居る。抑も地球中心説は實は感官の知覺に合はない。蓋し地平線は見方によつて異なるもので、絶對的中心點はないこととなるからである。且つ我々は想像と思惟によつて數や思想を無限に増大する事が出来るから、絶對的限界といふやうなものはない。認識は常に擴張するが、世界も亦此の如く起初も限界も有たない。是から次の結論が生ずる。先づ絶對的の場所はない、同一の點は中心とも極ともなり得る。故に又絶對的の運動も時間もない。蓋し運動は各恒星から見れば異つて現れるものであるから、星の異つただけ時間も亦異なるであらう。同様に輕重も亦相對的である、絶對的中心がないから、各分子の重さは其の分子の屬する物質體系に關係して定まるものである限り、之も絶對的に定め難い譯である。(二)次に之に關聯して自然無差別性の原理を立てられる。遠近の山は其の外觀を異にするが、位置を轉すれば結局同一だといふことが判る。之から類推すると、地と天體との間にも差別がないことを知るであらう。又遠

方の船は動かないやうに見えても實は然うでないやうに、星も亦實は運動するものといはねばならぬ。斯くして太陽系のやうな群が無數に存在して空間中を運動して居る。故に空間中には一大世界精神が存在すると言へるのである。隨て天地を二元的に區別することの謂れなきを知り得るのである。以上の他又、宗教哲學上神の無限なる事より世界の無限なる事を推定する事も出来る。而して此の論據から形而上學を建設し得るのである。

ブルーノの形而上學説は三期に分けて説くことが出来る。第一期は新プラトン派の影響を受けた時代で、其著の『觀念の影』(De umbris idearum. 1582)といふ名稱からも察知せられる。恒常的觀念即ち神を以て萬物の根基とする、但し此「イデア」はプラトンに取つては一般性を表すものであつたが、ブルーノにあつては法則の意味に用ゐられる。而して至高認識は感覺的差別を脱して合一に近づく事にありと云ふ考が基となつて居るが、此點を力説して第二期の思想を生じた、而して是は實に其學說中最重要なものである。『原因、原理及び純一に就ての對話』(Dialoghi della causa principio ed uno. 1584)は即ち之を述べたものである。蓋し既に天地に別は無し、一切の對立も深く考へれば皆没するであらう。儼然たる對立はただ思想中に存在するもので、之を自然界にも附する權利はない。プラトンが「イデア」と感

覺物とを區別し、アリストテレスが形質を分別したのは共に不可である。世に絶對的質料といふやうなものはない。それは全く受身で外部から形成せられるものであらうが、斯ることは自然にはなく、自然界の質料は其自身の中から形式を開展する。故に質は形より劣れるものではなく、自然界には不斷の循環が行はれ、無生物と有生物とに根本の差別があるのではない。斯くして形質の兩實體の奥に之を統一する根源的一般的な實體があり、一切の差別は此に合一する。之を世界と別異なものと考えれば原因であり、現象中に作用するものと思へば原理となる。是が即ち神であつて、空間中に作用し萬物を齊整する。而して此一なる實體が差別界をなす事は畢竟差別が眞の差別ならざる事によつて證せられるのである。斯くして各個物も共通の基礎を有する點に於て各意味を有するものと考へられる。此に第三期の學說を生ずる。即ち『三様の極小及び計量に就て』(De triplici minimo et mensura. 1591)に於て數學的物理的形而上的の極小を論じ、感覺上連續と見えるものも實は小分子から成るとして此小分子を「アトム」又「モナード」(單子)等と呼んだ。然も此單子は相對的なもので、太陽系も宇宙に對しては又一個の單子である、神もまた一つの個體として單子である、といふやうにも説かれて居る。

ブルノーは此の如く自然研究を基礎として全自然を一體とし一生物と見て哲學を構成し文藝復興期に最も相應しい哲學を案出した。なほ之に類似して同じく自然哲學を説いた人にかンパネラ (Tommaso Campanella 自一五六八 至一六三九) がある。均しくアリストテレスを排斥して居るが、教會の立場から其を難するので、其根據に於てはブルノーと正反對である。ブルノーは所謂文藝復興の終末をなすもので、然も又其說の大部分はペーメの說の如く、直接に其の時代に於けるよりも、寧ろ後世の哲學に大なる影響を及ぼして居る。而して自然研究として見ればなほ多くの空想を混じて居るが、是等に對し眞に科學的研究を進めたケプラーやガリレイが出て終に近世科學の基を開き、之と共に哲學思想に確な組織を與へるやうになつた。狹義の近世哲學は實に此に始まると言つて可いのである。

第二章 文藝復興期の哲學 (二) 組織期

第一節 近世哲學の起首

文藝復興運動は獨逸の神祕哲學と伊太利の自然哲學とに於て一面發達の極に達した。然し是等は自由清新ではあつたが、なほ分析と組織とに於て缺ける所があつた。其故に正當に近世哲學の起首と稱せらるべきものは、是等の精神を繼承して當時發達して來た自然科学的研究を基礎とし、之に論理的形式を加味したものでなければならぬ。此の如き哲學は教會と帝國との權威から全く獨立な英佛等に於て見る事が出来るものであつた。故に通常英佛の哲學を以て近世哲學を開始するものとし、伊獨のを過渡期に算する。然し其の精神に於ては相續して居るもので、其の異なる所はただ組織と方法との如何にあつたのである。

實に近世哲學は方法論の問題即ち廣義の知識問題を以て起つたものである。抑も知識の問題を明に意識したのはカントであつて、ここに近世哲學の一轉機を作つたのであるが、此問

題は實は近世の初から暗に攻究せられて居たのであつた。佛のデカルトも英のペイコンも共に謂へらく、中世の哲學研究法たるアリストテレスの形式論理は知識獲得上何等の効果はなからず。而して彼等が此問題に對して参考とした所ものは自然科学の方法であつた。蓋し當時伊獨を通じて自然研究が勃興し、コペルニクス、ケプラーを経てガリレオ・ガリレイ(Galileo Galilei 自一五六四 至一六四二)に至つて眞の自然科学を生じた。ガリレイは自然を純機械的に説明することを企て、デモクリトスの世界觀を復活し、同時に認識問題に關して卓抜なる見解を述べて新方法論の端緒を開いた。此研究は一面には自然科学主として數學的物理學的方面に發達しフーバーン(Sir Isaac Newton 自一六四二 至一七二七)に至つて典型的時期に到達し、他面には哲學思想に影響して方法論に新分子を加入した。蓋し此の科學の方法を見ると二様の過程がある。一は偶然的經驗に代へて組織的實驗及び觀察を行ふ事、一は推論式に代へて數學的論證を用いた事である。前者は歸納法で、後者は一種の演繹法である。ガリレイ、ニュートン等は之を兼ねて居たが、是等の方法が哲學上に應用せられる場合には自ら分立して哲學上の二派を生じた。數學的演繹は精緻明敏な佛國人によつて代表せられ、經驗的歸納は着實穩健な英國人によつて着手せられた。數學的方法是幾分か形式論理に吻合するから、中世以來論理研究の

中心であつた佛國が其の研究の地たるに適する事は想像するに困難ではない。而して中世以來既にオッカムのキリアムやロージャー・ベイヤコン等を産出した英國が國力充實したエリザベスの官廷で經驗論を産出するまでに進んだ事は當然と謂つてもよい。而して實に十三世紀に於て實驗の要を唱へた『大書』(Opus Majus)の作者(即ちロージャー・ベイヤコン)と同姓の才人(即ちフランシス・ベイヤコン)によつて英國哲學、從て近世哲學の組織が初まつたのである。

第二節 英國經驗論

一 經驗論の開祖

(1) ベイヤコン

ベイヤコン(Francis Bacon)は一五六一年英國大聖官の子として倫敦に生れた。一五七三年ケムブリッジのトリニティー・コレッジに入り、父の歿後グレイス・インに入つて法律を専門に學んだ。一五八四年議員に選出せられエッセックス伯の知遇を得たが、エリザベス女王の議案に

反對した爲に逆鱗に觸れた。エッセックス伯が女王の寵を失つて終に叛を以て刑せられる時、ベイヤコンは其の罪狀を論ずる地位に立つた。此事は忘恩の誹を免れない點もあるが、ベイヤコンとしては其の爲すべき事をなし、且つ以て女王の意を迎へ得べしとしたのであつたが、然も女王の怒はなほ解けなかつた。一六〇三年女王崩じてジェイムス一世位に即くに及んでベイヤコンの運命は始めて開かれた觀がある。以後重用せられ、歴進して父の官を経て大法官となり、エルラム男爵からセント・アルバン子爵となつた。然も賄賂の嫌疑を受けて退隱するの已むなきに至つた。爾後専ら學を攻めて居たが、一六二六年雪中に防衛の實驗を試み、爲に寒氣に犯されて歿した。一六〇四年の『學術進歩論』(Advancement of Learning)を初として、著書數種あつて全集に收められて居る。就中「學術進歩論」を羅旬語に譯補した「學術の品位及び發達論」(De dignitate et augmentis scientiarum. 1623)と新論理説たる『新オルガヌム』(Novum Organum. Scientiarum. 1620)との二書は最重要である。其他學說大系の計畫もあつたが完結しなかつた。然しベイヤコンは本來學術上の専門的研究に長じて居る譯ではなく、博學多識、單に學術研究の要を説くに止まつたのである。

(II) 學術の新研究法

エリザベス朝の英國は物質上精神上急激の進歩をなし、知識萬能の觀を呈して居た。ベイヤンは此間に生れて夙に經世に意があつた。謂へらく、學にして此目的を達する事が出来なければ未だ以て眞の學とするに足りない。是に於て少時學んだアリストテレス哲學の空論を避けて、轉じて實用の學を修めようとした。是が其の攻學の全精神で、實に又英國哲學の基調をなすものであつた。學問は實際の目的に對する手段である。今日の目的は發明によつて自然を統御する事にある、然るに統御には知識を要する。知あれば力がある、知と力とは同一である。然し此の如き知は先人の説に盲從する所には存せず、自ら自然について經驗する所を知了することではなければならぬ。其故に自然研究の設備を完全にすることはベイヤンの理想であつて、之を其理想國を説いた『新アトランティス』中に叙してある。而して其正當な方法を説いたものが即ち『新オルガヌム』(即ちアリストテレスの「オルガノン」を新しくした意味で)である。

『新オルガヌム』は今存するものは二巻で、初一は主として誤つた方法を論じ、後一は新方法を説いて居る。蓋し自然を解釋(Interpretatio)するには自然をして眞を語らしめなければ

ならない。之が爲には成心を棄て豫料(Anticipatio)を翻けなければならない。斯る豫料の結果として生じた迷想を偶像(Idola)とす。之は四種あつて、人々に共通な迷想たる種族の偶像(Idola tribus)、特殊の人々の個性境遇等に存する洞窟の偶像(Idola specus)、交通上例へば言語によつて生ずる市場の偶像(Idola fori)、及び學說推理等より生ずる誤謬たる劇場の偶像(Idola theatri)が即ち是である。

是等偶像を排斥して直接に事物を觀察すれば、其の原因を認識する事が出来るが、即ち先づ事實を蒐集して、之より其の原因或は形式(Forma)を求める。此形式なる語はアリストテレス哲學では目的の意を有して居たが、目的觀を以て種族の偶像としてベイヤンは此語を用ひて之を法則或は活動原因の意に解したのである。此形式を發見するには(一)蒐集、(二)拒斥、(三)總括(Collectio, Exclusio, Vindemiatio)の三段の方法がある。(一)に於て研究事項の起る場合と否との場合を集めて表示し、(二)に於て無用のものを排除し、(三)に於て之を決定する。(一)が最も重要であるが、之を分つて存在表、缺如表、比較表の三段とする。即ち或事項の起る場合と、他點に於て之に類似して然も其事項のみの存せざる場合と、及び其事項の變化に伴ふ事情とを研究する事である(後年ミルの歸納法に所謂契合法、(差異法、共變法に相當する))

斯くして形式即ち原因を知れば、之によりて公理を作り、之を應用して新實驗を施し發明に進むことが出来る。而して事實から公理を作る事即ち歸納法には、事實中研究に最便な場合を求めなければならぬが、之に二十七種あり、猶其補助法にも八種ある。然し之に就ては細説はないが、或は第三卷以下の問題となるべきであつたかも知れない。

(三) 學術分類論

ベイコンは以上の方法に基いて多少研究を試みたが、特に見るべきものはなかつた。ただ其學術進歩論は該博な知識によつて學術の分類を説いたものとして著名である。此中、學或は知を神的と人的に分ち、人的學を記憶による歴史、想像による詩歌、推理による哲學の三類とし、歴史を自然史、政治史、教會史、文學史に分ち、哲學を神學、自然學(物理學と形而上學)及び人の學(生理學と心理學)に分つた。

ベイコン自身の研究材料は、貧弱で其研究法も數學的精確を缺いたが、之によつて實驗的精神を鼓舞する所も多く、一六四五年キルキンスがオックスフォードに學會を設けたものが、後倫敦に移されて一六六〇年王立學會(Royal Society)となつて全歐學界の權威となるに至り、英國の科學の發達を促す所も多かつた。

三 自然主義の起源

(一) ホッブス

ベイコンと同じく經驗論の立脚地に在つて之に數學的方法を交へたものがホッブスである。ホッブスに至つて明白に自然主義的哲學が組織せられた。

ホッブス(Thomas Hobbes 自一五八八至一六七九)は牧師の子としてマルメスベリに生れ、オックスフォードで學んだ。中世の學に嫌らず、後巴里滞在中偶然ユークリッドの幾何原本を得て、之に従つて哲學を組織せんことを欲した。時勢に鑑みて強固なる國家政府を欲して王黨となり浮沈して居た。クロンエルの時代に難を避けて居たが、後王政復古と共に意を得るに至つた。著書各方面に涉り、人間論物體論政治論等相合して哲學體系を構成して居る。

(二) 自然主義的哲學

ホッブスはベイコンと同じく學の目的を實用にありとし、而して此目的を達する爲には自然的原因を明にしなければならず、是を経験によつて達せられるものとした。而して經驗的に認識せられる自然現象の本性は物體の運動に他ならないから、哲學は即ち物體の學となる

のである、然も此認識の基礎たる感覺は主觀的作用で事物の真相を示さないから、其の結果たる思惟も概念も事物に符合せず、ただ名目たるに止まつて居る。思惟は即ち此名目の計算に他ならない。

物體を自然的と技工的とに分けるが、前者は物理學の問題たる自然である。後者の中最完全なものは國家である、而して自然物にして國家の要素たる人は其中間に位する。斯くして哲學は物理論、人間論、國家論に分れる。

物理論は原子の機械的作用で説明せられるが、人體も人心も亦國家も同様の方法で説かれる。凡ての物體は自己の存在を主張するものである通り、人も亦自己を主とする。然も斯る主我的なものが如何にして國家を構成するか。ホッブスは曰ふ、自然の人類は力量が大抵平均を得て居るから、欲求も同様で争闘が絶えない、所謂萬人相闘の状況である。故に人は其弊に堪へず、各小利を殺いで大利を得んとし、此に約束規定を設け更に此規定に制裁を附して主權者の手に委ねる。此の如くして國家と君主との強大なる權威が生じて、地上の何物も之に比すべきものはない。聖書に記載せる大動物レヴィアサン(Levathan)と同様であるとして、此語を書名として國家論を説いた。此大權力により法律も道德も出來たとするのである。

(三) ケンブリッヂ、プレートニスツ

ホッブスの説は自然主義を大膽に暴露したもので、理論上及實際上諸方からの攻撃を受けた。宗教家は言ふに及ばず、殊に著しいのはケンブリッヂのプラトニ學者であつた。ホッブスの自然的因果觀を無神論として目的觀を唱へ、人性を主我的として道德を人爲的變化的とした説に對して道德の絶對的に不變不易な事、之が人性に基づく事を説いた。其の主要なる人はモーア(Henry More 1614—1657; "Enchiridion Ethicum")カントリース(Ralph Cudworth 1687—1688; "True Intellectual System of Universe," "Treatise concerning Eternal and Immutabile Morality")カムブランド(Richard Cumberland 1632—1718; "Disquisitio de legibus naturae")、パーカー、セオフィロス(Parker Theophilus)等がある。何れも學識に富んでは居たが、其説に特に新な所はなかつた。即ちホッブスの説の清新にして問題を提出する所に及ばざる事遠かつたのである。

第三節 佛國理性論

一 理性論の確立

(1) デカルト

ペイコン以來發達して來た經驗論に對立した理性論の端を開き、之を確立したものはデカルトである。兩者の方法學説は謂はば正反對の觀があるが、然し中世哲學に反抗した所は相同じい。而して兩者とも結局中世の學語を用ひ、其の樊籠を脱し切らなかつた所も亦相同じい。其中特に中世を通して古代哲學の正系を傳へたといひ得べきものはデカルトである。蓋しデカルトの方法は一種の演繹であつて、中世の論理に似た點もあるが、ただ其の好む所の數學を用ゐた所に差別があるのである。此數學は當時懷疑の風に充ちた佛國の智識階級殊に宮廷の人々にも重ぜられたので、天性之に傾いた所のデカルトに對しても更に影響する所がなかつたとは言へない。此の如く懷疑的で又理性的で然も一方加特力教の信仰を教權とし

て有する事は實に佛國思想の一特色である。

デカルト(René Descartes)は一五九六年ラ・ハイ(トゥールレーヌ州)の貴族の家に生れた。一六〇四年ラ・フレイシュのジュースト派の學校に入り普通學を修め、一六一二年卒業後、貴族の習として武官とならんとし、巴里に出て其準備をして、一六一六年騎兵士官となり、後數回従軍した。巴里遊學の際にも陣營兵馬の間にも攻學を廢する事なく、終に一六一九年ノイブルクの冬營中學術研究の方法に於て豁然大悟する所があつた、と傳へられて居る。一六二三年巴里へ歸還してから訪問者の繁に堪へず、和蘭に移つて屢々轉宿し身を隠すことを努めた。其間プファルツ候の公主エリザベートの爲に學を講じたが、知友に著書の公刊を迫られ、終に一六三五年『方法説』(Discours de la méthode)及び數學物理に關する三種の論文を併せて『哲學試論』と名づけて出版した。然るに此書は豫期した通り種々の評論を招いたので、之を辯ずる必要上又他書を出版しなければならなくなつた。斯くして廣く學界に行はせる爲に羅旬語で『考察録』(Meditations 1639—40)『哲學原理』(Principia philosophiae. 1641—43)等を著はした。和蘭で反對派との爭論の煩に堪へず、此地を去つて巴里に歸つたが、又此處にも永住する事を得なかつた。斯くして蘭佛の間を往來して居たが、一六四九年瑞典女王ク

リスティネに聘せられて其都市に移り、學事奨勵の業に當つたが、激務の爲に病を獲て一六五〇年二月十一日歿した。

著書は生前出版されたものは前記三書の他『感情論』(Les passions de l'ame)等や、未完の書『精神指導規則』(Regulae ad directionem ingenii)等があり、其他書簡が許多ある。古くクザンの出版があるが、一八九六年より誕生三百年記念として出たタンヌリー及びアダム編纂の全集十二卷は最完全である。

(II) 自己意識の標準

(イ) 數學的方法

デカルトは其『方法説』中、校舎を出る際其の修めた學術に就て回顧して、其の何れにも満足する能はず、獨り數學のみは其の理論の明確なる點に於て他の學に勝れる事を知つたと説いた。然し其時はまだ此數學を如何に他學と結合すべきかに就ては考へる所がなかつた。斯くして學を以て身を立てんとせず、實際社會に入つたが、然し好む所の數學を初め物理學等を獨修して居て、冬營中に大悟して攻學の方針を定めたといふ。其によつて思惟上及び實踐

上の規則を定めたが、思惟に關するものとしては(一)明晰(二)問題分割(三)秩序(四)十全を期すべしといふことで、即ち數學、殊に自己の發明した解析幾何に於て主とする所の方法であつた。斯くして數學の方法が又哲學の方法となり得べきことを悟つたので、ここに近世哲學の一特色たる數學的哲學の基を開いたのである。

數學によつて從來の散漫たる知識は統一せられ、恰かも太陽系の如く中心を周つた結合を得ることとなるのである、即ち其の組織に於て總合法を取るものであるが、之に達するには直接に確知せらるべきものを得なければならぬ。是は數學に於ける如く分析で得られるべきものである。斯くして總合的な幾何學を分析的に説いた新數學たる解析幾何學は直ちに新哲學の模範となり得べきものである。

(ロ) 方法的疑感

分析的に從來の知識を見ると一として疑はしからぬものはない、『考察録』第一章はよく此消息を傳へて居る。謂へらく人は少時から許多の妄想を信じて居るが、然も一たび誤あるものは信すべからざるもので、感官の知覺の如きは現に然うである。形状等の知覺でも或は神の欺騙によるものであるかも知れない。人は夢と感覺とを區別するが其の標準は確かではな

い。夢に原型があるから、一生を夢とするも之に對する原型の實在があると思はれるが、然し是も亦神の戯れかも知れない。かくて一切は皆疑ふべしといふことになるのである。

(2.2)

然し此に一條の脱れ道がある。蓋し疑の極、遂に此の疑ふといふことだけは疑ふべからざるものと知るであらう。廣く云へば考へる事(意識する事)は事實と見なければならぬ。而して考へる我は其場合に疑ふべからざるものとなるであらう。之を有名なる「我思故我在」(Cogito ergo sum)といふ語で顯はす。然し此命題に對して辯すべき事は、(一)何故に特に「思惟する」とのみ言つて他の作用を擧げないかといふ非難に對することである。是れガッセデのやうな感覺論者の攻撃であるが、デカルトは之に答へて、諸感覺的作用、例へば「我歩む」といふやうな事はやはり夢中にのみ存する事であり得るが、然し此場合にも「我歩む」と考へる」といふ事は事實である、即ち依然として「考へる」ことが基礎である。次に(二)此命題は實は大前提を省略した推論式である、即ち「考へるものはある」といふことが前提に存して居ると見なければならぬと。是れアルノールの駁論であるが、デカルトは之に對して、此命題はただ「我は考へるものとして存在す」といふ直覺の事實を示したもので、決して推理ではないと辯じて居る。(「我歩む」の語はホッブスの反對意見に見ゆ、但しガッセンデイも同論なりと思はる)

斯くして唯一の確實なる知識は思惟の自己思惟(意識)に存することとなつた。

(ハ) 眞知と誤謬

斯る自己意識を標準として知識の内容を定めることが出来る。今自己意識は我に取つて最明晰判明(*clara et distincta*)であるから此標準に適したものを正確な知識と見なければならぬ。自己以外の諸實在とせられるものを大別すると神と物との二つに歸し、他は其の中間の事物と見ることが出来るから、問題は是等二者の實在を證し得るか如何かといふことによつて決定せられる。

「神」の觀念は「我」の觀念に次いで最も明晰判明であるが、其の原因は何所にあるであらうか。抑も原因は結果と實在性が等しいか或は其以上でなければならぬ。神の觀念は最完全者の觀念であるから、其原因は不完全なる我の外になければならぬ。故に神は實在すとしなければならぬといふ。之を神の存在に關する人性論的證明といふ、其根柢には實體論的證明が假定せられて居る。

神が既に存在し、我が知識は神授であるとすれば、此知識に上るものは眞でなければならぬ。即ち事物は皆實在と見なければならぬ。而して此點から又逆に神に對する知識の正確

(203)

なることをも證明し得る。神の存在は知識の存在に對する實在の理由となるが、知識の存在は神の存在に對する認識理由となる、と稱せられて居るのは即ち此の謂である。

斯く自然智が人に具するとすれば、一切の知識は誤謬を有しない事になるであらうか。然し誤謬の存在は事實である。其の原因は神に歸すべからず觀念自身に存せずとせば、何に歸すべきであるか。曰く意志の自由は其原因であると。蓋し觀念其自身には誤謬はないが、之を以て、或事物の模寫であると判斷する場合に誤謬が生ずる、而して此判斷は肯否を表するもので意志作用に基づくものである。畢竟意は知よりも範圍が廣い爲に誤まる事があるのであると。此説は判斷を意志作用と關係せしめた點に於て古代のストア派の説と共に近世論理學の一説とせられて居る。

斯く理性の考察による明晰判明な知識に重きを置き感性の經驗を輕すると共に、觀念に二種を分ち、前者を本有觀念(Ideae innatae)とシつて後者の外來觀念(Id. adventiciae)と區別した。此に其の理性論が確立するのである。

(三) 心 物 二 元 論

(イ) 實 體

自他對立して互に獨立となつて居るが、此の如きものを實體(Substantia)と稱し、之に種々の屬性が附するものとせられて居る。嚴密に言へば眞の獨立體は神のみであるが、相對的意義で、之に對する世界或は物をも實體とする。此に無限的と有限的とが相對立するが、更に又此の有限的なものの中に物體と精神との二者を區別して別異の實體とする。かくして二元論は諸層を有して存在して居るのである。

物體の觀念中明晰判明なものは感覺的性質中には存しない、是は想像(表象)作用の結果として知覺せられるものであるから、之を除き去つた所に物の性質が得られる。其は即ち空間、延長性(Extensio)である。其故に感覺的性質を此延長性的關係によつて説明する事が物體の學即ち物理學の任である。而して物體の本性は擴まりに他ならないから、物體の學は全然空間の學たる幾何學から演繹せられるものである。物體自身はたゞ神の力を機械的に傳達するものに他ならないとせられて居る。

(ロ) 心 身 の 關 係

此機械觀によつて生理學も説かれるのであつて、動物は全く一の自動機械に他ならなくな

る。然も人に至つて精神が生ずると共に別種の實體となる。精神の本質を思惟性(Cogitation)で表す。之と延長性とは全く獨立に沒交渉であるが、ただ感情に於ては精神のみから説けない不明の點があり、是は物體作用に因るものと見なければならぬ。隨てここに兩者交渉の場所を求めなければならぬが、デカルトは之を腦の一部たる松果腺なりとした。此説は何等根據のないことで此學說の弱點であるが、デカルトは松果腺中に於ける血液及び生活素の動搖が思惟に影響して諸情を生ずるとした。根本の感情は六種である。驚歎、欲求、愛、憎、喜、悲即ち是である。而して是等の情に囚れない所に倫理の理想が存するとした。

二二 二元の聯絡

(1) デカルト派

デカルトの説は近世思想の初めて確定した形式を以て顯れたもので、其の所説の明瞭と其の文辭の流暢とによつて忽ち人心を動かした。就中最も早く此説を傳へた所は此哲人の生涯の大部分を送つた和蘭であつた。蓋し當時和蘭は西班牙の羈絆を脱して文化興隆し諸大學競

つて新説を攻究して居た。ユトレヒトのレネリ、レギウスを初として、レイデンにも信奉者が多かつた。獨り哲學のみならず、神學、醫學、物理學の方面から之を奉ずる者も多く、中には反てデカルトの眞意を脱するものもあつた。然し之が爲に又反對も多く、反對の學者はジュースト派などと結托して、終に一六六三年にはデカルトの諸著を禁書中に編するに至つた。

佛國に於ては當時寧ろ反對の感覺論などが持て囃されて、加ふるにジュースト派がジャンセニズム派を壓迫する政策に混入せられて、一六六七年には墓碑建立の禁止となり、一六六九年より一六七五年までは勅令によつて大學内で此説を講義する事が禁ぜられるやうになつた。然し其倫理説等は文學者を経て世に傳はり、終に其哲學は婦人の社交場裡の話題としても缺くべからざるものとなつた。之が爲に一方には益反對の氣運をも強めたこともあるが、大勢は抗すべからず、遂に學者の間に之を補正し改良する企圖を生ずるに至つた。而して其學說の難點中最も著しいものは二元論であつたから、先づ之を改造する諸説が出た。更に一方には其自己意識標準の説から神祕説を導き又懷疑説を喚起した所もあつた。

(二) 機縁説

佛國のデカルト派中最多く普及と改造とに努めたのはロオール(Rohault)及び其の弟子レジス(Regis)であつた。前者はデカルトとアリストテレスとを結合せんとし、後者は更に進んで神を唯一原因とし自然物は其の器具たるに過ぎないとした。故に心物の交渉もただ神意によつて生ずるもので、心は物の運動を生ぜず、ただ之を導くものであるとした。此思想が發展して來てルイ・ドゥ・ラ・フォルジュ(Louis de la Forge)は人の意志を意識作用の直接原因とし、然も無意識作用の原因は之を神に歸した。ジェロー・ドゥ・コルデモア(Gérard de Cordemoy)は此人意も亦神が一體から他體へ運動を傳へる機縁(Occasion)となるに過ぎないとした。此思想は獨逸や和蘭にもあつたが、是等を大成したものはゲーリンクスであつた。ゲーリンクス(Arnold Geulincx 自一六二五至一六九九)は白耳義のアンヰールは生れ、ルヴァンの教授となつたが、ライデンで窮死した。生時出版した論理學、倫理學の他に遺稿として形而上學、物理學が出版せられて居る。

デカルトによると明晰判明に意識せられる作用は自己に屬するものであるから、然く明晰

ならざるものは自己以外の他體から出たとしなければならぬが、然し心以外の物體が心に影響する事は出来ないから、之を神に歸さねばならない。例へば感覺に於ては物體の作用が直接に心に來るのではなく、物の作用する時に、神が之を機縁、偶因として我心に觀念を生ぜしめるのである。反對に物が意志の作用に影響せられるやうに見える時も同様である。此點から之を機縁説又偶因説(Occasionalism)とす。

神の干涉の時機を初は各時としたが、其れでは罪業も神を原因とせねばならぬ事になるから、其干涉を初の一時に限つた。之を時計の比喻で説明し、二個の時計が同一の時刻を指すのは両者が互に影響するのだと説くのは普通の心物相關説、兩者を絶えず同様に運動せしめるとするのは毎時干涉説、之に反して精巧なる機械装置を熟練な職工がした爲だと見るのは眞の機縁説だといふのである。此比喻は後ライブニツの名で専ら聞えて居る。

(三) 神 祕 説

之に稍接近した説はマールブランシト(Nicole Malebranche 自一六三八至一七一五)の神祕的傾向を帯びた説である。デカルトとアウグスティヌスとを調和せんとしたもので、其著『眞理探求論』

(De la recherche de la vérité. 1675)は其の深奥の説を述べたものとせられて居る。

デカルトの説を推窮すれば萬物の作用は皆神から發したものでなければならぬが、之と共に認識作用も亦神力によるものとしなければならぬ、何者、心物の間には直接の交渉はないから。今觀念中「他人」に關するものは「自己」から類推せられるであらうし、「物」は「神」によつて生ずる。故に知識の中で根源的なものはただ「神」及び自己に關するものだけである。就中神の知は最明晰なもので、自己認識の確實なのは畢竟自己を以て神の一部とするからである。他の知は皆派生的であつて自己隨て神を通すものである。故に曰く、我々は萬物を神に於て見ると。

之から一步進めて、形而上學的に萬物は皆神の中に其の觀念として存在すると言へる。蓋し神が物體の觀念を有限的本體の心に賦與する所以は、自己が之を有して居るからである。然るに神は一の「心」であつて其の觀念を自ら産出しなければならぬ、即ちプラトンの所謂「イデア」の如きものが神中に存して物體界の原型となつて居るのである。故に我々の認識するものは物體其のものではなくして神中に於ける物體の觀念である。然るに之が實物の認識と符合する所以は神が其の全能の力によつて其の觀念的物體界を實在的物體界に改造し

たからである。其の物的觀念の本性は擴りである。故に原的觀念は叡智的延長性の觀念で之から變形によつて諸觀念が生ずる。空間が物體の場所であるやうに、神は精神の場所である。斯くしてデカルトの理性論は、其の二元論の不合理を救はんとする企圖の爲に非理性的な神祕主義になつて來たが、此神祕説は一方には又知識に對する懷疑説と結合した。

(四) 懷疑説

デカルト哲學は其初、懷疑派から出發して居たのであるから、其の精神を固守するものはデカルトが後年に至つて唱へた獨斷的定説に満足する事が出来ないやうになるであらう。例へば英國のグランギル (Joseph Glanville 自一六三六 至一六八〇) の如き懷疑即ち「スケプシス」を其の原義に従ひ不斷の研究の意に解した。佛國に於ける懷疑家中には(一)神祕に越くものと(二)懷疑を徹底するものと(三)二種がある。

(一) 懷疑的神祕論

パスカル (Blaise Pascal 自一六二三 至一六六二) は即ち此説の代表者である。數學者で初デカルト説を奉じ、後哲學に背つて宗教に奔つた。其著『隨想錄』(Pensées)は著名である。

バスケルはブルーノやデカルト等の如く世界を無限だとして、心を以て之に比すれば倏忽的で言ふに足りないとした。心と物との二元を人は具へて居るが、物體として見れば他の物に比して「絶無」といつてもよい。人は「葦」に過ぎぬ、ただ異なる點は「考へる葦」(un roseau pensant)たる所にあるのみであつて、ここに其の偉大なる點がある、即ち人は「無」と「全」との間に位するものである。

是等物心界を超越して愛の超自然界がある。神は心情(cœur)に直接に示現するものであつて、哲學は抽象的神を説くを得るが此愛の神を説く事は出来ない。此に知の効果を疑つて神祕に入る所以が生ずる。要するに人智は薄弱であるから人々はただ歴史的天啓教に赴くべきのみである。

(ロ) 絶對懷疑説

バスケルと同じくデカルトに反して教會に赴いたものにはユーエ(Pierre Huet)とス友人もある。然し懷疑を徹底した人にはピエル・ベイユ(Pierre Bayle 自一七〇七至一七〇六)がある。其著『歴史的及び批評的辭書』は有名である。初めデカルト説を奉じたが後之をも捨てた。二元論は惡を説くが、知信の事に關しては表面信仰を重じて教權主義の假面を冠り、然も之によ

つて、人性を壓迫するを欲せず、人の行爲を支配するものは信仰よりも自然の性情だといつて、倫理上にも宗教の寛容を望んだ。

第四節 神祕的理性論

一 神に酔へる無神論者

デカルト哲學の二元論に含まれる難點を救ふ爲に一元論的解釋を試みる者が種々出たが、論辯巧を極めると共に遂に神祕に流れ懷疑に陥り、初の理性論と遠ざかつた。此際に又理性本位の思想を徹底して一元論を説く者があつた。心と物との別が爲に没したのみならず、神と世界との別も亦没した。デカルトは曰ふ神と自然(Deus et natura)と。今新説に曰ふ、神即ち自然(Deus sive natura)。是が即ちスピノザの説である。かく神と自然とを同一視するから、一面から見れば其の自然主義が普通の唯物論無神論と同一視せられるやうになる。斯くして一方からは排斥せられて居たが、後レッシングによつて賞讃せられ、ゲーテによつて其思想は取入れられた。以後カント哲學と正反對の思想の如くなつて居たが、自から隱約

の間に勢力を有するやうになつた。現今に於ては一派の思想家から唯物論的たる點に於て反て推賞せられて居る。

スピノザ (Baruch d' Espinoza 後 Benedictus de Spinoza) は一六三二年和蘭アムステルダムに生れた。西班牙から葡萄牙に逃れ又此地に移つた猶太人の末である。猶太人は此地で初めて多少自由を得、其居住の地も繁榮した。スピノザの父は富有の商人であつて、學事にも理解があつたので、スピノザは早くから完全なる教育を受け、十五歳の時既に希伯來の古典に通じたと言はれ、師にも望を囑されて居た。然しスピノザは之を以て足れりとせず、私かにデカルトの書を読み、又別に深く羅旬語を修めた。斯くして漸次其の宗派から離れて行つたので種々の風評が傳はつたが、スピノザは之を意に介しなかつたので、終に一六五六年破門となつた。

斯くしてスピノザは獨立自活の途を講じなければならぬやうになつた。猶太教戒律の教 (Talmud) に従へば、學業を修める者は同時に何等かの手工を學ばねばならなかつたが、スピノザは眼鏡磨きに長じて居たので之を以て其の口を糊し、傍ら學を攻め友と交つた。爾後アムステルダム附近から和蘭諸都府を轉々して、終に海牙に永住した。其の著『神學政治論

策』(Tractatus theologico-politicus) が宗教家其他の人々の怒りに觸れ、爾後其大著も出版する事が出来なくなつた。一六七三年ブファルツ侯から其領内のハイデルベルク大學の教授に聘せられたが、自由を束縛せられ研究の時間を殺ぐ事を恐れて之を辭した。其他種々の利益ある提供もあつたが之をも顧みず、質素の生活を送つて居た。斯くして一六七七年、十數年來の宿痾再發して急に病歿した。其の恬淡寡慾の生活は正に其の哲學を身に體し得たものと言つてよ。

其の著は前記『神學政治論策』の他に、早くデカルトの哲學原理を幾何學的方法で論證したものがあつた。其の大著『エチカ』(Ethica) は語義からすれば「倫理學」であるが、實は哲學全體に涉るもので、初め普通の論文の形で書かれたものが、後、幾何學の體裁に倣つた組織に改められたのである。此書は遺稿として出版せられたが、其の原論文らしいものは後に發見せられ、『神、人及び其幸福に關する短論文』(Korte Ve-handeling van God, den Mensch, en de zelfs welstand) とははれ、通常「短論文」と略稱せられて居る。其他數著あつて全集となつて居る。

二 スピノザ説の淵源

スピノザの思想を一言にすれば自然と神とを同一視して、心と物とを其屬性とするもので一種の汎神論的一元論である。此思想は一神教の中には珍らしいものであるから、史家は其の淵源に就て各説を立てて居る。普通にデカルトの二元論から機縁説を経て此一元論的併行論となつたといふのは年代の順序に於て多少無理がある、何者、スピノザの説の方がゲーリンクスのよりも前に出て居るから。其他少時學んだカバラ中の新プラトン説や、ブルーノの説何れも全然同一とは言へない。要するにデカルト以來の理性論(及び數學物理学の思想)とカバラ等の神祕思想とが相結合してここに一見矛盾する如き神祕的理性論を生じたのである。而して全體に互りて宗教的精神に充ち、知は其の人知完成論に説いた通り、畢竟神を知り、之を愛する事によつて至上の福祉を與へるものたるに他ならない、として居る。即ち此點に於て無神論者を以て目せられたスピノザは實はノヴリスの言つた通り「神に酔へる」といふべきである。然しながら其の所謂神は多數宗教家の所謂神と全然同一とは言ひ難い點もあるであらう。

然も此趣意を表す爲に擇んだ方法は一見乾燥無味な幾何學の方法であつた。蓋し是れ當時數學を以て學の理想とした爲である。其故に『短論文』の組織を故らに書き改めたのである。然し亦一面には此形式は其學説と一致する所もある。蓋し汎神論にあつては萬物は神から生ずるものであるが、之と同じく知識も亦其の基礎たる神から生ずる、とするには、演繹法による事が最も便であらう。従て數學殊に演繹的な幾何學の方法に従ふやうになつたのである。且つスピノザは一面には近世科學の影響を受けて居るが、然し其の用語等に於ては中世を脱し得ないから、既定の語に新解釋を施せばよいとする傾きがある、此點に於て頗るスコラ哲學の面影を脱しないのである。

三 神 即 自然

(1) 實 體

幾何學は空間の直観を基礎として其の性質法則を演繹するものであるが、幾何學的方法の哲學に於ても此の無限絶對の空間に相當するものがなければならぬ。此の如きものは神であつて、而して是が即ち眞の實體である。即ち此實體の究明がスピノザ哲學の基礎でなければ

ならぬ。實體は萬物の根基にして究竟の原因である。即ち論は此原因の説を以て初とする。原因の極は自己を自己の原因とする事である。故にスピノザの學説は自己原因 (causa sui) の定義から始まる。曰く、自己原因とは其の本質中に存在性を含有するものであると。即ちそれは自ら存し獨り解せられるものであるが、此の如きものは實體 (substantia) に他ならぬ。即ち實體は自己原因であつて、他によつて制約も制限もせられない。故に絶對的無限物で、之を神といふ。是は唯一でなければならぬ、何者、雑多は差別を含み、差別は有に對する無を豫想するからである。即ち一切は此實體が其の變形に他ならず、即ち一切は神の必然性から續出するもので、神は絶對の原因である。而して此原因は内在的なもので、自己は他の結果ではないから、自由原因と稱せられる。かくして神は力である。世界は此神から必然的に永久に産出せられるもので、其は恰かも三角形の本質から其諸性例へば「三角の和は二直角に等し」の恒常に生出するやうなものである。

従て此無限の必然的效果から特に或性質を抽出して決定する事は反て他を拒斥することになつて之を否定することになる。故に「凡ての決定は否定」といへるのである。斯く神性を完全に現すには一切の有を否定することとなり、即ち神は何等性情を有せず、知も意もなく

隨て人格もない。人或は此語を用ゐて神を表すが、是れ全然別種の意義を有するもので、例へば canis (狗) といふ語が動物と星宿との兩義に用ゐられるやうなものである。即ち世界は神が自ら識る所もなく、必然的法則の下に結論として生ぜしめたものである。此世界も神も同じく自然 (natura) であるが、ただ前者は所産的 (natura) であるのに對して、後者は能産的 (naturans) である所を異にする。

(II) 屬性

神は萬物の原因で萬物を制約するから、神中に決定性即ち性質がなければならぬ、之を屬性 (attributum) とす。然るに此事は神の無決定である事と矛盾するやうに見える。此に種の難點がある。

先づ屬性の定義には「知力が實體の本質を構成するものとして之に就て知覺する所のもの」と言つてあるが、もし知力の知覺といふ事に重きを置けば屬性は認識の形式となるであらう。史家エルドマンはヘーゲルの意を繼いで然く解するが、フィッシャーは之に反して之を實體自身に具はるものとする。然らば屬性は實體と殆ど同様の無限性を有たなければならぬ、而して其數も亦無限であるべき筈である。然一なる實體して何如にが斯も無限の多數となり得

べきか。實體自身既に此多を具へると見る論者もあるが、其れでは一元論を去らねばならぬ。或は之を力の作用と見るもの(フィッシャー)もあるが、之とても一が多となる事を豫想して居る。キンデルバントが幾何學との比較により、空間に對する次元の如きものと見て居るのは一種の案とするに足りるものである。然し根本の矛盾は如何にしても去り難い。かく無限數の屬性中ただ二のみが人の直觀に現れる事は、無限數の次元中ただ三次元のみが我々の世界に存すると同一である。所謂二屬性は延長性と思惟性とで、ここにデカルトにあつて二實體とせられたものが、一體の屬性とせられるに至つたのである。

(三) 様 態

屬性は實體と殆ど同一の資格を有するものである、即ち原因としての自然であるが、之に對して結果としての自然を示すものが第三の根本概念たる様態(Modus)である。結果は他に制限制約せられる、之を有限的といふ、即ち他の中にあつて他によつて會得せられるものである。斯く様態は實體の中にあつて、然も屬性のやうな無限性を有たない。有限的性質とは無限的性質の決定或は制限せられたる表白である。即ち様態は屬性の特殊有限的形式である。故に様態と實體との關係は形狀と空間との關係と見られ得る。此の意味に於て之を變形或は

感受といふ。之を一々に就て考へれば有限的であるが、之を全體として見れば其連續は無限である。

實體から延長及思惟の二屬性が出るが、延長の様態は物體(corpora)、思惟のは觀念(ideae)而して實體一般の様態としては個物(res particulare)である。而して是等の様態がなければ屬性も發現しない。各様態或は個物は互に因果相連結して實體から直接に續出するものではない。然も神は畢竟是等萬物の連結の原因であるから隔絶しては居ない。即ち内在的原因である。故に此點から又自然即神と言へるのである。

(四) 物 序

個物は必然的に實體から續出するが、各個物は互に因果的に相連結して居る。斯くして因果關係に二種の別を生ずる。一は無限制的で第一原因即ち自己原因から生じ、一は有限的で第二原因から生ずる。各個物は何れも第一原因ではないが、此關係を物序(Ordo rerum)といふ。各個物は其の本質中に存在性を有せず、故に自由もなく又目的もない。人が自由と信ずるのは、投げられた石が自由と信するやうなものである。自然は一定の順序即ち因果關係で支配せられて居る。

是等個物は二の屬性に分屬するから、一切物は是等兩界に分れて居て、互に獨立な因果關係をなし、其等の間には交渉がない。觀念は觀念により、物體は物體によつて説明せられる。然も兩者畢竟同一實體の別異の形態であるから、兩界の序規は結局同一である。かくして物心は一體の兩面として併行するものである。

物體は運動によつて區別せられる。ここに物理學の原理が成立する。其構成によつて單純なるものから複雑なるものに至るが、人體は其中でも最複雑なものである。而してかく完全に物力の増加すると共に心力も亦増加する。凡て物力が増せば、外物によつて自ら變する性も生ずる、之を受態(*affectio*)といふが、心に就ては感受又感情(*affectus*)といふ。之に能動的と所動的とがあるが、人心は因果連鎖中にある限り、所動的でもある。所動的感受は即ち情緒(*passio*)である。是に於て情緒及び之より解脱する方法如何の説が生ずる。

四 神の知的愛

斯くして倫理論は情緒の説に入つた。從來情緒を説く者は直ちに其の害を説くが、科學的沒價値觀を取るスピノザは先づ虚心平氣に情の性質を検せざるべからずとした。『政治論策』

中に「不笑不訴不厭唯知」(*Non ride e, non lugere, neque detestari, sed intelligere*)云々のが、此態度は今此處にも顯れる。此事に就てはデカルトが既に之を試みて居るが、スピノザは之を詳説し、更に之を演繹せんとしたのである。即ち「直線や平面立體を論ずるが如く人の行爲及欲求を考察しよう」としたのである。

先づ情緒の必然的で體系に入るべき事を示さねばならぬ。蓋し若し人心が獨立體であれば情緒は偶然的の障りで幾何學的に説く事は出来ないが、人心は因果中にあるから、他の作用を受けるので、情緒は必然的に存在せねばならぬ。かく凡て個物は他の影響を受けるから、他物の爲に消滅せられる恐れがあるので、個物は之に抗する事を努める。人性にあつては之を欲動(*appetitus*)と云ひ、殊に意識に伴はれる場合に意欲(*voluntas, cupiditas*)と云ひ、此努力を益するものを善、否らざるものを惡といふ。然るに感情中にも亦身體の能力を利用するものと否とがある。前者の際は其感情によつて意欲が肯定せられ、後者の場合は否定せられる。前者は満足後者は障りで、即ち喜悅と悲痛とを生ずる。而して喜悅の原因には愛、悲痛の原因には憎を感じる。此の如くして次第に諸情緒を演繹する事が出来る。而して其の根本は欲、喜、悲である。

情緒の存する爲に、人々は團體生活によつて自己保存の目的を達しなければならぬ。然し内的には精神自身の之に應ずる作用を要する。

精神は物體の觀念として、其本來の作用は認識をなす事に存する。認識に種々の段階があるが、感覺は最下、之より導かれる概念から、更に進んで合理的知より、直覺的知となつて最高の知に達する。之によつて個物の連結せる全體を知る事が出来る、即ち各物を「永久の相の下」(sub specie aeternitatis)に知る事が出来る。此境地に達すれば解脱をなし得るが、然し本來情の繫縛は情によつて脱離すべきものである。此に倫理の問題が生ずる。

情緒に囚れざる生活は即ち道徳的生活であるが、意が之に應ずるものとなり純活動的とならねばならぬ。是れ完全なる知と結合する意に於て達し得べきもので、此場合、知と意とは同一である。即ち明瞭なる知を得れば意も力を得る、是が所謂徳である。ここに能動的感情が生じて所動的感情即ち情緒を驅逐する事が出来る。情緒に制せられないやうになるには明な知を得なければならず、此知を得、力を得れば喜悅を感じ、喜悅の原因には愛を感じる。而して明知は神を知る事であるから、此愛は即ち神に對する愛である。然も情によるものではなく、完全な知と結合した愛である。知の如く永久的である。之を神の知的愛といふ。

人々は此愛によつて無限の喜を得。然も此人々の心は畢竟神の發現であるから、此愛は神の自愛である、即ち人は神を通じて相互を愛し、最上の福祉法悦を得るのである。

是に於て實體から必然的に續出した個物は又必然的に實體に歸するを得るのである。スピノザは、此事は至難の道であるが存し得べきものである、凡て高貴なるものは稀にして又難い、と結んで居る。然もスピノザ生涯をのよくは之體現したものである。

第三章 啓蒙時代の哲學

第一節 英國啓蒙哲學

一 經驗論の組織

(1) 總 說

文藝復興の自由精神は主知主義の哲學體系となり、漸次社會の各層に普及して思想を革新した。之が爲に種々の迷信は破壊せられ、陋習は改良せられたが、之と同時に哲學は通俗となり、思想界は理智に偏する短所も生じた。之を啓蒙運動 (Aufklärung; Enlightenment) といふことは既に述べた通りで、即ち十八世紀の通勢であつた。就中、其の先驅となつたのは比較的自由であつた英國であつて、之から波及して佛獨に及んだ。而して諸國の啓蒙運動は各其の特色を有して居る。一言にすれば英國のは社會的實際的でよく社會と融合し、佛國のは文學的理論的で社會の實際と隔絶し終に大破綻を來し、獨逸では教育的學究的となつて

主として學理の解釋智識の開發に向つた。

何所の啓蒙も必しも嚴密に十八世紀から始まつた譯ではなく、殊に英國の如く此運動の根據となる學説を出した所に於ては、其の淵源を十七世紀に遡るべきは當然である。所謂根據とはロックの哲學であるが、實に是は其内容のみならず、形式から言つても平明で正しく此運動に適して居る。十八世紀の諸學説は之に合同し若しくは反對したものをたるに他ならないのである。

(11) ロ ッ ク

ジョン・ロック (John Locke) は一六三二年プリストル附近のウリントンに生れた。父は法律家であつた。一六五一年オックスフォードのクライスト・チャーチ・カレッジに入ったが、自然科學や醫學を好んで、此大學の課程たる中世哲學を嫌ひ、又デカルトにも影響せられたといふ。一六六四年伯林の公使館書記となり、歸來又醫學理學等を修め、アシユレー卿 (後シャフツベリ伯) の知遇を受け、卿と進退浮沈を共にした。一六七五年から一六七九年まで佛國に居住し、後一時和蘭に逃れたが、此地で、後英王となつたキリアムに知られ、晩年には要職を得て平靜なる生活を送り、一七〇四年に歿した。

著書中最初に公にしたものは一六八九年初め羅甸文で匿名で書いた宗教上の寛容に関する書簡であつた。是は後英譯せられ、引續き二、三、四と卷を逐つて出版せられた。然し其の最も重要なものは『人間悟性論』(Essay concerning Human Understanding)である。一六七〇年來計畫せられたもので、友人と會談する際、宗教道德等の問題に關して異説紛々たる有様を見て、先づ人知の性質を検せんことを欲したのが其の著作の動機であつた。斯くして一六八七年完成したが、先づ佛文の抄録として佛國の友人によつて出版せられ、一六九〇年原著が英國で出版せられたのである。其他政治教育宗教等に關する諸著があり、全集も出て居る。

(三) 『人間悟性論』

ロックは眞に經驗論を大成したる人で、其の趣意を説いたものは『人間悟性論』である。此著は前述の如き動機で出たもので、其中に目的を説いて、「人知の起源、確實及範圍を尋ね、併せて信憑、憶見、及び許容の理由及び程度を論ぜんとする」と言つてある。是は哲學史上新問題を提出したもので、後にカントの明説した知識問題解釋の先驅となつたものである。ただカントの指摘した通り之を心理問題と混同した缺點はあるが、然し是も此著の終即ち第

四篇を見れば、必しも然うのみは言へないと思はれるのである。とにかく全篇四に分れ、第一篇は觀念の起源に關する反對説を駁し、第二篇は之に關する自説を述べ、第三篇は言語論第四篇は知識の論となつて居る。

先づ認識の起源に關して、デカルトやケンブリッジ・プレートニスツ等の本有觀念説を駁した。蓋し本有觀念中最簡單なるものを思辨的(理論的)と實際的とに大別すれば、前者に就ては同一の原理及び矛盾の原理を擧げ得るが、是等は論者の言ふ如き一般的なものではない。小兒や蠻人等は之を認めない。或は現に知らないが意識して居るとか、或は發言すれば直ちに知られるとかいふが、是も其の本有説を證明する事にはならない。次に又實踐的原理即ち道德に關しては國土時代に於て一定して居ない。其他同一とか全と部とか神と實體との觀念等も決して本有的ではない、心は全く白紙(blank paper)である。此説を古來の用語に従て空區(Tabula rasa)説といふ。然らば觀念は何所から來るか、曰く經驗から。

所謂觀念とは凡て人が思惟する場合悟性の對象となるものをいふが、其の起源たる經驗に二種を區別する、即ち感覺と反省とである。前者は外感により、後者は内感によるものである。之によつて觀念に二種の別を生ずるが、一を單純とし、一を複雑とする。前者には(一)

一の感官によるもの(二)一つ以上の感官によるもの(三)反省によるもの(四)感覺及反省によるものの四種を區別する。(一)は色音香味の如きもの、(二)は形状の如きもの、(三)は思考、意欲、(四)は快苦、存在等を指す。(一)は最简单ではあるが、外物を描寫しては居ない、感官の作用によつて生ずるものである。外物自身に具はるものは形状大小等(二)に屬するものである。故に之を第一物性といひ、前者を第二物性といふ。此區別はデモクリトス以來常に存するがロックの名によつて最著名である。

是等簡單なる觀念の結合より單純觀念は生ずる。之が爲には記憶聯想抽象の三作用を要するが、斯くして生じた觀念は全く主觀的であるから、客觀的には妥當して居ないものであらう。是等の觀念を大別して(一)様態、(二)實體、(三)關係の三とする。(一)は自己の獨立存在を要せざるもの、例へば空間時間等、(二)は其自身存在するもの、(三)は諸觀念の比較から生ずるもの、例へば因果關係、前後關係等をいふ。實體其自身は知る事が出来ない、故にただ語として顯はされるのみである。是に於て言語の研究が必要となる。此に第三篇言語論がある。

第四篇に於て認識の種類範圍等を論ずる部分は、認識論の根本問題である。自己の心狀に

關する單純觀念即ち内感の單純觀念は實際狀態の描寫であるが、外界認識即ち外感によるものは實は實物と符合することを必しない。其故に實體に關する形而上學は存在しない。眞理といふのは觀念と實體との合一ではなくして觀念相互の關係によつて生ずるものである。此關係を表するものが判断或は命題である。其關係に同異、様態的及因果的關係、共在、存在を説くものの四種があり、第一は自明であつて第四は全然自明でない。而して知識の中直覺的と論證的とは共に確實であるが感覺的なものは不確實である。かくして經驗論中に適宜に理性論を混合し得たのである。

ロックは宗教、政治、教育等に關して其の經驗論を基礎として自由を主張した。此説は穩健な形で説かれて居たが、後佛國に入つて極端な結果を生じた。

二 自然主義的思潮

(一) 道徳論

ロックの道徳説はホブスの他律説を繼承し、國法に加へるに輿論と神法とを以てしたもので、其説は明瞭平易であり、殊に自然主義的で神學と分離した點に於て近世の自由思想に合

して居るが、其の説明の内容に至つてはなほ他の見解を容れる餘地がある。即ち道德を以て人性内部から發すると見る説である。本有觀念を主張してホッパスに反抗したケンブリッジのフロントン學徒は又ロックの敵でなければならぬ。カッドワース、カンバランドなど皆然うで、後者は道德の基礎は仁惠心に存するとしたが、是等の説は後クラーク、チラストン (Samuel Clarke, William Wollaston) によつて益發展せられたが、之を知的直覺説とす。

之に對して情的直覺説と名づくべきものがある。ロックを庇護したシャフツベリ伯の孫シャフツベリ (Anthony Ashley Cooper, Earl of Shaftesbury 自一七〇一) は、道德判斷を一種の趣味判斷とし、美と善との合一を説く所頗る希臘的である。然も其善が畢竟調和に歸するとした點は主知的形式的啓蒙的たるを脱しない。此調和は自己的及社會的性情の調和であるが此調和を考慮によらずして情熱によるものとした所に其の特色がある。此説を組織したものはハッチソン (Francis Hutcheson 自一七〇四) である。シャフツベリの用いた道德感 (Moral sense) といふ語を其説の基礎として、恰かも美醜を感別し得るやうに善惡も亦感別し得べしとした。其他又バットラー (Samuel Butler) 等も此派に屬すと見られる。

かく人性中に道德的性情が存すと見る説に對して、人性は全然非道德的なもの、利己的な

ものであると見て、更に道德自身も此利己心の變形若くは假面に過ぎないとするものもある。マンドキルの『蜜蜂の寓話』(Mandeville, Fable of the Bees) は其著に「私の不徳は公の利益となる」といふ副名をつけて、其理を寓話的に説明した。此の意見は多少奇矯に流れた點もあるが、又十八世紀の思想に適合したものと言はねばならぬ。然し之に對して又利己心の人性に固有なことを主張するものもあり、英國に於ける心理倫理の研究に進歩を生ぜしめた。是等の説が漸次其の論點を明にする結果として、利己利他を結合する説を生ずるに至つた。ペリー (William Paley 自一七〇五) は神法を以て道德の根源とし、之に服従することと人の利益とを結合した。是等の思想は更に進んで、ペンサム、ミル等の功利主義を生じた。然し是は寧ろ十九世紀に屬するものである。

(II) 宗教論

十八世紀の宗教思想は自然主義の道德論と關聯して居る、一言にすれば道德と宗教とを合一するもので、自然的即合理的とし、宗教の基礎は傳説教義を離れた人々の本性に存するものとした。即ち人の理性によつて神を認識し得るものとなしたもので、此體から普通の有神論 (Theism) と區別して理神論 (Deism) とす。

今是等の理論者中主要なるものを挙げれば、ハーバート(Herbert of Cherbury 自一五八一至一六四八)はロックの白紙説に反して宗教的本能が人性に具備すと説き、トールランド(John Toland 自一六七〇至一七三二)は自由思想家として宗教に公開的と内秘的とを分ち、主として天啓の説を批評した。其他ホイストン(Whiston)は新約聖書中の事實と豫言とを比較し、ロリンス(Anthony Collins)は此豫言を寓言的に解し、ウールストン(Thomas Woolston)は奇蹟を論破した。ティンダル(Mathew Tindal 自一六五六至一七三三)は進んで、一切の成立宗教を以て自然宗教の變形となし一部は史的事實、一部は僧侶の傳説だとした。斯くして宗教に對する敬遠主義が此時代の風潮となつたが、ボリングブローク(Lord Bolingbroke)に至つて、終に宗教を以て愚民の爲に必要な方便に過ぎないとした。

(三) 科學

此思潮の下に科學殊に自然科學の發達したことは當然であつて、從來の目的觀は駁撃せられた。然も宗教は科學と結托せんとするので、此に其目的觀と科學的因果觀との間に種々の關係を生ずる。即ち生物界に關しては依然目的觀が採用せられた。無生界に關しては目的觀は個々の事實に存しないが、又一種の結合を得た。ロバート・ボイル(Robert Boyle 自一六二七至一六九一)は

始めて其の物理説を宗教と結合せんとしたが、此精神を大成したものはニュートンである。科學研究法としては分析と總合とを用ひ、隱力説を排し、一切の假説を棄てたが、然し一面には其の宗教心から此必然法則を解して神の存在に關する物理神學的論證を立てた。

斯く自然科學の中には反て宗教と結合するものもあつたが、其の結論を徹底すれば一切を自然的而して物質的に説明するものとなり、生活も精神の作用も物質的機械的に説かれるやうになる。斯くしてエラスマス・ダーケン(ハートリー)は心即物とし、ブリーストリーは精神作用を生理的に説き、ハートリー(David Hartley)は人心を聯想作用の機械組織で説明しようとした。然し是等の論を一步進めたのは佛國啓蒙である。

三 經驗論の發達

(一) 感覺論的唯心論——パークリー

經驗論は一方には當時の啓蒙思潮に合して自然主義理性主義から進んで唯物論に傾くと共に、他方には之と正反對な唯心論宗教主義を生じた、而して之と共に經驗論中の曖昧な點は明晰となつた。パークリーの感覺論的唯心論即ち是である。

バークリー(George Berkeley 自一七四五)は愛蘭の人で、ダブリンで學び、ロック、ボイル、ニュートン等を究め、佛伊等に旅行し、嘗て米國に理想的の村落を作らんとしたが成らず、晩年には敬虔なる僧正となつて生を送つた。其著には『視覚新論』、『人知原理論』(A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge)、『ハイラスとフィロナスとの三對話』(Three Dialogues between Hylas and Philonous)等の諸篇がある。

ロックの感覺反省の別は徹底しない、兩者は畢竟程度の別で、之を感覺の一に歸し得る。而して外的感官の感覺論と内的感官の感覺論とを區別すれば、バークリーのは即ち後者である。ロックは概念の實在を拒んだが、なほ其の人心中の現象として存在し得べき事を唱へた。バークリーは之を矛盾なりとし、人々が物を思惟する時は必ず或る個物を表象するもので、所謂概念は抽象的ではなく表現的のものであるとして、心理的に唯名論を主張した。かく概念はないから、「物」とか「性」とかいふやうな一般的意義を有するものは空名である。隨て空間形狀等も存在しない、ロックの所謂第一物性も特別に存在せず、其性質を有する本體も存しない。其故に存在するものは知覺のみである。「在るとは知覺されるとである」(esse = percipi)。かくて物體は知覺の總合とせられるが、是は一見常識に反するやうで實は然うでな

い、何者性質を離れた實體こそ哲學者の空想であるから。斯くして世界の事物は悉く知覺せられるもの即ち觀念に他ならない。此點から其説を觀念論といふ。

然しバークリーは更に進んで曰ふ。觀念があれば之を擔ふ者がなければならぬ、是精神(spirit)である。其故に精神は存在し、然も無數にあるべき筈である。而して是等諸精神の觀念に相違する所がある場合には之を決する標準として大精神がなければならぬ、之を神とする、神の觀念ならば悉く眞となる、他は隨意的で誤り得る。斯くして世界は神の觀念で全然目的である。即ち唯心論(Spiritualism)で然も有神論的であつたのである。

是は觀念論と唯心論との結合を示したものであるが、議論としては知識問題と形而上學問題との混同を免れない。但し其説の歸着點はマルブランシュと同一であつて、當時英國に其説を傳へた者にはノリス(John Norris)がある。又別にコリアー(Arthur Collier)がある。

(II) 懷疑論的實證主義——ヒューム

バークリーは因果觀念を以て非基督教的として目的觀を執つたのであるが、是れ近世學術の主要概念を拒むものである。而して純然理論的方面から同一の結論に達したものがヒュームである。

ヒューム (David Hume 至一七七一) は蘇格蘭エディンバラの人である。大學卒業後佛國に赴き、歸來『人性論』(Treatise of Human Nature) を著はしたが難解の爲に讀まれなかつた。其後論文集を出すに及んで世に認められ、後エディンバラ法曹會圖書館の長となり、文書を涉獵して英國史を作つた。其哲學上の主著は前記人性論の他に、其趣意を簡略にした人間悟性論研究 (Enquiry concerning Human Understanding) 其他道德宗教の論等である。

ヒュームの説は經驗論發展の極で、而して其の認識論の根柢にはホッブスから傳はつた大陸風の理性主義がある。然し直接の傳統は固よりロック、パークリーである。パークリーに讚して經驗を感覺の一に歸する。一切の認識を本源的と派生的とに分ち、之を印象及觀念といふ。而して觀念は印象の模寫であるから誤謬もない筈であるが、然らば如何にして觀念中に虚妄なるものが生ずるであらうか。

之を記憶の例で説明する。蓋し記憶の誤謬は其の心像と原觀念との關係を誤まることに存するやうに、虚妄の觀念は觀念と印象との關係を誤まることによつて生ずる。兩者の結合は想像作用と稱すべく、而してそれは聯想の法則に従て生ずる。其の法則には、類似、接近、因果の三種あるが、是等は主觀的な結合であるから其の正否如何を検しなければならぬ。

類似の聯想は單に觀念の性質から生ずるもので全然機械的であり、隨て其の方法は正當である。故に同異を明にする判断は確實であるが、此の如き判断から成立する學は數學のみである。隨て事物に關する數學的關係は確實な知識となし得る。數學のみが唯一の純粹分析的論證學である。然るに人々は是以上に觀念内容にも一定不變の内容を想像して、本體と名づける。即ち觀念の均等から形而上學的同一性の觀念を作り、之を本體として性質が附するのだとする、然し是は觀念の恒常的結合を印象的として説くに他ならない。物に就て然う言へるのみならず、心に就ても然う言へる。故にパークリーの唯心論は不徹底である。所謂自我は「諸知覺の束」に過ぎない。

次の空時上の接近も亦直接に知覺せられるから、此聯想も亦正當であるが、然し是は外部の關係で、觀念自身の性質によるものではないから、ただ事實として承認せられる丈けであつて論證することは出来ない。即ちそれはただ事實の學として成立するもので論證的ではない。然るに之に必然的意義を與へんとするものは因果的聯結である。知覺はただ前後等の關係を示すものであつて必然的意義を有たない。ただ我々の經驗中 a b 二觀念が屢々相連續して起ると、此に習慣性の感情が生ずるのであつて、是が因果の觀念となるのである。主觀的に

「此の後」(post hoc)と云ふ事が客觀的に「此の爲」(propter hoc)と云ふことに解せられるやうになるのである。即ち因果關係はただ信(Belief)によるのみである。

斯くしてヒュームは科學の根本に疑を懷き、ただ事實的證明のみを許したのである。故に之を懷疑的實證主義といふ。ヒュームは實に十八世紀に於ける主知的哲學の一面の究極する所を示したものである。

其の宗教上自由の意見を持し、道德に於ては人性中の同情を基礎とする點は孰れも此時代の思潮を示すものである。此同情説は經濟學者アダム・スミスの執る所となつた。

(三) 蘇國常識哲學

ヒュームの説は種々の反對を招き、殊に同國人の間にも論議せられた。元來シャフツペリの説に影響せられて、美に關する研究も起り、バーク、ホーム(Edmund Burke, Henry Home)等の諸著を出し、美感趣味感等を人性より説くものが生じたが、此説を擴張して一切を人性より導かんとする説を生じた。常識哲學即ち是である。

リード(Thomas Reid 自一七九〇至一七九六)は『常識原理に基づく人心研究』(Inquiry into the Human Mind on the Principles of Common Sense)等に於て論じて曰ふ。ロックからバークリー、

ヒュームとなるのは當然である、然し其の終りの説の虚妄なる事を見れば、其の源のロックにある事を知る事が出来る。即ちロックの所謂白紙説は誤謬の因である、心には許多の根本判斷が存して居る、美や善に於ける如く眞にも亦然るもので、其の基は即ち常識にあるのである。後ステewart(Dugald Stewart)は此説を大成したが、孰れもヒュームの鋭利なるには及ぶべくもない。

第二節 佛國啓蒙哲學

一 啓蒙思想の發達

(一) 佛國啓蒙思想

十八世紀思想を最明白に又最極端に表示したものは佛國であつた。即ち此處には、知識は學者の手を離れ、文學科學を通して一般社會に傳はつて行つた。其故に一般社會の知識的水準は高まつたが、特に大組織として見るべきものは現はれて居ず、たゞ、文化史上極めて重要な意義を有する時期と見る事が出来る。歴史家は此佛國啓蒙を自國的と外來的との二者に

分ける。但し其の區別は嚴密に言へば明白ではない、大體に於て其間に發展聯絡の關係があつて、デカルト以來の、殊に之を中心とせる諸思想の發達が外國殊に英國の影響によつて一種特別の啓蒙を生じたと見られるのである。

所謂自國的思想の一として擧ぐべきものは神祕主義である、元來デカルト自身も既に自我を中心とする思想を述べて居たのであるが、當時デカルトの亞流が物質的説明に傾いたので之に對して、アウグスティヌスの流を汲んだ神祕家の一派は之に反對した。ピエル・ポアレ (Pierre Poiret 自一六四六至一七一九) の如きは宗教と理性との反對を唱へ、デカルトの能動的悟性即ち理性は學の形式的知識に關するもので、眞の認識即ち神に關する知識は所動的知性即ち感覺に他ならないとする。斯くして感覺主義に合し、又懷疑主義を導いた。此に第二の要素が生ずる。モンテニユ以來懷疑は佛國思想の一特色をなすもので、デカルトの哲學も亦初は其の精神に富むで居たが、其説が次第に定説を立てるに傾いて來たので、ユエー、バイルの如き懷疑家は寧ろ反對派となつたのである。更に第三にはデカルト以來物理學の進歩したことを擧げ得る。フォントネル、モーベルテュイの如きは其中著名の人であるが、之と共に實驗を尊んで思辨を排し、組織體系を立てることを嫌ふものも出た。

是等の思想は皆佛國思想の特色とすべきものであつて、之に新に外國思想が加はつて來て新機運の出現を促して來た。

(二) 英國思想の輸入

佛國啓蒙を外國(即ち此時代にあつては英國であつたが)の思想によつて豊富にした人としては先づブルテールを擧げる事が出来る。是より先き英國の理神論は主としてロックの書を通して傳はつて居たが、後期の思想を傳へたものはブルテールである。ブルテール (Voltaire) は眞の名を (François Marie Aronnet le Jeune と云ふ 自一六九四至一七七八) 初めジヘスト派の教育を受けたが、後之に反抗した。博學多才、宮廷劇作家であつたが、過失の爲に英國に放逐された。然も此間に此地の新哲學科學即ちロックとニュートンとの學説を學び、歸來之を佛國に傳へた。後フリードリヒ大王に聘せられて普魯士の官廷に入つたが、王と不和を生じて又巴里に歸つた。其著は多方面に涉つて居るが、其中哲學に關係あるものは『英人に關する書簡』『哲學辭書』(Lettres sur les Anglais; Dictionnaire philosophique) である。

ブルテールは才人ではあるが、別に哲學上の創見があつた譯ではなく、ただロックを激賞して其の説を基として居たのである。曰く、凡て觀念は感覺から成り、感覺は物質から生ず

る。物質の何たるを知るを得ざる事は精神の何たるを知るを得ざると異なる所はない。悟性は行爲の指導の爲に神の與へたもので、事物の本質を知らんが爲のものではない。人はただ物質の永久なる事を知るを得るものである。初め自然の合目的性を見て神の存在を證するを得べしとしたが、然も一七五五年のリスボンの大地震は其樂天觀に關する調刺の小説『カンドイード』(Candide)を生ぜしめ、成立宗教に對する許多の酷評を公けにせしめた。然し自らは無宗教を以て居らず、「神存せざれば之を發明することを要する、然も全自然は其の存在する事を叫び告げる」と言つて居た。

(三) 自然主義の發達

此の如くブルテールは事を曖昧にして置いたが、自然科学の發達は遂に之に止まらざらざら、後年ラブラースがナポレオンに對して、「己の世界説明には神を要しない」と明言するに至つた所の基を開いた。斯くして自然主義と唯物論、機械觀とは結合したのである。蓋し自然現象中、無機物に對して機械的説明を施すことには何等の困難もない。而して有機物に對しても、デカルトは既に人以外の動物に對しては機械觀を用ゐたが、此事は自然科学の發達によつて證明せられるやうになつた。ビュッソンの『一般及特殊自然史』(Buffon, His-

toire naturelle générale et particulière. 1794)は此意見を代表するもので、宇宙に有機的小分子が彌漫し其の機械的結合によつて生活體が生ずると説いた。後ラマルクの『動物哲學』(一八〇九)も此意を承けて進化論を説いた。更に一步を進めれば有機と無機との區別を没し、或は生を主とするロビネーの説などもあるが、寧ろ無生から生を説く方が時勢に適合して居た。而して之を代表する者はラメトリである。

ラメトリ (Julien Offray de la Mettrie 自一七〇九 至一七五九) は醫を學び、其の知識によつて精神を身體及物質の作用として説明する事を試みた。其著に『人即機械』(L'homme machine)とあるのは正に此意を示したものである。デカルトの説を一步進めれば動物のみならず、人も亦機械と看做されなければならぬ。精神作用は悉く腦髓の分泌作用に過ぎない、故に靈魂は不滅ではない、神は宇宙の精神であらうが、宇宙の腦髓はないから神も存在しない。道徳は物的快樂を目的とする、故に之を害する良心は無用である。此の如き奇激の言を吐いたのは多少時勢を諷する所もあつたのだらう。

別に又感覺論を唱へる者もあつた。コンデヤック (Etienne Bonnot de Condillac 自一七一五 至一七八〇) は『感覺論』(Traité des sensations)に於てロックの經驗を外的感覺の一面に歸し、有名なる

大理石像の比喩を以て、人が先づ嗅覺、次に味覺、次に聽覺等と次第に感覺を得る際に生ずる場合種々の精神作用を示して、感覺より一切の心作用の生ずる理を明にした。此説は歴史的には論理的にも唯物論と必然の關係はなく、現にシャルル・ボンネ (Charles Bonnet) の如きは反對に唯心論を導き出したが、當時一般の機運は寧ろ之を唯心論と結合せしめた。

之と關聯して道徳上の快樂主義利己主義が行はれたが、其の代表としてはエルズチユス (Claude Adrian Helvétius 自一七二五至一七八一) の『精神論』(De l'Esprit)を擧げる事が出来る。

(四) 社會上の思想

以上の他政治法律の點で英國思想を紹介した人にはモンテスキエ (Charles de Secondat Baron de la Brède et de Montesquieu 自一六八九至一七五五)がある。其の『法の精神』(L'Esprit des lois) (早く萬法精理といふ名で譯された)に於て法制と國民の自然的及道徳的關係との聯結を説き英國憲法を賞讃し、三權分立の説を唱へた。其他經濟上にも新説を立てる者があつた。

II 啓蒙思想の歸結

(1) 積極的歸結

以上諸運動が相合して十八世紀の思想を形成したが、其の歸結として二種を擧げる事が出来る。一は積極的結果で、即ち啓蒙事業の完成した結果を示すものである。之に二種の著述を擧げる事が出来る。

一は『百科全書』(Encyclopédie ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers)の編纂である。一七五一年より一七七二年に亙り、二十八卷、増補五卷及分析表二卷から成つて居る。當代知識の集積であつて、ブルテール、ルソーも一部に寄稿し、其他著名の學者は悉く之に執筆して居る。初ダランベール (Jean d'Alembert)後にディドロ (Denis Diderot)が其編纂主任となつた。ダランベールは數學者で、其の序説に於て編纂の趣意を説き、併びに學術の分類を論じた。ディドロは全啓蒙を一身に負へる者と目せられる。世界は凡て心的原質から成ると説いて居るが、一面また機械觀的(隨て唯物論的)な所もある。

之と相併んで第二に當代學界の一部を代表したものは『自然の體系』(Système de la nature ou des lois du monde physique et du monde moral)といふ書物である。Mirabaudの著としてあるが、實は獨逸から巴里に寓して居たオルバック (Dietrich Baron d'Holbach 自一七二三至一七八九)といふ貴族が當代著名の學者の協力によつて編纂したもので、唯物論の學説を組織したもの

である。

(II) 消極的歸結ルソー

以上に對して第二に啓蒙思潮の消極的結果を示したものがルソーである。
 ルソー(Jean Jacques Rousseau)は一七一二年ジュネーブに生れ、人々の庇護によつて學藝を修め、一七四一年巴里に出て學者文士と交り學界文壇に名聲を得たが、人と相容れず、終にやや狂的となつて一七七八年佛國郊外のエルクモンギユで没した。其業は哲學の根本に關して特に説くべき點もなかつたが、文明批評の端を開いた所に其の特色を示して居る。其の最初の著は『學藝論』(Discours sur les sciences et les arts. 1750)で、デイジヨンの學士院で懸賞論文に當選したものである。次に『人類間の不平等の起源及び根據を論ず』を著はした。是等の書に於て所謂文明の進歩を以て人類墮落の原因となし、學藝の如き文明的事業を難し私有權制度が不平等を生ずとして、自然を黃金時代とした。此説を教育に應用したものが『エミール』(Emile ou de l'éducation)である。ロックの自然的個性發展の説を承け、感情の養成を極論し、エミールと稱する兒童に理想的教育を施す所を描寫した。所謂自然には種々の意味がある、第一には之を神業とし、第二には生物に共通する性能の意とし、第三には又心理

的に心性の擴大して自他を包括するに至る所の意とする。かくて文明の爲に人格が分裂するに至る事は其の弊であるから、寧ろ自然に返る事を可としたのである。宗教も政治も此の原理によつて論ぜられて居るが、『民約篇』(Contrat social)は政治上の自由平等の思想を説いたものとして知られて居る。要するにルソーの説は當時の思潮の影響によつて生じたものである事は掩はれない。然し自ら其極に達して終に反動を生ずるに至つたのである。

第三節 獨逸啓蒙哲學

一 獨逸啓蒙の根據

(I) 獨逸哲學の祖

第十六世紀に於て大なる神祕家を出した獨逸は、其後三十年戰爭の爲め諸種の妨害を受けて文化停滞の運命に遭遇したが、戰亂の餘弊漸く收まると共に英佛の思想が入り込んで來た。或は懷疑説を以て正教に抗する者、或は數學的方法を諸學(例へばブーフエンドルフの法學の如き)に應用する者、或は陰にスピノザ説を奉ずる者、唯物論感覺論等を執る者等思

想界は著しく混亂した。此際大天才が出て英佛の思想を綜合し遂によく獨逸哲學の基を立てた。其は即ちライプニッツである。

ライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz)は一六四六年ライプツヒヒに生れた。父は其地の大學の道徳哲學教授であつたが、一六五二年歿したので、爾後此の望を囑された小哲學者は父の書庫に就て學び、十五歳にして古今の哲學に通じた。初めは詩人的の素質も具へて居て、ライプツヒヒ大學にある際、宗教哲學等より來り目的觀と自然科學より學んだ機械觀との間に衝突を生じて煩悶して居た。一六六六年ライプツヒヒ大學の評議員が其の若年なる爲に卒業せしめる事を沮むたので、アルトドルフの大學に於て法學の學位を得た。爾後大學と離れ一六六八年マインツの法典修正の業に參し、一六七二年から一六七六年まで巴里倫敦に旅し諸學者と交り、スピノザを訪問したこともあり、一方には又ルイ十四世に埃及遠征を勸めて獨逸の平和を圖らんとするやうな事にも心を傾けた。一六七六年ハンノーヴーの宮中顧問官兼圖書館長となつた。此際諸學術論文を公けにしたが、殊に微積分學の發見に關してニュートンと争を生じた。結局ニュートンの創案の方が早い、完成はライプニッツの手に成る所も多いといふことになつて居る。一六八四年ライプニッツに教を享けて居たハンノーヴーの

公主ソフィー・シャーロットがブランデンブルグ侯(後にプロイセン王となる)フリードリヒに嫁したので、ライプニッツも之に隨つた、而して此結婚を機として二強藩の合同を圖り、又之によつて兩地方に行はれる新教の別派を合一せんとしたが、其目的は達せられずして反て誤解を招いた。此間ライプニッツは又プロイセン王に勸めて伯林に學士院を設けしめ(後完成して眞の學士院となつた)、其他ドレスデン、ギーセンや露都にも之を設ける事を勧めた。斯様に、學術の諸方面に於て獨創の見解を出したのみならず、學事其他に就ても盡力する所が多かつた。斯くて一七一六年歿したが、宗教の事によつて誤解を受けた爲に葬に會する者も極めて少なかつたといふ。(之に對しては現今反對の見方もある)

斯く一生を通して事業に忙しく遂に家をも成さない有様であつたから、著書も大なるものはない。比較的に大なるは『辯神論』(Theodicee)で、ペイルの説に對して信知の合一、神義を辨じたものであるが、ソフィー・シャーロットとの問答の結果成つたもので通俗淺薄たるを免れない。遺稿『人間悟性新論』(Nouveaux essais sur l'entendement humain)はロックの書を評したもので、恰かもロックの死に遭つたので筐底に藏したのが、歿後、一七六五年に出版せられたものである。稿本『單子論』(Monadologie)は一七一四年の作、其の思想を簡約に説い

である。一六八六年の『形而上學論』(Discours de Métaphysique)は其の思想の一面を説いたものとして重ぜられて居る。其の全集は是等論者や許多の書簡より成るもので、Erdmannの編じたものもあるが、Gerhardtのが最もよいといはれて居る。之に關する獨英等の翻譯も種々ある。近年其の歿後二百年を記念として最も完全な全集を出す事が計畫せられた。然も今は政治法律に關する書簡等を集めたものが先づ出版せられ、次に哲學其他に及び全四十卷中僅に數冊のみ公けにせられて居る。

(II) 數學的論理

ライプニッツの哲學は多方面に互つて居るが、初は他の諸家と同じく方法の研究に従事する所から出發して居る。數學を重じ、此方法に倣つて世界共通の符號を造り、之を組合せて以て論議の用に供せんとした。之を「組合せの術」(Ars combinatoria)といふ。かくして絶對の確實理か若しくは蓋然理を求めんとした。其他には發明の術を用ゐ、之によつて眞理に到達せんとした。此數學的論理に關しては少壯の時には種々考案したが、後には他の問題に意を專にした。(後年支那布教の宣教師の材料により周易に關する研究を試みたこともある)斯く推理を以て眞理に達せんとしたが、一方には又經驗を重んじ、ここに經驗論と理性論

とを調和せんとする所が現れた。即ち眞理に幾何學的(恒常的)と事實的との二者を區別する、即ち推理の眞理と事實の眞理と(Verités de raison; v. de fait)である。前者は「矛盾の原理」により、後者は「理由の原理」を基とする、前者は究竟原因に溯ることが出来るが、後者は如何に原因に溯つても事實を離れないものである。斯くして經驗論と理性論とは結合せられたが、まだ一理に合するには至らない。即ち眞理に二種ある事になつて居るのである。論理的なるものは思惟必然であるが、其等は皆可能である、其中現實的になるものはかかる論理的必然なものでなく、偶然的なものでなければならぬ。

(III) 單子論

此の如き方法論上の意見を離れて、當時の自然哲學上の異論が其の形而上學説を生ぜしめたといふことは從來の通説である。近來或は寧ろ其の論理説に哲學説の根據を求めたり(ラッセル、カッシーラー)、或は其の早い形而上學論に現れたやうに、宗教問題と結合するやうにも考へられる所もあるといふ意見もある。要するにライプニッツの學説に關しては今後の研究に須つ所が多いが、今は通説に従つて、其の晩年の意見として考ふべきものを見ると、當時の自然哲學上の問題は因果律と目的觀との關係に存し、同時に唯物唯心の争となつたもの

で、實體の論は其の決着點といへるのである。蓋しデカルト派は有限的實體の獨立性を拒み機縁說等は一切の活動を神に歸し、スピノザは實體を無活動とし、ただ様相のみを認めた。ライブニッツは此に經驗的事實を入れて實體は活動其自身であるとした。此説は物體を以て延長性其ものだと見たデカルト説と正反對である。デカルトの物體は力を傳へるものに過ぎないが、ライブニッツに至つてアリストテレスの「エンテレキア」説が復活した觀がある。而して此活動に種々あるから、其實體も種々ある、ライブニッツは之を當時の用語より借りて單子(Monade)と名づけた。

單子は各自統一的排他的で其間に結合はない。故に「單子は窓戸を有せず」(Les monades n'ont point de fenêtres)といふ。然るに萬物間に結合があるとすれば各單子中に既に內的連結がなければならぬ、即ち各個體は其内に全宇宙を藏して居る。故に單子は「宇宙の生ける鏡」(Miroir vivant de l'univers)であるといはれる。即ち單子は皆小宇宙で、其中に一切は表現せられる。

斯く見れば、萬物の差異は内容に非ずして其の内容の明否にありと言へる。即ち明の度によつて單子は段階を作つて居るが、此に連續律(Lex continui)が存する。明の極は悟性の作

用で、不明の極は感覺である。前者は能動で、後者は所動である。最低級單子は混濁せる知覺を有する、純所動的で之を物質といふ、最高は神で、唯一である。完全に明なるものは全然無差別となる譯で、之を「無差別的同一の理」(Principium identitatis indiscernibilium)といふ。此理によれば二物も同一なものはない事になるのである。

各實體は其の作用によつて連結し、而して其の作用は即ち觀念の作用に他ならぬが、なほ他に觀念を動かすものがなければならぬ。動力は實體の欲動(Appetit)に存するものである、然も其傾向は前に存在する觀念によつて定まる。而して各單子は均しく宇宙全體を表現するものであるから、一切の單子に於ける觀念運動の結果は同一であつた、宇宙全體の過程が一切單子中に同様に顯はれる。各單子間には相互直接の影響はなく、各單子獨立であるが、然し同様に生活して居るから、恰かも互に作用するやうな觀を呈するので、之を單子の豫定調和(Harmonie preétablie)といふ。心身相關の理も之によつて解することが出来る。之を時計の比喩で説明したが、是は實は既にゲーリンクスも述べた所である。

豫定調和説の系論として第一に擧ぐべきは此豫定調和の根源が神に存することである。蓋し神を諸單子の共通原因としなければ其間の調和を説明し難いからである。第二に各單子の

作用は神によつて定められるから、全體の作用を見れば目的に向つて居るが、個々の作用は機械的である。第三に單子は全法界を表象するが、之を同時に意識するのではない、故に無意識的表象作用がなければならぬ、而して單子が完全となるに従つて此作用が減少する。此新説を其の新接の微分法と結合して、意識が漸次極小の差異を以て減少すると説く。故に無意識表象を微小知覺 (petites perceptions) とす。斯る微小知覺は其自身には知られないが、相集まれば知覺となることは、恰も水滴の微音が相合して波聲をなすやうなものである。

(四) 物理説と『人知新論』

以上の根據によつて物理学の理論を説いたが、デカルト派の機械的説明に對して力學的説明を基礎とした。其の「活力」(vis viva)は近代のエネルギーを想はせるものがある。其他近世物理学の趣旨に合する所が多いと言はれて居る。而して是等物質は發展の列をなして居て精神と相連続する。

人的單子は宇宙發展の一段階として其認識作用も亦明否兩素を有しなければならぬ、即ち悟性と感性との兩者を有することはロックの説く所の通りであるが、然しロックが本有觀念を全然否定したのは誤りである。本有觀念は現實的には存在しないが、將然的 (virtuell)には

存在する、即ち無意識的に存在し、經驗によつて意識的となるのである。單なる表象作用は知覺であるが、之が意識的となつた時を明覺 (Apperception) とす。此明覺の如何によつて單子に差別が生ずるもので、知覺から明覺に至る間に發展の關係の存することを見るのである、故に一切の觀念は知覺として心中に藏せられるもので、是が皆經驗内容を形成し、認識作用は之を明にすることである。其故に人心中に一切の法則等も存してたゞ經驗感覺によつて明にせられるものである。ロックの説が古の感覺論者の如く「感性中に存せざりしものは何物も知性中になし」(Nihil est in intellectu quod non fuerit in sensu.)は正しだが、たゞ次の語を加へることを要する、曰く「知力其ものを除く」(Nisi intellectus ipse.)

(五) 道德論及宗教論

道德法律宗教等の論も亦以上の論據に基いて居る。衝動の價値は之に結合する觀念の明否によつて定まるもので、混濁せる無意識の觀念に結合するものは最劣級のものである、次は感覺的なる欲求、最上は明知と結合した道德的欲求である。此理性の必然的法則に従ふことを自由といふ。之より心を開發し完全となり幸福を得ることが出来る。法律に就ては此道德關係と密接なる關係を有するものであるとして、プーフENDORF (Pufendorf) の説を駁した。

宗教に關しては、理性より説き得るものとして、所謂合理的神學の諸論を説き、而して神性を以て實體結合の場所とした。以上は必然理性に基づくものであるが、次に事實的眞理として成立宗教から論證せられるものがある。其は理性を超越するもので其の儘に信すべきものである。自然法と信仰との間に反對の生ずる場合には何れも事實と見る他はない。然し自然宗教の精神は寧ろライブニッツの根本思想であつた。即ち宗教の調和は大同小異の所に着眼すべきもので、何れも皆主要の點は單子を完全に知ることにある、斯くすれば自から神を愛するに至るとした。

信仰は理性と兩立し得るものであつて、信は又理によつて説明し得るものでなければならぬ。此に問題となるのは、神が何故に惡を生じたかといふことである。ペイルは是等の點から信知分離を唱へたが、ライブニッツは之を『辯神論』に於て論證せんことを試みた。謂へらく、害惡に物理的、道德的、形而上的の三種がある。其中第一は第二の結果である、蓋し自然は單子の聯結の發現であるから、自然の國と恩寵の國とは同一であるからである。即ち道德的に圓滿となれば自然界にも害惡が其跡を絶つであらう。然るに第二は又第三の結果である、蓋し諸單子は有限的であるから、隨て不完全不明晰である、故に所謂害惡が生ずる

ので、畢竟其は完全に對する消極的なものである。即ち害惡は積極的には存在しないことになるので、即ち此の樂天觀が成立する。然も完全な世界に何故に不完全な個體があるか。蓋し元來害惡は事實であつて、即ち偶然的眞理である。神の心中には許多の世界が可能であるのに、其中特に此世界が選ばれたのは畢竟其の諸世界中最良だと見たからであらう。即ち如何なる世界も有限物なくしては考へ難い、既に有限物あれば不完全の伴ふことを免れない、故に不完全は形而上的必然である。然し神は全智全能であるから、其の害惡も亦最小であるとしなければならぬ。即ち世界は可能中最良なるものでなければならぬ。

二 獨逸啓蒙思潮

(一) 啓蒙運動の起源

ライブニッツに起つたと見るべき獨逸の啓蒙は二様の方向を取つた。一は學究的で一は通俗的である。而して是は共にライブニッツの學說中に存する所であつた。ライブニッツやスピノザと友であつたチルンハウス (Walther Graf von Tschirnhaus 自一六五〇至一七〇八) は前者を代表しトマシウス (Christian Thomasius 自一六五五至一七二八) は後者を代表する。トマシウスはライブニッツ

大學の教授で、學と人生との結合を圖り、獨逸語を以て哲學を講ずることを試み、著書雜誌等を公けにした。是等に繼いで眞に獨逸の啓蒙を起したと見らるべき人はナルフである。

ナルフ (Christian Wolff 自一七五九至一七九四) はプレスラウで生れ、イェナで學び、ハルレで教授となり、正統派及び敬虔派から忌まれて一時此處を追放されたが、後フリードリヒ大王の代となつて再びハルレに歸還した。博學多識でライプニッツ哲學を組織した。其說平明、且つ獨逸語で大學の講義を行ひ、衆望を負ふた爲に益反對黨に嫌はれたのであつた。

ナルフは哲學を以て一切可思惟的なもの學となし、他學との差別はただ其の取扱法の如何にありとした。知識に數學的歴史的哲學的の三種ある。第一は形式的に限られるもの、第二は即ち經驗的の意であつて單に記載的なもの、第三は合理的で矛盾原理から演繹されるものである。斯くて凡ての事物は經驗學及び合理的學即ち哲學の對象となる。斯くしてナルフは諸學を分類し、之に關する學的組織を立てた。其說は主としてライプニッツを基礎として居るが、之を平易にする極、淺薄に流れしめた所も多い。例へばライプニッツの連續的段階説を取つて居るが心物を同列とはしない、又豫定調和も單に心身の問題に限るやうになり、常識的となつて、先人の宏壯な計畫を規模小なるものとならしめた。

(II) ナルフ派

ナルフの哲學は當時の主要な組織となり、通常ライプニッツナルフ哲學と呼ばれて居る。之によつて獨逸哲學は其の基を得たのであるが同時に乾燥無味の風を招き、單に論理に奔つて事實を顧みない弊を生じた。ナルフの組織は極めて完全なので門人も之に加へる事が出来ず、研究は主として教授法に偏するやうになつた。

ただ此間擧ぐべき事は一新研究の發生である。即ちナルフ派のバウムガルテン (Alexander Baumgarten 自一七一四至一七六二) がナルフの學系中に、不明瞭な知識即ち感覺に關する學のないのを見て、之を補はうとして希臘語の感覺 (αἴσθησις) から Aesthetik といふ語を作つた。感覺の完全なのは美感として現はれると見たから感覺學は即ち美學となるので、是が美學といふ語の起源をなすものである。(後に述べるやうにカントは此語を語源通り感覺論感性論等の意に用いた)

啓蒙は宗教上理性主義を盛ならしめた。サムラー (Salomo Semler 自一七二五至一七九二) は聖書の歴史的批評的研究を起した、ライマールス (Hermann Samuel Reimarus 自一七六八至一八一八) も同様であるが、何れも批評的で史的ではない。而して是が啓蒙の特色である。之に對して眞の史的 정신を發揮したものはレッシング (Gothold Ephraim Lessing 自一七二九至一七八一) である。ライプニッツ

の人知新論に基き他學者の想到せざる所に出て啓蒙の完成者とも目すべき所があつた。『人類の教育』を論じ、宗教上の寛容を劇『賢者ナタン』中に説く所、其の啓蒙的なる事を示して居る。然も其の史的な所に既に啓蒙より脱化せんとする所を示して居るものである。

(三) ヲルフ派の反對等

ヲルフ派に對するものの中、折衷派としてはクルーサズ (Crousaz 自一七六三至一七四八) は審美心から論理主義に於て、ブルカー (Johann Jakob Brucker) は史的研究に傾いた。其の反對派中最大なるのはリニディガー (Andreas Rüdiger 自一七三三至一七三二) 及クルーシウス (Chr. August Crusius 自一七二二至一七七六) である。前者は數學と哲學との差異を説き、後者は事實眞理に就て論究を試みようとした。其他新立脚地を取らんとして未だ其域に達せざる者には、ランベルト (Johann Heinrich Lambert 自一七二八至一七七八) がある。或は之を以てカントに近いものと見る人もあるが、然し、何等影響を有たないと論斷して居る人もある。

英佛の感覺論の影響は心理研究を促した、而して其説は所謂能力説であつた。スルツァー及びワイス (Johann Georg Sulzer; Jakob F. Weiss) 等は多少感情が別の作用だといふことを認めて來たが、テテンス (Johann Nikolaus Tetens 自一七三六至一八〇五) に至つて明瞭に知情意 (Den-

ken, Fühlen, Wollen) の三分法を唱へた。

此他通俗哲學者としては、バセドウ (Basedow) ザルツマン (Salzmann) 等を擧げ得る、何れも常識的見地から教育を論じた人である。

是等の中、學識を以て聞えたものにはモーゼス・メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn 自一七二九至一七八六) がある。其著數種、プラトーンの『ファイドン』を譯補したものや諸論文集等は著名である。其他又ニコライ (Fr. Nicolai 自一七三三至一八一三) は通俗學者の模型ともいふべき人である。雑誌を發刊し叢書を出版し、新思想の傳播に努めた。

第四章 批評哲學

第一節 近世哲學の轉機

一 總說——カントの哲學史上の位置

啓蒙運動は教權の勢力を殺いで迷信を剷絶し智識の偏倚を改めて文化を普及せしめたが、其の根柢に深奥なる批評と高遠なる原理とを缺いて居たから、其の結果は往々にして破壊と平凡とに流れ、誠實を忘れ技巧を事とするに至つた。即ち是れ理性は僅に其の萌芽を發したが未だ果實を結ばず、眞の自覺の域に達しなかつたといふべきである。當代の文學藝術から風俗好尚に至るまで、皆之を示さないものはない。此缺陷を救はうとすれば、理性に對する信念が篤く、而して之を學的形式に表出する能力を有するものがなければならぬ。之によつて初めて理智の眞正の意義を發揮するを得ると共に、又其の實際の效力を制し、而して淺薄な智識偏重の弊を救ふことが出来るであらう。カントは即ち其人であつた。謂へらく、從來の

哲學は獨斷的でなければ懷疑的である、人智の能力を盲信して恣に學說を構成するものでなければ、僅に若干の誤謬に際會して直ちに人智全體を拋棄せんとするものである。前者は專制政府である、後者は無政府である、眞の研究は其間に存するもので、先づ人知の性質から檢して行かねばならぬ、即ち知識の批評である。然も此方法を獨り知識のみならず、廣く一切に及ぼさうとする。此に其の哲學は批評的と稱せられるのである。而して此の如き知識の批評的研究によつて經驗的知識の基礎を確立する事が出来る。斯く經驗の基礎に關すること即ち論理上經驗に先だつ事を先驗的 (transzendental) といつて經驗を超越する事即ち超驗的 (transzendent) と區別する。故に批評(判)哲學は又先驗哲學と稱せられる。

此哲學は知識學術のみならず、一般文化の基礎を論究するものであるが、之によつて淺薄であつた啓蒙は深刻となつた。カント自ら啓蒙者を以て居り、其論文にも啓蒙の説がある、然も其意は深奥であつた。曰く、啓蒙とは人が自ら其の責を負ふべき未成熟の状態から出で去る事であると。而して未成熟とは自ら其の悟性を用ゐる能はざること、其の責任を負ふ所以は其の未成熟の原因が悟性の缺乏に存せずして決斷と勇氣との缺乏に存するからであると。斯くして啓蒙思潮を高上せしめると共に從來雜駁で又危機に瀕した學術を擁護し、之を

して眞に哲學的統一をなし得べからしめた。即ち此點に於てカントは十八世紀啓蒙思潮の完成者にして又其の克服者と言へるのである。蓋し此の如き啓蒙思潮の高上は轉じて新機運を導くものであるからである。

然も嘗に之に止まらず、其の研究は實に從來の哲學者の未だ嘗て言はなかつた所である。リールが言つたやうにロック、ヒュームを以て其の先驅となすを得べく、又コーエン、ナトルプ等の如くプラトーンにまで之を溯る事を得るでもあらうが、暫く古代を省けば、近世諸家の説に於てはなほ問題が混雜して偏頗であつた。故に此點から言へば、カントの批評哲學は實に哲學史上の一轉機をなしたものと謂へるのである。更に單に近世哲學のみに就て言へば近世の初から對立せる理性論と經驗論との二派は此に根本的調和を得たといへる。蓋し理性論によれば、知識に先天的(本有的)觀念があつて重きをなして居るが、經驗論によれば何等本有觀念はない。カントは知識中に兩分子を認めて兩説を統一した。所謂「凡て我々の知識は經驗と共に始まるが經驗のみ來ない」とは即ち其の意味である。然しカントは之を説くに當つて單に兩説を合したのではなく、更に根本的に論じた。蓋し從來諸家の知識を論ずるに當つて、所知識的を初から獨立に能知識的と對立させた。然るにカントは主觀を離れた

る所の客觀は無しとして、主觀によりて客觀を基礎づけ(Begründen)ようとした、此に其の所謂コペルニクスの事業が存するのである。且又カントは初から信念を重じ、ここに道德宗教の情操の影響を示して居る。かくして其説は知に對して意の優越を説くものとなつた。從來の理性論經驗論は共に知を標準としたが、カントの説は此點に關して全然別異の態度を執つた、即ち主知的に對して主意的であつたと見られる(然し主知的な所も多い)。此點に於て基督教殊に新教と一致する所がある。故にトーマスを舊教の哲學者といふ意味に於て、カントを新教の哲學者といふことが出来る、是れ一方に其が舊教徒に容れられなくなつた所以である。

此の如く諸方面より見てカントは實に哲學史思想史上の一轉機を作つたものといへるのである。

二 カントの傳記及び著書

カント(Immanuel Kant)は一七二四年四月二十二日普魯士のケーニヒスベルクに生れた。父は此地の革具匠であつたが、カントの晩年自ら告げた所によれば其祖父が蘇格蘭から移住

し、初は Kant と綴つて居たが發音を誤まれるので、後に C を K に改めたのだといふ。然し近年教會の記録に徴して祖父が此地に生れた人であることが證明せられたので、カントの言は老後記憶の誤に因するのだとせられて居る。なほカントの祖先はリタウエンから移つた人だといふ説を立てる者もあるが、信ぜられない。即ちカントは純粹に北獨の人なのである。かくてカントは眇たる一小市民層の人を父とし、然も其の第四子に生れ、なほ五人の弟妹を有して居たので、(尤も其の多くは夭折したが) 到底十分な教育を受ける機會に恵まれて居なかつたが、幸にしてやゝ富裕な伯父の補助によつて大學まで進むことを得たのである。

カントの父母は忠良な市民であり、又信仰に篤く殊に母は深く敬虔派に歸依して居たので一七三二年其子を此派の牧師シュルツの管理する高等學校 (Collegium Fredericianum) に入學せしめ、一七四〇年進んで此地の大學に入學せしめた。曩に高等學校では教師の感化により特に古典語を學修したカントは、大學に入るに及んで、少壯の學者クマツェン (Martin Krautzen) の影響により自然科學に興味を有し來り、ライプニッツ・ナルフの形而上學とニュートンの數學物理學とを學んだ。斯くて一七四六年卒業する際、論題を物理哲學の方面に取つて『活力計量考』(Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte……) を草し、

翌一七四七年出版した。其後近郷の豪族等に家庭教師となりつゝ攻學に努め、一七五五年大學に求職論文を提出して講師となつた。其論文は『形而上學認識第一原理新釋』(Principium primorum cognitionis metaphysicae nova dilucidatio) といふ。此際更に『論文を提出して教授候補者となる資格を作つた。同年又別に『天體の一般自然史及び理説』(Allgemeine Naturgeschichte und Theorie der Himmels) を匿名で出版した。大學講師となること十五年、其間一七六二、三年頃に諸種重要な論文起草し、又各種學科に就て講義を試みて名聲を博したが、生活上には頗る窮乏し、一七六六年城内文庫司書を兼ねて僅に生計を營むを得たといふ。屢教授の地位を獲得する機會を逸したが、遂に一七七〇年論理學形而上學の正教授となることを得た。此際就職講演として試みた『感覺界及叡智界の形式及び原理』(De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis) を敷衍しつゝ一書とする企圖であつたが、爾後十二年を経て一七八一年『純粹理性批判』(Kritik der reinen Vernunft) の名を以て現れるに至り、此に其の學說上の地歩が定まつた。斯くして其の思想の時期を批評前期及び批評期と區別するのである。

大學教授として次第に地位も上昇し、先輩教授として總長にも互選せられたし、新立脚地

によつて諸著を出した。此中『實踐理性批判』及び『判斷力批判』(Kritik der praktischen Vernunft, 1788; K. d. Urteilskraft, 1790.)を前著と併せて三批判書とす。是等根幹の書他に諸著があるが、一七九二年宗教に關する論文を出すに當つて當局の忌諱に觸れ、更に之を書籍として出版するに及びて遂に箝口令に接するに至つた。蓋しカントは既に明君フリードリヒ大王と良相ツェードリッツとの下に諸著を出したが、王嗣フリードリヒ・キルヘルム二世の治下に於て其の相たる宗教家出身のエルナーの彈壓政策によつて筆禍を招いたのである。後一七九七年フリードリヒ・キルヘルム三世即位するに及んで再び自由を得て大小數種の著述を出したが、カントの健康も漸く衰へ、講義も休止するに至り、専ら物理學と哲學との關係に就て新著を出さうとして居たが、一八〇四年二月十二日、終に其の生活力を悉く消耗し盡くしたやうになつて靜かに歿した。

其著書は前記諸著の他に大小許多ある。嘗て生前其の舊論文を集録出版したこともあるが後には自ら之を顧みなかつた。歿後年を経て其の全集が出版せられた。其の最も早く顯れたものはHartenstein (1838—39), Rosenkranz u. Schubert (1838—42), Kirchmann (1868ff)等の版があるが、後一九〇二年以來普魯士學士院に於て完全なる全集を出版し、著書の部十

卷書簡四卷は既に完成し、遺稿、講義等の部は既に各數卷を出しなほ若干の増補を見つゝある。此他には Cassirer の十一卷本があり、近時またキルヒマンの全集を更に嚴密に校訂し全く面目を一新したものが現れて居る。其他には一部分の出版、種々の全集選集等の出版もある。其の大部分は各國語に翻譯せられて居るし、又之に關する解説、評論、研究の書類は實に夥しい分量に上つて居る。

第二節 批評哲學の淵源

一 時期の區分

カントの哲學思想の發達は其の自ら言つた通り、之を批評前期及び批評期の二期に區別することが出来る。前期は即ち其の未だ自説を構成するに至らず、左顧右眄した時代で、畢竟後期の準備期である。元來カントは幼時から敬虔派に養はれて宗教的感情が其の根柢に存して居た、而して高等學校では古典を好み多少形而上學的素養を有したといへるが、大學に於ては自然科學に意を傾け又ナルフ流の形而上學をも學んだ。即ち全然十八世紀思想の縮圖と

もいふべきものであつた。是に於て其の思想は自然科學的經驗論と形而上學的理性論との間に彷徨したのである。之を概言すれば、初は主として自然科學研究を事とし、次第に形而上學的問題に移り、轉じて論理學と形而上學との關係を論じ、英佛の人性論によつて新問題を得、終に古來の形而上學に對する懷疑となつて新見地を開くに至つたのである。今諸史家の意見を按排して次に次の三小期に區分する。

- 一、理性主義的——自然科學的——獨斷論的
 - (一) 自然哲學的
 - (二) 自然科學的
 - (三) 理性論的
- 二、經驗主義的——論理的——懷疑論的
 - (一) 論理的
 - (二) 經驗論的
 - (三) 懷疑論的
- 三、準批評主義的(七〇年の論文)

而して批評期に就ては更に批評哲學期と體系期とを區分することが出来るが、或人(ヴント)は心理學の見地から後者を衰頹期とし、之に對して批評前期を上昇期批評哲學を絶頂と見て居る。

二 批評前期第一小期

前述の如くクヌッツェンの影響によつて初はニュートン風の自然科學(自然哲學)に傾き、其卒業論文は運動力に關して當時相對立して居たデカルト派及びライプニッツ派の爭論を決しようとした。前者によれば運動力の大きさは $E=mv$ で後者によれば $E=mv^2$ であるが、カントは運動に不自由と自由の二種を區別して之を力の死的と活的との二別と對比し、デカルト派は前者を、ライプニッツ派は後者を説くものとし、此に兩者の調和點を求めた。此論文の内容は價値が少ないが、其の調和法には後年の批評的方法を暗示するものがある。

之に關聯して一七五五年の『火論』に於ても亦デカルト説を駁してニュートンの光説を執り、翌年の『物理的單子論』に於てはライプニッツの單子論とニュートンの物理的引力論とを調和せんと試みた。

更にニュートン説を具體的事實の説明に應用して天體史を説き、所謂星雲説を創唱した。是は全然引力説によつて天體の創生を説いた自然科學的研究である。之と前後して地軸論、地球老滅論、地震の研究等がある。

カントは既にかくニュートンとライブニッツとの間を彷徨して居たが、之を純形而上學的に説いたものが五五年の「新釋」である。分れて三篇となる。第一篇は矛盾之原理を論じて同一原理が之に先だつことを説き、第二篇に理由之原理を論じて充足理由の代りに決定理由を説き、第三篇繼起及び共在を論じて時空を此の論理的原理から説明しようとした。而して此理由の原理にはニュートンの引力説が中心となつて居る。

三 批評前期第二小期

既に新釋に於てはニュートン説に傾いてライブニッツ説を棄てる趣を示してあるが、然もまだ論理學と形而上學とを區別しなかつた。然るに今や漸次其意が明になつて來た。一七六二——六四年の四論文は其意を示したものである。即ち(一)『推論式四格の空論』に於て第一格以外の推論式を虚偽の辨析として經驗論的傾向を示し、(二)『負號量を哲學に導く試』を説いて、之が論理學に於て否定と混同すべからざることを説きて論理的根據と實在的根據との別を明にし、(三)『神の存在の論證に關する唯一の可能的論證理由』に於て從來の諸説を批評し眞の宇宙論的證明と本體(存在)論的證明とを合一しようとした、而して(四)『自然的

神學及道德學の根本原理の判明に關する研究』に於て、所與概念の分析的研究を主張し、明白に從來の論理的形而上學の短所を指摘した。

此間カントはルソーに影響せられた所が多く、從來學識のみを重じたことの誤りを自覺した。更にシャフツベリーの感情主義等英蘇の學風によつて動かされ、其の結果『美と崇高との感情の考察』の篇に於て人性論的研究の端を示した。

一七六四年ケーニヒスベルク市内を徘徊した異形の野人はカントを促して精神病に關する意見を新聞に公けにせしめた。之と關聯して當時信を得て居たスエーデンボルクに就て研究し一七六六年『視靈者の夢、形而上學の夢によつて解説せられたる』と題する書籍によつて全然形而上學から分離することを明にした。

四 過渡期

『視靈者の夢』以後二三の論文はまた前時代の問題を繼續するものであつたが一七七〇年の就職論文に至つて終に新な時空説を唱へ、批評哲學の出發點に到達した。然も其の一半には從來の形而上學を脱しきらない所もある。

此論文は次の五篇より成る、即ち(一)世界一般の概念(世界は一切部分の完成せる總括)
 (二) 感官的及叡智的一般の差別、(三) 感官的世界の形式的原理、(四) 叡智的世界の形式的原理、(五) 形而上學に於ける感官的及叡智的世界に關する方法であるが、此の第三篇に於て舊論文『空閒に於ける位置の差別の第一理』に繼續して時空の主觀説を説き以て後年批評哲學の端を開いたのである。

第三節 純粹理性批判

一 總説——認識の區分及び問題

七〇年の就職論文は増訂の上直ちに出版せられる計畫であつたが、一七八一年に至つて漸く公けにせられた。其名稱を『純粹理性批判』と定めたが、是は既に七二年二月の書簡の中にも見えて居たものであつて、而して此の理性批判(評)といふことが實にカント哲學の本質と稱すべきものである。其の意義に就ては同書第一版緒言に説いた所で明かである。曰く此に批評といふのは書籍或は體系の批評の謂には非ずして、經驗から獨立に得られるべき一切認識

に關する理性能力の批評である、從て一般に形而上學の可能或は不可能の判決及び其の源泉範圍限界等の決定を試みるもので、而して凡て之を原理から演繹せんとするものであると。此批評は理性の作用に關する理性主義經驗主義の爭論を判決するものであるが、所謂理性にも亦種々の意義があつて、此には概して先天認識の原理を作る能力の意義に用ゐられる、更に純粹といへば其の先天が絶對な場合をいふ。然し理性中別に實踐に關する作用もあるから理性には理論的と實踐的とを區別することが出来る。然るにカントは當時の學者テレンスに從て知情意の三分法を執り、知には理論的理性、意には實踐的理性を對當せしめたので、情には別に判斷力を對當せしめた、かくて理性批評は以上三者の批判となり、第一は主として認識論及形而上學、第二は倫理學、第三は美學及自然哲學に當るもので、而も第三は前二者を調和するものとせられる。

故に純粹理性批判とは先天認識の根本原理を論ずるものであるが、其後同一問題を分析的に且つ平易に論述した『哲學序説』(Prolegomena. 1783)と異なり、全然總合的演繹的に當時の論理心理の形式に擬して組織してある。蓋し當時の心理説によれば認識作用の根源たる感性と悟性とは全然種を異にするもので、一は直觀の能力、一は概念の能力であつて、後者の

形式は既に論理學の問題となつて居る。故に理性批評は二部に分れる、一は感覺論、一は論理論で、後者は分れて分析論及辨證論となる、是等を原理論と稱し之に對して方法論を立て其の各に先驗的（先天的原理に關するもの意）の名稱を附する。之によつて認識の能力を明にすると共に是等の作用と特別の關係を有する學の成否を定めることが出來るとする。然らば是等各認識の特質及び其に關聯する學の性質如何。先づ認識一般の性質を検しなければならぬ。

純粹理性批判第二版序論の初に、一切認識は經驗と共に始まるが經驗から起るものではない、と記してある。即ち此に認識に二種あることが知られる。經驗的なものは後天的と稱し之に對するものを先天的といふ。所謂必然性と普遍安當性とは先天的又純粹の認識のみ存するものである。更に又認識は常に判斷の形を以て顯れるものであるが、此判斷中主辭中に賓辭の意を含むものと否とがあり、前者を分析的、後者を綜合的といふ、又前者を解釋判斷、後者を擴張判斷といふ。故に先天後天の別と以上の別とを組合せば次の四種の判斷が出来る譯である。即ち

分析的判斷（後天的的）(1)
綜合的判斷（先天的的）(2)

綜合的判斷（後天的的）(3)
然るに(1)は普通の定義の如きもの、(2)は不可能、(4)は普通の經驗であるが、學的知識は(3)の中に存しなければならぬ。是は知識を擴張し然も必然的普遍安當的である。カントは此種の知識が數學及純粹自然科學中に存する事實に基づき、是等の場合に於て主辭中に含まれずして然も先天性を有する賓辭の存する所以を求めんとした。此問題を「如何にして某々の知識は可能なるか」の形に於て提出する、而して之を數學等に就て確證して、更に之を形而上學に於て同様に求め得べきかを論ずる。故に其問題は一般的には「如何にして先天綜合判斷は可能なるか」(Wie sind synthetische Urteile a priori möglich?)となり、之を分てば

- (一) 如何にして純粹數學は可能なるか(先驗感覺論)
- (二) 如何にして純粹自然科學は可能なるか(先驗分析論)
- (三) 如何にして形而上學一般は可能なるか(先驗辯證論)
- (四) 如何にして形而上學は學として可能なるか(先驗辯證論、先驗方法論)

二 直觀形式——先驗感覺論

先驗感覺(感性)論は感性の先天的原理或は形式を論ずるものであるが、此原理を又純粹直觀或は直觀形式ともいふ。感性的認識即ち直觀から經驗的感覚材料を除き去つたものである。然も此原理は悟性的認識即ち概念と異つて直接に事物の認識を與へる作用に屬するものである。此の如き感性形式に空間及時間の二種があつて、一切直觀は皆是等形式を通じて顯れる。而して是等二形式はそれ〴〵幾何學と運動學及算數學との基礎となる。故に空時の先天性とは等の學の確實性とは相關聯するから、此に此の先天性の論證を要するが、之に形而上學的及び先驗的解釋の二種がある、前者は直接に其概念より論證し、後者は之を豫想する學の成立から證明する。(第一版では此別がない)

空間に關する形而上學的解釋は次の四點より成る。即ち空間は(一)外界經驗から抽象せられた經驗的概念ではない、(二)一切の外界直觀の根抵に存する必然的觀念である、(三)事物全體の關係に就ての一般概念ではない、(四)無限物の所與量として表象せられる。即ち空間は先天的必然的直觀である。(論證は略す)

次に先驗的解釋に於ては、幾何學の原理が必然的普遍妥當なる爲めには其の對象たる空間の觀念も同一性質を有さねばならぬ、即ち先天的だ、と説くのである(第一版では是が前の形而上學的解釋第二の次に入れてある)

時間に關しても殆同様の證明をなし得るが、たゞ直觀に外内の別があるのみである。

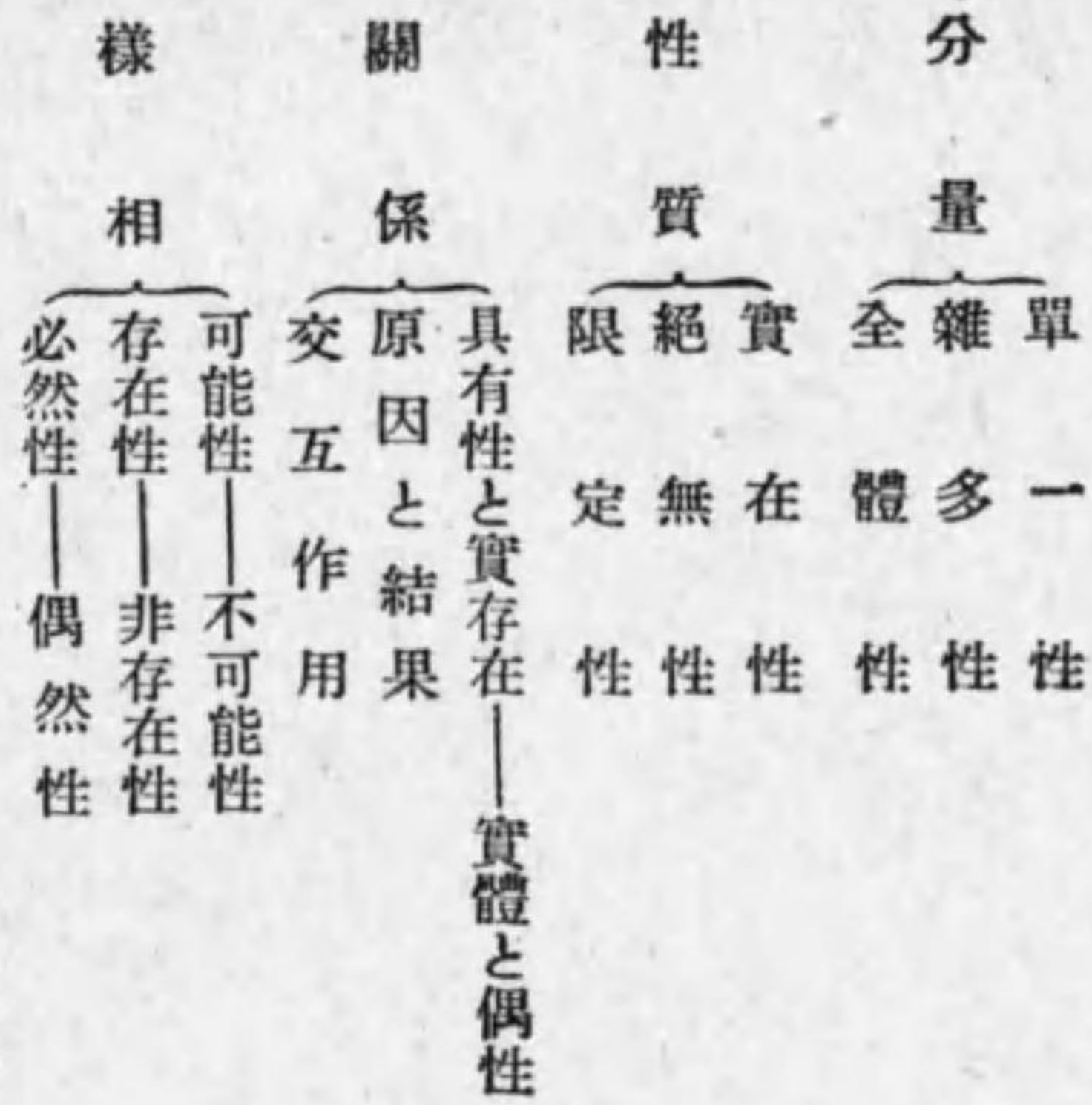
之より次の結論を得る、(一)空(時)間は對象其自身の關係若しくは性質ではない、(二)空(時)間は外(内)界直觀に關する感性形式である。(三)時間は一切の經驗の先天的形式である。

さて此に所謂先天性は先在性^{プリオラテイト}と異なり純然たる認識論上の意味を有するものであるから、心理的には反て經驗的意味を有し得るものである。要するに個々の經驗によつて始めて證明確立せられるものでない合法性の意味である。斯くして時空の先天性は數學の確實性と伴ふものである。然し是は同時に時空が感性形式とせられるが爲めで、凡ての認識は直觀による限り此形式を帯びて來るから、之を現象といふが、此形式を通らな^ク「物自體」(Ding-an-sich)を認識するを得ざるものである。(以下概説に止める、著者の他の著書『カントと現代の哲學』等を参考せよ)

三 悟性形式(範疇)——先驗分析論(一)

數學の根據は前述の如く空時の直觀を要するが、然し之のみでは數學といふ學識の命題を構成することが出来ない、即ち是は思惟或は悟性作用によるもので、此に先驗感覺論は當然先驗論理論に入らなければならぬ。即ち先天的な即ち純粹悟性形式を求めなければならぬ、之を範疇(Kategorie)といふ。之を發見し論證する部分は先驗分析論である、即ち正しく「經驗の理説」と稱すべきものである。

範疇はアリストテレス以來の用語であるが、普通には最高類概念即ち事物分類上の部門の意に解せられて居る。アリストテレスは之を文中に使用せられる語詞の種類に基いて、十個の範疇を定めたが、カントは範疇を思惟形式の意に解して、之をアリストテレスの如く任意に拾集めたやうな形跡を避け、悟性の作用たる判断の諸形式に相應する概念を求めた。判断の分類に關しては大體當時の論理學に基づき、幾分か齊整して分量、性質、關係、様相の四門に大別し、各に三類の別を設けたが、範疇も之に従つて次の四綱十二目となる。



以上中初二綱は數學的、後二は力學的と呼ばれて居るが、何れも結局主觀的概念であるから、是が如何にして客觀的經驗を可能ならしめるか、問題である。範疇を求めるとは形而上學的演繹と稱せられるものであるが、之を法律語といへば事實問題(Quid facti)に屬するもので、之に對する權利問題(Quid iuris)が次に答へられねばならぬ。之を純粹悟性概念の

先驗的演繹といふ。要するに主觀客觀の根本問題である。

カントは此問題を解釋するに當つて、主觀客觀の意味を適當に解釋する方法を取つた。蓋し從來の見方では客觀とは外界に獨立に存在するものとせられて居るが、斯くては永久に主客の關係を説き得ないであらう。故に此に客觀的といふことの論理的意義を探れば、其は必然的普遍妥當的な觀念結合の中に存するものに他ならぬ。普通に判斷と稱せられるもの、即ち經驗判斷は此點に於て單に或個人の一時的觀念に屬する知覺判斷と區別せられる。而して此の如き必然的普遍妥當的結合は意識の統一作用によつて存するものであるが、之を意識一般(Bewusstsein überhaupt)と云ひ、先驗統覺(Appearception)と云ふ。所謂一切表象に伴ひ得ねばならぬ所の「我思ふ」(自意識)といふ作用である。此の先驗統覺によつて觀念結合が先天的性質を有し得るのであるが、此場合には之を客觀的と稱し得るのである。而して此統覺の個々の場合に於ける作用を表すものが即ち範疇である。故に範疇は主觀的概念であつて客觀的意義を有する、といふのではなく、却つて主觀的なるものに客觀的意義を與へるものなのである。換言すれば經驗は範疇によつて始めて眞の經驗となり得るのである。主觀が客觀と合するのではなく、客觀は主觀によつて成立するものである。其故に之を又、自然界は其根

柢を意識に有すといひ得るので、此點に於て主客の關係を一變せしめたが、此點から其の事業をコベルニクスが天體説明を轉回せしめたことに比するのである。斯くして客觀的自然は主觀的範疇より作られた法制に支配せられる。然し其の所謂自然は現象としての自然であり、其自然のみが法則に合するといへるのである。隨て物自體は此には全く排除せられる。換言すれば現象としての自然は範疇によつて認識の對象として構成せられるものであるが、此中のみ自然法則は妥當し、從て自然科学を構成し得るのである。

此説は一見パークリの唯心論的觀念論に類似するが爲めに誤解を招いたので、カントは極力之を辯して居る。自然或は物質界はカントに於ては自然法則の下に攝せられて實在するものである。然しながら之が爲めには範疇を直觀的認識と結合しなければならぬ。

四 悟性の法則——先驗分析論 (二)

範疇は悟性に屬すとすれば如何にして感情的直觀と合することを得るか。カントは之が爲めに範疇を時間形式の語に翻譯して兩者間の聯結を圖り得とした、之を圖形(Schema)と云ふ。斯くして分量、性質、關係、様相の四綱に對して時間群列、時間内容、時間順序、時間

總括の四者を擧げ、之によつて範疇が感性材料に應用せられて自然法則をつくり得とせられるのである。但し此の圖形論は從來多くは重きを置かれなかつたが、ハイデッガーは自己の時間論の上から之を中心としようとして居る。

さてかく範疇が應用せられて自然科學の原型を構成するのであるが、之が爲には純粹悟性の最高原則を立てなければならぬ。分析判斷に對しては矛盾原理に他ならぬが、綜合判斷には「經驗一般の可能性の制約は同時に經驗の對象の制約である」といふことが擧げられて居る、蓋し是は前に述べた先驗演繹の結果論證せられるものであらう。

さて、此條件で得られた法則を範疇四綱に配當して列擧すれば

- (一)分量——直觀の公理(凡ての直觀は延長的容大である)
- (二)性質——知覺の豫料(一切現象中感覺の對象たる實物は内包的容大即ち度を有する)
- (三)關係——經驗の類推(經驗は知覺の必然的結合の觀念によつてのみ可能である)
- (イ)實體持續の原理——現象の一切變易中實體は持續し其の分量は自然間で不増不減である。
- (ロ)因果的連續の原理——一切變化は因果結合の法則の下に起る。

(ハ)交互作用による共存の原理——一切實體は空間中に同時的として知覺せられる限り全然交互作用をする。

(四)様相——經驗的思惟一般の要請(可能、現實、必然)

以上諸原理を科學に應用する爲には其の感性形式即ち時空の數學的關係を定めねばならぬ。かくして科學(自然科學)は數學的に取扱ひ得るものに限つて存在する。此點からカントは、其の時代の心理學が此域に達しない點から、之を精密な科學としなかつた。

一方自然認識は飽くまで現象に限られるが、此現象(Erscheinung)を又Phaenomenon(事體)ともいふ。之に對する語はNoumenon(理體)である。但し是等は正確に云へば多少相違がある。事體は決定せられた對象を意味して現象と區別せられる。又理體には積極的消極的の二様の用法があり、前者は七〇年論文に所謂叡智界に相當し、後者は限界概念の意に解せられる。然しながら此の物自體若しくは理體の説には種々困難が存するが爲めに後の學者の解決を促したのである。而して今日に於ても種々の意見があるが、物自體と物とを區別し、後者は現象に屬して感覺の原因に相當するもの、物自體はあくまで超越的で認識の範疇に入り得ず即ち限界概念だとする見方が割合に矛盾が少ないやうである。

五 理性概念——先驗辯證論

物自體の説は古來形而上學の問題であるが、之が爲めに使用せられる種々の本體(存在)論的概念例へば同一と差異等は何れも感性と悟性との兩界を混同した結果である。カントは之を分析論の終りに略評してゐるが、更に進んで當時の形而上學の三題目となつて居る心理論、宇宙論、神學論に對して周密な批評を試みて居る。而して是は範疇の不當なる用法によるものであるとして形式論理學上の辯證論に對當せしめて居る。

先づ此の如き形而上學的問題の起る所以を考察して、自ら解決すべからざる問題を提出する人性の矛盾に歸した。抑も經驗界は所制約者の連続であるから、之を追窮すれば無制約者に到達するが、是は認識すべからざるもので、之を理念(Idee)と名づける。其が單に課題であることを忘れる所に妄想(Schein)が生ずるのである。

所謂理念に三種ある。第一、内感の一切現象の無制約的根基の觀念は「心」。第二、一切外的現象の無制約的聯結の觀念は「世界」。第三、一切現象の根柢に存する無制約者の觀念は「神」である。是等に相當して前記三形而上學問題が生ずる。カントは之を論理學中推論の部

に對當せしめ、形而上學を推論の過誤に歸さうとした。

第一の理念に對しては之を純粹理性の論過に歸する。即ち形而上學者の所謂靈魂は單に意識統一の意義を有する自我を實體的自我と同一視する所謂「四語の論過」に他ならずとし、心に就ては何も知る所がないから、唯物論も唯心論も共に成立しない、換言すれば是等何れかを立てる形而上學的心理論は此理念によつて統整せられるのである、とする。

第二の理念に對しては純粹理性の二律背反(兩可)が成立する、即ち世界全體に對しては諸點に於て矛盾命題が兩立するから、之によつて此問題の不當なることを知るといふのである。然し量と質とに關して世界が有限か否、不可分か否といふ問に對しては結局共に否といはざるを得ないが、關係様相の二點から云へば、何れも成立して世界は無限因果律の原因を有すとも否とも言ひ得べく、或は無條件的必然體があるとも否とも言ひ得る、即ち後の場合は矛盾が二つながら成立するのであつて、畢竟一は物自體に就て言ふのに對して他は現象に對して言ふからである。

終りに第三の理念に對しては純粹理性の理想として論じ得る。神は一切に對する無制約者と想念せられるが、此の諸性質例へば存在に關する形而上學の諸論證、即ち本體論的、宇宙

論的、物理神學的論證は悉く成立しない。但し是は無神を主張することではない。

此の如くして理論的理性の限界が説かれたのであるが、然し此理念に對する人々の要求は何等かの形に於て充たされねばならぬ。是れ次の問題である。

純粹理性批判には終りに方法論が説かれて居る。即ち形而上學の方法の説であるが、之に就ては純粹理性の訓練、規準、造構、歴史の四部がある。

第四節 『實踐理性批判』等

一 『實踐理性批判』

理論的理性は理念を課題として有したが、之を認識とするを得なかつた。然るに此問題に對して何等か更に積極的な解決を下すものが無いであらうか。カントは之を理性の實踐的方面に於ける作用に求めた。

實踐的行動の評價に關しては快否の如く人々の判断が一定しないものもあるが、善惡の別は普遍妥當的必然的である。即ち此種の判断は一の先天綜合判断であるから、其の如何にし

て可能なるかを、前批判と同様の形式で尋ね得る譯である。然るに理論理性に於ける空時範疇の如きものは實踐理性に於ては道德律であるから、同様に形式的なるものと見ることによつて其の先天性を維持することが出来るのである。

蓋し世に絶對の善と稱すべきものは善意の他にない。善なる行爲中、他の強迫によるものや、自己の性癖によるものは眞に道德的なるものと稱せられない。たゞ道德律の要求する所を義務として意識することによつて道德が成立する。故に道德に對しては經驗的感情の影響は排斥すべきものである。然るに此道德律は人に對しては自然法則と同様の形を取るものではなく、「某々すべし」といふ命令の形を執る。然も其命令は假定條件を許さないもので、常に斷(定)言的命題の形をとるから、之を斷(定)言的命令(Kategorischer Imperativ)とす。其命令は「汝の行爲の格率が常に同時に一般立法の原理となり得る如く行動せよ」といふ。是は理性自己が自らに課するもので、他に目的はない、其自身目的である。凡て他目的に使役せられる手段は物件で價格を有するものであるが、目的自身は人格(Person)で品位を有するものである。故に前命令を次の如く書きかへることが出来る。曰く「爾は爾の人格並びに各他者の人格に於て、人間性の品位を常に尊敬し、之を同時に目的として待遇し、決して單に

手段として使用する勿れ」。

斯る自律的意志は、一切行動の原因である。然も其のものは他の結果ではなく、自由である。此の如き自由は現象界には存しないが、然し道徳は之を豫想するものであるから、即ち道徳に關する人は、現象として必然法則に屬するが、又自由の存し得る物自體の世界にも屬しなければならぬ。此の如くして第二理念たる自由は實踐理性の要請となるを得たのである。

之より進んで此道徳と幸福との一致を説く爲には、生命の無窮に繼續すること即ち不滅の靈魂の存在と、此の一致を保障する神の存在とを豫想しなければならぬ。此に他二理念が又要請として復活したのである。斯くて實踐理性は理論理性に對して優位を有すといふのである。

以上は『實踐理性批判』及び之より少し前に公にせられた『道徳形而上學基礎』等に見える所である。然しながらカントの道徳説は批評期以前には、啓蒙時代説の影響を受けて居た。是等を確認しかめる資料は近年講義案等の出版によつて一般に知られるやうになつた。其他又晩年に『道徳形而上學』を著し法律及道徳に就て詳説して居る。

二 「判斷力批判」

實踐理性の理論理性に對する優位によつてカント哲學は二元論に陥つたが、此に兩種哲學の調和を要することゝなつた。第三批判は正に此任に當るものである。蓋し心理學上知意の中間に情を立て得るが、知と意とに就ては既に前二批判に於て説いたから、今は情に就て普遍妥當的必然なるものゝ存否を問題とせればならぬ。今判斷作用を見ると之に決定的（叙述説明の形）と反省的（評價觀賞等の形）との兩者があり、前者は特殊を一般で決定するもので普通の判斷に於て見る所であるが、後者は其の逆で、判斷の主體が判斷者に對する快否の價值關係を示すものであるから、此判斷力の批判は即ち快否等の情に就て批判することゝなるであらう。即ち此の前二批判の調和者を得る譯である。而して快否は目的に適すると否とによつて定まるものであるが、今自然全體を我々判斷者から離れてたゞ其自身の目的に適合すると見る場合と我々に對して目的適合的な影響を有するものとするのと二種ある。前者は目的觀的で自然哲學の問題を含み、後者は感性的審美的で美學に相當する。美學も亦前批判と同様の方式即ち分析論と辯證論とに於て論ぜられて居る。美學の語は啓

蒙哲學者バウムガルテンの創めたもの、其の問題は古代にも存して居たが、學的體系をなさしめたのはカントの力に負ふ所が多い。美の概念を範疇四綱によつて分析し、質に就いては無關心自由遊戯的快適（此點に於て快と區別する）、量及様相に於ては概念に基づかずして然も普遍妥當的必然的な趣味判断に存し（眞と區別する）、關係に於ては定目的なくして目的に合するもの（善と區別する）とせられる。此の如き解釋は美學上の形式説と稱せられるものであつて、此説が發展し改良せられて獨逸の哲學的美學を創出せしめた。

其他普通の美即ち優美と崇高とを區別し、美の形態として言語、形像、音調によるものを區別し、是等美を現し得る才能を天才と稱して其の特色を説く等、自らは美術上の體驗少なきに拘らず肯綮に中る言辭も頗る多い。

次に自然物は本來客觀的には必然法則に律せられるものであるが、之に拘らず、目的の觀念を容れて説くべきものもある。有機體は即ち是であつて、生活現象は全體と部分との相依的關係をなすものである。目的の觀念は要するに機械的自然觀に於ける發見原理となるものである。而して自然の特殊化は目的の觀念によつて始めて説明せられるべきものである。然し此目的が經驗界に於て客觀的に實在するとすることは其の理論と一致しないやうである。隨

て此目的觀を徹底すれば結局自然を自由の世界の下に擯することとなるのである。

三 宗教、歴史等

以上三批判を基礎として諸文化現象に關する批判も成立する。先づ宗教に關して、其原理は既に實踐理性批判に存するものであるが、之によつて更に現實の宗教を批判することに進み得る。之を試みたものが即ち『單なる理性の範圍内に於ける宗教』(Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft. 1792)である。道德意識には人の不完全の意識が伴ふ爲め、之より脱却せんとする需要があり、宗教の根據は此に存する。基督教の罪惡救済の諸説は正に之に應ずるものである。人性中常に道德的衝動に對して感性的衝動の強力なることが其の根本惡(Radikalböse)と稱せられる所以で、此不可思議から一躍更生の途に向ふ所にまた不可思議が存する。是即ち善惡の鬭争であつて最後の勝利は善にあるが、之に達する爲めには人々相團結して精進せねばならぬ。教會の意義此に存する、而して此意に遠ざかるものは即ち眞の教會と目すべからざるものである。

此宗教上の根本惡と關聯して歴史が説明せられる。歴史は人類の罪惡によつて生ずるもの

で、終局には完全なる自由に達すべきものであるが、之に必要なことは憲政の發達である。故に眞の歴史は政治史であり、此中に於て道德法律等の諸状態にある諸國が盛衰興亡の運を辿り、遂に各國の間に永久平和を得るに至つて世界の發展は其の極に達するのである。故に此の自由、平等等は歴史に於ける理念であり、先天的原理である。歴史哲學に關しては小論文が數種あるのみである。『永久平和に就て』は一部分に歴史哲學を含み、一の實際的理想の説として注意すべきものである。其の中に現今の國際聯盟の思想の存することは著名である。

第五節 批評哲學の傳承

一 批評哲學の信奉者及反對者

(一) 批評哲學の普及

カント哲學の流布する頃、文學も亦隆盛を極め、獨逸は歐洲文運の中心となつた觀がある。而して其の最も盛なものがいエナであつた。然し其初カントに關しては誤解と盲評とが多く、殊に其の純粹理性批判の出た當時は、啓蒙學者は其意を理解することが出來ず、或は

ライプニッツの亞流に比し、或はロックに比し、若しくは其結合に過ぎずとし、會々自己の理會する能はざる所に遭遇すれば理會するに足らないものとする。ニコライは諷刺の書 (Geschichte eines dicken Mannes; Leben und Meinungen Sympronius Gundiberts) を著し、メデデルスゾーンは一時カントの學を推賞して居たが、批判書が出るに及んで「一切を破碎するカント」などと評した。

カントの説は其原著より寧ろ解説書の方でよく傳はつて行つた。主著に對して直ちに現れた批評は取るべきものは少なかつた、所謂ガルズ及フェーダー (Garve-Feder) の批評 (ガルズが執筆してゴタ新聞記者フェーダーの加筆した) もカントに取つては全然誤解に過ぎなかつた。此際其の同僚ヨハン・シュルツ (Johann Schulze) が解説書 (Erläuterungen über des Herrn Professor Kants Kritik der reinen Vernunft, 1784) に於てカント説の宗教上危険でない事を辯ずるに及んで、其説に多少の信奉者を生じた。更に重要なのはイエナの一般文學新聞の編輯者、言語學者シュッツ及法學者フーフランド (Schütz, Hufeland) が之を機關としてカント説を普及し、各其の専門の學科に之を應用したることである。なほ同僚クラウスもやや懷疑論的辯護を試みたが、最有效だつたのはラインホルトの『カント哲學に對する書簡』

(K. L. Reinhold, Briefe über die kanstiche Philosophie)である。初め一七八六年から翌年にかけて Wieland の Deutsche Merkur とよ雑誌に掲載したものである。ラインホルトは後イェナの教授となり、益々熱心にカントの説を普及せしめた。

カントの第二、第三の批判書が出るに及んで其説は益々多数の信奉者を得たが、又反対も激烈であつた。一七九一年伯林の學士院は賞を懸けて「ライプニッツ、ナルフ以來形而上學は獨逸に於て如何なる進歩をなしたか」といふ問を發したが、シュワープ (Schwad) といふ人は毫も進歩がないと答へて選に入つた、是れ伯林の學者がカントの事業を無視する事を證明するものである。其他諸方で駁論が起り、大學によつては此説を講ずる事を禁止した所もあつた。

(二) 批評哲學に對する反對

是等反對家中最有力なものは感情哲學或は信仰哲學といふ一派である。其中にハマーン、ヘルデル、ヤコビ等を算する。其問題は(一)感性悟性の關係(二)物自體の二點に歸する。

ハマーン (Jah. Georg Hamann 自一七三〇至一七八八)の説はやヤプルーノに類して反對同一の理を唱へカントの二元論に抗した。元來ケーニヒスベルクの人でカントの哲學に服して居たが、其説

に飽足らぬ所があつた。其の『超批判』(Metakritik über den Purismus der reinen Vernunft)に於て感情と悟性との分離を非難して兩者の間に共通の根があるとし、言語といふ事實の存在を以て其の同一を證した。

ヘルデル (Joh. Gottfried Herder 自一七四四至一八〇三)も初めはカントの講義を聴き其説に服して居たが、後、己の著『歴史哲學考』(Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit)に對して下せる批評に就て私怨を懷いた。蓋しヘルデルはライプニッツに従つて自然と道徳とを連続的のものとして、歴史を自然主義的に解釋したが、カントは兩者を峻別して之を目的論的に解釋したので、勢、反對の意見を述べるやうになつたのである。かくてヘルデルは『悟性と經驗』(Verstand und Erfahrung, eine Metakritik zur K. d. r. V. 1799)に於てハマーン説によつて純粹理性批判の二元論を駁し、後又 Kalligone に於てはカントの美論を駁した。

ヤコビ (Friedrich Heinrich Jacobi 自一七四三至一八一九)は更に有力な批評を試みた。其の主要なる著書はスピノザに關するものとゴットムに關するものと二種である。(Über die Lehre des Spinoza in Briefe an Moses Mendelssohn. 1785. David Hume über den Glauben oder

Idealismus und Realismus 1789)。先づスピノザ説を以て論證即ち間接智の不完全なることを示すものとし、反面的に直接智即ち理性の信仰の效力を説いた。此信仰は又感情の要求である。故に其の哲學は信仰哲學若しくは感情哲學と稱せられる。

ヤコビは此立場からカント説の灸處たる「物自體」の説を批評した。謂へらく、カントは感性を説くに當りて素朴的に物自體を假定した。然るに後には之を疑ひ、遂に感性を成立せしめなくなつた。何者、感性は(物自體によつて)感觸せられる能力であるが、然し物自體には原因の範疇を應用し得ないから。其故に「我々は實在論の假定なくしてカント説に入るを得ず、然し之を以て其處に止まる事は出来ない」といふ。かくして其説を徹底すれば觀念論となるべく、世界はただ夢幻となり、カントの理性はただ自己を知覺するのみで、認識作用は疑知的なる主觀の x と客觀の x との間を彷徨するのみとなるであらう。故に實在はただ信する他はないといふのである。

斯る反對の裏面には又普及を努めるものがあり、Abicht 及 Born は批判書を羅甸文に翻譯し、更に解説の雜誌を發刊したが、別に其説の改造を圖るものを出した。

二 カント哲學の改造

(1) 單元哲學

カント哲學の普及に努力し而して其の改造を試みた者には先づラインホルトを挙げなければならぬ。ラインホルト(Karl Leonhard Reinhold)は一七五八年ギーンに生れ、初めジュースト派の教育を受け、後イエナで教授となり、キールに移り、一八二三年歿した。初め専らカントの説を紹介する事を努めたが、後進んで其の基礎を説かんとした。蓋しカントの説は人間理性の諸作用を論じて其條件範圍を定めたものである、然も普く人の信を得ないのは其の中心となるべき原理を缺いて居るからである。是に於て之を説く爲に基礎哲學或は單元哲學(Fundamentalphilosophie, Elementarphilosophie)を立てた。謂へらく、此目的を達するには理性作用の中心官能を知れば足るもので、是は表象作用(Vorstellungstätigkeit)である。之を説く書には『人間表象能力新説』(Der Versuch einer neuen Theorie der menschlichen Vorstellungsvermögens, 1789)等がある。

ラインホルトは此意識及表象に關する命題を以て根元的なるが故に不可論證であるとし、

普遍妥當的必然的な事實であるとする。凡て表象は主観及客観の意識を有し、表象作用は又此主観及客観兩者から區別せられる。故に根本原理は次の如くなる、曰く意識に於て表象は主観によつて主観及客観から區別せられ、而して兩者に關聯すると。

此原理からカントの所謂形質の別を説く事が出来る。蓋し表象中主観に關するものと客観に關するものとがあれば、前者は形、後者は質を生ずる。かくしてカントの所謂自發性と受納性、悟性と感性とを一理によつて説く事が出来る。物自體は不可知ではあるが、必ず思惟されなければならぬものとして其實在性を強め、之によつてカントの現象論を素朴實在論とならしめた。此に反對が生じて來たのである。

(II) 懷疑說

先づ反對の聲を發したものはシタルツ (Gottlob Ernst Schulze 自一七六一至一八三三) である。匿名の作『エーネシデムス』(Aenesidemus。希臘の懷疑家の名を以て書名とした) に於てラインホルト説を批評し、懷疑論の爲に辯じ、批評哲學も亦獨斷的假定を有する事を明にした。謂へらく、ラインホルトの原理は思惟必然を直ちに實在と假定したものである。所謂表象作用は無用の概念である、物自體も無用又不合理であると。斯くしてラインホルトの實在論

的解釋が反てカントに累を及ぼした有様であるのである。

(III) 批評的懷疑說

以上の消極的なるに比して寧ろ積極的といふべきはサロモン・マイモン (Salomon Maimon 自一七五四至一八〇〇) である。波蘭の猶太人で少より學才を以て聞えたが、後獨逸に出でて修業し、先驗哲學論 (Versuch über die Transzendentalphilosophie) 等許多の著書を公けにした。曰く、物自體は絶對的に矛盾の概念である。蓋し凡て概念の表徴は意識内の表象として存在するか、意識から獨立になつてはならない。然るに物自體は意識から獨立だといふ、是れ不可思惟の事で即ち不可能の事である、ただ不可認識のみに止まらない。然し表象の形式に對して其の質料を説かうとすれば、勢、意識外の物自體を想像するやうになる。マイモンは此理を説かうとしてライプニツ説を假り來り、意識が自ら生出するものに就ては完全なる意識を有し、意識中に何所からか外部より來たと認められるものに就ては不完全なる意識を有する。是れライプニツの所謂微小知覺で、之を「意識の微分」といふ。此の不完の關係を以てカントの自發性受納性の關係を説くことが出来るもので、即ち兩者の差は度の別に歸する。故に「所與物」は意識内に於ける無意識の產物である、物自體は完全なる意識に對する限界概

念である。カント及びラインホルトにあつては物自体は不知のXではなくして、數學上の虚數としての如きものである。之に對してマイモンの物自体は無限列の限界概念で所謂不合理數としての如きものである。合理的認識の不合理の限界の意識である。斯くしてマイモンは全然物自体を限界概念として觀念論を徹底した。之によつて物自体其他所與物に關する認識は不完全で學とならない事を知る。故に學はただ直觀形式の學たる數學と思惟形式の學たる先驗哲學とあるのみである。ここに批評的懷疑説が生ずる。

斯くしてマイモンはラインホルトに於て一たび實在論的に解せられんとした外物を意識内に歸せしめた。然も如何にして不完全と完全とが意識内に存するのであるか。之を説いてカント哲學に一生面を開いたのは實にフイヒテである。

此他フイヒテと前後してベックの「立場學」(Sigismund Beck, Standpunktlehre)があつたが、其説は更に規模の大なるフイヒテの爲に壓倒せられた。

第五章 羅曼派哲學

第一節 總 說

羅曼主義 (Romanistik) は狹義に於ては古典主義に對する文學派の名稱である。獨逸に於てはシラー、ゲーテ等に對してノヴリス、テイク、シュレーゲル兄弟等の一派を指すもので、十八世紀の終りから十九世紀の初にかけて獨逸を源として英佛等に起つた一群の文學派である。形式上には古典を離れて自由奔放の精神を尙び、其資材に於ては往々中世の事蹟を尋ねる。其の主義は藝術を中心として天才を法則以上とする。畢竟文藝復興の自由精神を繼承して、其の情的方面を發展せしめたものと言へる。而して其の尙美の點を廣く解すれば、シラーやゲーテも亦既に多少の關係があると見られ得る。

是等の文學は獨逸に於ては大抵哲學と錯綜して發達したが、此際カント哲學は諸種の形を執つて此の一般機運の中に入った。蓋シカントの哲學は知に對して情意の價值を主張し、客

觀に對して主觀の意義を重要視したが、是は正に羅曼派の精神と共通な所である。此の如くしてカントを繼承し之を發展した諸哲學は、其中に多少の異同はあるが、總稱して羅曼派哲學といふことが出来る。(羅曼を又浪漫と書くが、著者は好まない、且つ此字を以て稱す、羅曼と日耳曼とを聯想させたいのである)

所謂羅曼派哲學の特色は偉大なる組織を演繹的に建設することにあるが、是は恰かも羅曼派文士の空想的の精神と合致するものであつた。之を二大別して觀念論及實在論とし、又別に理性主義と非理性主義との二派を區別する。但し此に所謂觀念論(Idealismus)は羅曼派的思想の正系とも稱すべきもので、而して此 Idealismus といふ言葉は唯心論、理想主義といふやうな意味をも含有するが、一般には觀念論といふ語が今日多く用ゐられて居るから、之に従ふこととする。今是等に配當せらるべき主要なる哲學者を擧げれば次の如くなる。

觀念論	——	フイヒテ、シェリング、ヘーゲル
非理性主義的	——	シェリング、ショーペンハワー
實在論	——	ヘルバルト、フリース、ベネケ

此中の或るものは自ら明白に羅曼主義に反對すると言つて居るが、此には其の思想の傾向と其の背景とから概括して同一名稱の下に屬せしめたのである。

第二節 倫理的觀念論

一 フイヒテの傳記及び著書

フイヒテ(Johann Gottlieb Fichte)は一七六二年ザクセン國オーバラッヂツ郡のランメナウ村に生れた。祖先は瑞典王グスタフ・アドルフの部下曹長で、戦争で負傷してから此地に止まつたのである。父は中産以下の紐職工であつたが、我哲學者は幸に隣村豪族の助によつて修學することを得、シュール・ブフォルタを経て一七八〇年イエナ大學の神學科に入り、後ライプツヒに轉じた。保護者も歿し其の後嗣との關係が圓滑を缺く所もあり、フイヒテは自活の爲めに學事に専らなることを得ず、一七八八年チューリッヒで家庭教師其他の業に就て居たが、一七九〇年再びライプツヒに歸り、一學生の爲めにカントの純粹理性批判を講讀して、始めて求める所の學說に觸れたことを感じた。爾後更に深く此說を究め、終に翌年ケーニヒスベルクに赴き親しくカントに接したが、まだ十分好遇を受けず、其際『一切天啓批評試論』(Versuch einer Kritik aller Offenbarung)を著し、初めてカントに認められた。此書は匿名で

出版せられた爲め一時批評家の間にカントの作と誤認せられ賞揚せられたので、反てフィヒテの文名を高からしめることを得たのである。是より又一たびチューリッヒに歸還したが一七九四年イエナのラインホルトがキールに轉任すると共に其の後任となり、初は助教、後に正教授となつた。此で自説の知識學を講じ、又一般學生の爲めに「學者の道德」(後に學者の)を講じた。此間學生の尊信を得たが、又同僚等の嫉視を招き、屢事を起した。かくして終に一七九九年其の編する雜誌に提げた論文によつて無神論々争を惹起し、其結果職を辭せねばならぬことゝなつた。斯くて伯林に移り、交遊の羅曼派文士に迎へられて、私の講演著述等に從事した。一八〇五年エルランゲンに聘せられたので講義期間だけ其地に止まることゝなつた。一八〇六年佛軍が伯林を占領したので一時難を避けたが、後歸還し、一八〇八年「獨逸國民に告ぐ」(Reden an die deutsche Nation)の連続講演を試みた。一八〇九年伯林に大學が新設せられると共に其の教授となり、續で第一回の互選總長となつた。一八一三年獨軍が蹶起して佛軍をライン河の彼岸に撃退せしめるに當り、フィヒテは學生の士氣鼓舞に努めて居た。夫人は篤志看護婦となつて居る間、兵士の悪疫に感染したが、後フィヒテは更に又之に感染し、終に一八一四年一月二十九日(公文に從ふ。普通は二十七日)病むこと十數日にして歿した。

著書論文は後其子ヘルマン・イマヌエル・フィヒテの編纂した全集八卷補遺三卷の中に大抵採録せられて居る。其の主なるものは知識學に關する諸著『知識學の概念に就て』『全知識學の基礎』『知識學第一及び第二序論』『自然法の基礎』『道徳學體系』等(Ueber den Begriff der Wissenschaftslehre. 1794; Grundzüge der gesamten WL. 1794; Erste und zweite Einleitung. 1797; Grundlage der Naturrechts 1796; System der Sittenlehre 1798)とある。其他『人間の本分』『學者の本分』『現代の特徴』(Bestimmung des Menschen. 1800; Bestimmung des Gelehrten. 1797; Grundzüge des gegenwärtigen Zeitalters. 1806)等の通俗的著書や知識學に關する後年の諸講案等がある。近時其遺稿等が出版せられて研究資料が豊富になつて居る。其の思想に就ては終始一貫する所があることは事實で、即ち其の全體が自我の哲學たることに疑ひはないが、其の自我の重點が多少變遷して居る。但し非常に細密に區分する説もあるが、少なくともイエナ時代と伯林時代とに二大別することは通説となし得るであらう。

二 知識學序説

(1) 其の問題

、フイヒテはラインホルトの如くカント説を一理から演繹しようとし、然も更に高い所から之を試みんとした。蓋しカント哲學の精神は先驗觀念論であり、對象を表象に歸するものであるが、後の學者之を思はずして「物自體」の觀念に拘泥するのは不可である。然も此の如き誤解の生じたのは畢竟カント説に對して基礎を定め形式を整へることが缺けて居るからである。フイヒテは此の如く考へて知の學即ち「知識學」を以て此任に當るものとし、之を眞の哲學だとした。即ち此知識學によつてカントの理性範疇の説に一貫せる必然的關係の存することを示さうとし、ラインホルトの如く心理的説明に止まらずして、理性自己の活動より純粹に論理的に演繹せんとした。然も此の個々の活動は常に其の目的に對する手段たるものであるから、其の活動は全然倫理的調子を帯びて居る。此點からフイヒテの説は倫理的觀念論(唯心論)と言はれる。

(III) 其の立脚地

此の如き知識の根本的必然關係を論ずる學は、結局諸學の共通に假定する所の知識其ものの學である。今知を分析すれば主觀と客觀との兩要素があるが、其の何れを基とすべきであらうか。客觀から説くものは獨斷論(即ち實在論)で、主觀よりするものは觀念論である。其

他に兩者の混合が考へられるが、是は實は不可能であるから、勢二者の一を擇ばねばならぬ。此兩者は一は唯物論宿命説となり一は恰かも之に反する結論を導くものであるが、何れも其自身推論上に誤りはない。隨て之を選擇するには理智以外に意志の満足に基づかねばならぬ。其故に、如何なる哲學を擇ぶかは其人の如何なる人なるかに依るものである。斯くして受動的な自然生活を欲するものは獨斷論に傾き、活動的自由生活を欲する者は觀念論に就かねばならぬ。且又認識問題を完全に説明する點に於ては、觀念論を優れりとするし、又此論は經驗的意識以外に何等の假定を含まない。是等の點よりして知識學の立脚地は當然觀念論に歸せねばならぬとせられる。

此立脚地からすれば、知識は事物と觀念との合一ではなく觀念自身の内的決定で、其中に必然性の感情を伴ふものである。其根柢は何等實體の意を含まざる所の純粹の活動あるのみで、其の活動或は行動自身が一切の事功を生ずるものであるから之を事實(Tatsache)に對して事行(Tathandlung)とす。而して是は意識の反省で即ち自我の語を以て表される。但し其は經驗的自我に非ずして絶對的自我である。即ち知識學は此の事行として見た自我を根本原理として之より一切を演繹するものである。

三 知識學の根本命題

知識學は學として一の必然的體系をなすものであるから、其中の諸命題は一の根本命題（原理）から演繹せられなければならない。此原理は自己確實なものであるから、命題を構成する内容と形式との兩者共に他から決定せられない、之を絶対的原理といふが、なほ他に形式若しくは内容のみが自己決定的なものがあつて、之を相對的原理といふ。斯くして原理は三個あることとなる。

第一原理——先づ自己意識を反省し其中に於て最明瞭不可疑なる命題を求めて $A \parallel A$ とすふ命題を得るが、是はAから導かれたのではなく、Aを定立 (setzen) する者、即ち自我の作用から導かれるものであるから、其の根柢に自我の定立の存することを知る。斯くして、「自我は根源的に端的に其の自己の存在を定立す」といふ原理を得るが、之を論理的に言へば同一の原理、形而上學的には實在の範疇となる。

第二原理——次に、 $A \parallel A$ に次ぎ最明なもの「非AはAならず」といふ命題であるが、此場合は内容はAに基づくものであるから決定的であるが、形式は無決定であつて相對的原理

となることが出来る。前の $A \parallel A$ は定立であるが、今のは反定立である。即ち非AはAに反對としてのみ定立せられるから、前原理が自我によつて定立せられるのに對して、是は非我によつて反定立せられるものである。斯くして第二原理は「自我に對して非我は端的に反定立せらる」となり、論理的には矛盾の原理、形而上學的には否定（絶無性）の範疇を得る。

第三原理——以下兩原理の矛盾を解除する爲に第三原理を生ずるが、此の原理はAと非Aとを兩立せしめるが爲めに兩者をして互に限定せしめることを規定する。即ちAは一部分非Aとなり、非Aは一部分Aとなるので、之より「自我は自我中に於て可分的自我に對し可分的非我を反對定立す」といふ第三原理を得る。是は形式が限定といふことで決定せられて居るが、其の内容は無決定である。論理的には理由之原理（Aと非Aとの等しくなる理由を説くが故に）となり、形而上學的には限定の範疇に當り、且つ限定は分割を豫想するから性質範疇の一群は必然的に分量範疇の類に移ることとなる。

四 自我の演繹

以上の三原理を根本命題として、他は之から派生するが、其の方法は三原理相互に於ける

定立、反定立、總合の關係を表す三段に擬するものである。今第三原理を分析すれば、其中に次の二命題が含まれる、即ち

(一) 自我は自我によりて限定せられたるものとして非我を定立する。

(二) 自我は非我によりて限定せられたる自我を定立する。

(一)は自我の認識作用で、(二)は其の行動作用である。即ち(一)は理論的自我、(二)は實踐的自我である。然し(一)は(二)の段階を経て現れるのであるから、先づ

理論的自我の演繹

から説かねばならぬ。之が爲めには先づ第三原理の矛盾を見なければならぬ。自我は非我に限定せられる點に於ては受動的であるが、非我の舞臺たる點に於ては能動的である。此矛盾を解くには、自我中に於て等量に決定と所決定との作用をすらしなければならぬ。是が所謂交互作用であるが、其の自我が受動で非我が能動たる方面は因果關係であり、自我に能受兩面の活動があるとすれば、能動は全體活動で基本的實體に當り、受動は其の一部分で偶性を示すものとなり即ち實體性の範疇に當る。かくして關係の三範疇の間に必然的聯絡が成立することとなる。

是等三關係は自から哲學上の立場を示すもので、自我非我の關係を因果的に解するものは獨斷的實在論、體性的に解するものは獨斷的觀念論であり、交互作用的に見るものは批評的觀念論となる。即ち此最後の立場により、自我の活動は生出作用と解せられるが、是に不測の妨碍が生ずると共に、其の反映によつて對象が感覺せられ、更に、此感覺の反映、反省によつて直觀が生じ、之に對して想像力が働き、次第に判斷、推理の作用となり、自我は非我を離れて自我自身を對象とするに至るのである。即ち此に自我は非我に對して能動的となり、

實踐的自我の演繹

を説くを要することとなる。

眞の自我即ち絶對的自我は無限であるが、理論的自我は有限であるから、兩者は矛盾するので之を解除する途が無ければならぬ。抑も理論我が有限となるのは對象を表象とするからで、即ち妨碍を受けるからである。而も其の何故に然るかを解することは理論我に於てはなし得ざる所であるが、是は正に其が實踐我とならんが爲であると解せられるのであつて、此に後者の優位が存するのである。蓋し自我の本質は無限活動で、即ち永久の努力であり、其の限り目的は常に到達せられず、自我は自ら其の制限を定立しつゝ之を超越しようとするの

である。故に理論我の感覺は實踐我の活動の原因である。即ち感覺界は道德發現の手段として存するものである、何者、抵抗がなければ力は生じないから。此の如くして妨碍は演繹せられたのである。

斯くて純粹絶對の自我は無限の努力即ち衝動として存するもので、此努力の實現の爲めに客觀界が存するのであるから、世界の根柢は實在的原因ではなく、活動であり、而して此活動は其究極に於て自我自己を律する道德活動に歸するのである。

五 法律、道德、宗教

此の如く知識學に於ては非我即ち自然は自我即ち精神の道德活動の手段としてのみ存在するものであるから、此部分は哲學的問題とならない。哲學と言へばたゞ精神に關する方面のみ存する、即ち知識學の原理は初は主として法律道德等の論議に應用せられ、後伯林に移るに及んでは宗教歴史等の問題に及んだのである。

法律論に於ては實踐我の作用が自由なる點から、有限的理性體即ち各自我の對立上相互に自由を認容することを要するが、法的關係は之によつて生ずるものである。フィヒテはかく

して法を批評哲學的に演繹し、更に法律の諸特權及び實際の關係に就て詳論して居る。

同様に自我の自由を基礎として道德律も亦演繹せられる。即ち自我其自身は自由であるが、之を意識すれば對象となるのであるから一種の非我の如き性質を具へ、隨て之に對して法則の形式に於ける道德律を生じなければならぬ、然も此道德律の實現は永久の課題であり、是は各人が其の本分義務を遂行することによつて漸次に到達すべきものである。此にカントの斷言命令が行はれ、義務の爲に義務を盡せといふ最高法則を生ずる。即ちフィヒテに取つては義務あるによつて世界が存するのである。此の如くして其の道德論に於ては進んで義務の分類細説に入つて居る。

此の如くイェナ時代には道德を中心として爲めに無神論の疑を招くに至つたが、伯林に移つてより後次第に宗教的となり、『人間の本分』に於ては疑、知の上に信を置き『福祉生活の指導』に於ても宗教的境地を説いた。(「本分」も又「使命」と譯す)

更に又『現代の特徴』『獨逸國民に告ぐ』の二篇に於て歴史哲學の問題に入り、理性に理性本能、理性教權、理性解放、理性(知識)、理性藝術(創作)の五段を區別し、現代を其第三に位して放埒の弊に陥るものとし、理性が行動創作と一致する境地を歴史生活の理想とした。

第三節 審美的觀念論

一 シュリングの傳記及著書

フィヒテは其の自我を主とする點に於て羅曼派的な所があり、實際又羅曼派文士の間に重んぜられたが、其の全體の調子の倫理的な點は、社會道德の羈絆を無視する文士とは選を異にする所が多い。之に反して眞に羅曼派的哲學の代表ともいふべきものは、自然及藝術の哲學を説いたシュリングである。

シュリング(Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling)は一七七五年ウールツテンベルクのレオンベルクに生れた。父は僧籍に在つて東方語に熟達せる學者である。一七九〇年テュービンゲン大學の神學科に入り、詩人ヘルダーリンやヘーゲルと交友となる。一七九六年ライプツヒに於て自然科學と數學とを修め、一七九八年イエナの助教授となり、フィヒテと交り、初め専ら其說に従つて居た。一七九九年フィヒテの後任となり、一八〇〇年ヘーゲルを此地の講師に招き、共に雜誌を編輯した。一八〇三年シュレーゲルの夫人であつたカロリーネと

結婚した爲にイエナを去らねばならなくなり、ウエルツブルクの教授となつた。一八〇六年ミュンヘン學士院に入り、一八二七年此地に大學が建てられた時、其の教授となつた。此地で伯林のヘーゲルと敵視して居たが、一八三二年ヘーゲルの歿後、一八四一年普魯士王に聘せられて伯林の大學に赴き、一八五四年ラガツといふ溫泉で歿した。

シュリングの著書は種々あり、全集は十四卷である。是等の諸書は其思想の發達の時期を示すもので大體次の三期に大別せられる。今此に代表的な著書を二三附記する。

(一)一七九七—一八〇〇

(イ)自然哲學——『自然哲學考』(Ideen zu Philosophie der Natur. 1797.)

(ロ)先驗哲學——『先驗哲學體系』(System des transzendentalen Idealismus. 1800.)

(11)一八〇一—一八〇三

同一哲學——(イ)『我が哲學體系の敘述』(Darstellung meines Systems der Philosophie. 1801.)

(ロ)『ブナー』(Bruno oder über das göttliche und natürliche Prinzip der Dinge. 1802.)

(三) 一八〇四——

宗教哲學——(イ)『人間自由の本質』(Philosophische Untersuchungen über das

Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden

Gegenstände, 1803.)

(ロ)『神話の哲學』(Philosophie der Mythologie; Philosophie

der Offenbarung.)

此他になほ『藝術の哲學』(Philosophie der Kunst, 1802.)等諸篇がある。

今次に三期の特色を略論する。

二 第一期——自然哲學と先驗哲學

(一) 自然哲學

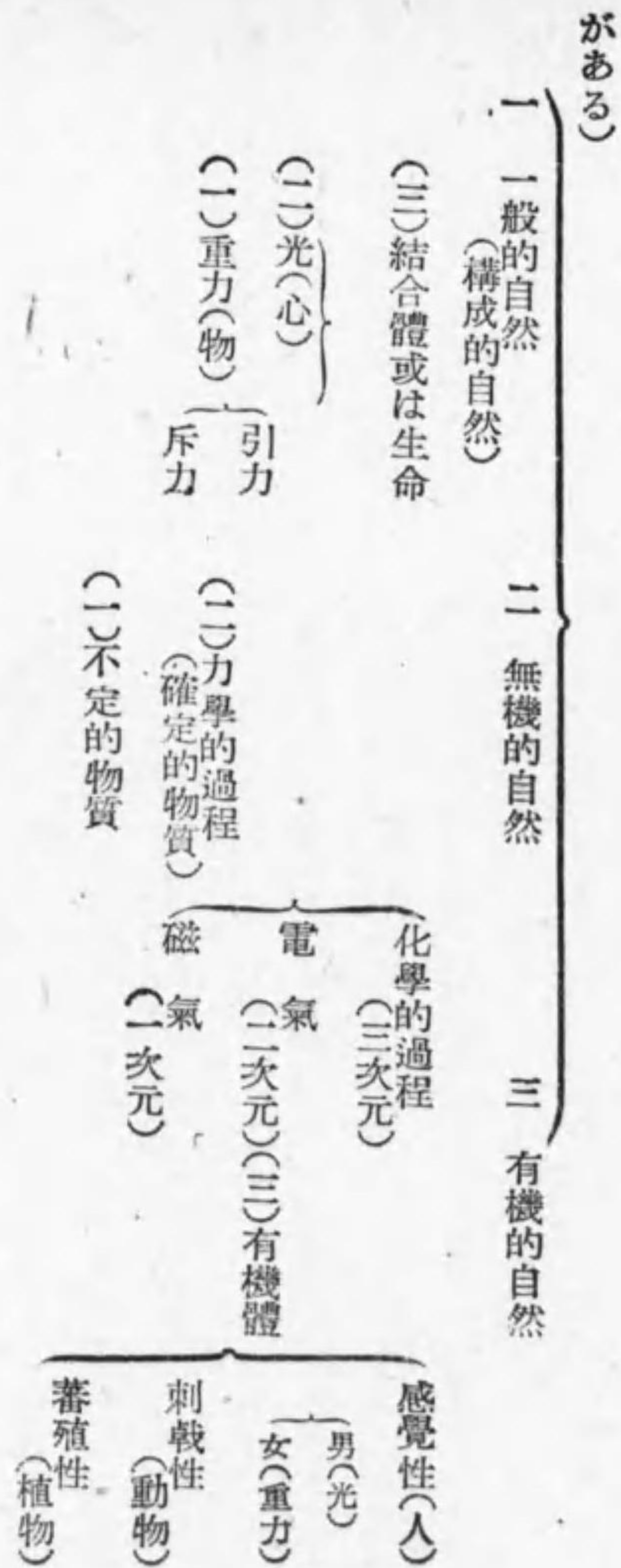
シェリングは初めフィヒテの知識學を奉じ、『自我に就て』と題する論文を草したこともある。然も兩者性格の相違は長く論一の問題に止まらしめない。フィヒテは自然を以て道德實現の手段に過ぎないとした、カントも亦自然を理性の所産としたが、之を純必然的のものとして

した。是に於てフィヒテの目的觀とカントの必然觀との間に新見解を容れる餘地がある譯であるが、シェリングは即ち之を説いたものである。謂へらく、自然は理性から生じて自己の目的を充たさんとする所の大なる體系であると。抑も知識學に於ては個々の感覺内容を障礙即ち無意識作用の結果としたが、此無意識作用は本來理性の所業であるから、是等對象は法則に従ふ筈である。故に知識學の立脚地を進めて自然を演繹すれば無意識的靈知の作用を経て意識的靈知に達せんとする所の過程に他ならない。故に自然の目的は生活體、殊に人類にある。隨て自然哲學は全自然過程を低級の力の共同から高級のに移り意識を生ずるに至ることとして考察するものでなければならぬ。故に自然は事變の偶然的連結ではなくして一有機體であり、各部は生活と意識との爲に存するものである。斯くして自然科學は精神の成生することの記録であり、其各段階を自然の範疇といふ。是れ即ち理性が無意識的から意識的に至る必然的形式である。先驗觀念論は自然的現實の個々の經驗的規定を自我の一般的形式制定から演繹せんとするもので、自然哲學は即ち其前提をなすものである。シェリングはかくして當時の自然科學を基礎として其の自然哲學を構成した。

自然哲學は全自然過程を一理で説明しようとするものである。自然は靈知の過程であり、

其の目的は生命である。即ち生は本源であつて、死は生の不完全な状態である。而して全體としては自然は生體である。斯くしてスピノザ流の全體觀とゲーテ流の審美觀とが合同せられる。個體は全體の手段である、即ち個體は消滅して他を生ずるもので、此に生命がある。故に自然の本質は反對力の對抗である、即ち二元性(Dualität)と兩極性(Polarität)とは自然の生々作用の根本形式である。兩極を總合しつつ自然は發展するもので、此事を最もよく表示する物體は磁石である。斯く自然は反對力の總合の結果として生ずるものである、故に自然界の「物」は「力」の所生である、即ち「有」は「成」の所生である。斯くして「原力」を古來の「世界精神」の思想と結合して自然を統一的生命と解するを得るのである。而して是は知的直觀によつてなすを得べきものとせられて居る。

此原力發現の段階は自然の範疇と稱せられるもので、其の根本の形式は求心遠心の二力である。即ち引力及斥力として顯れ、其の發現の程度によつて重力、粘着性、彈性の三段となり、物質に對するエーテルとなり、其の結合によつて光熱等の現象を生じ、更に磁電等や化學作用を経て生體に至るとして、燃燒に關する新説や電氣生物に關する當時の新研究を自在に取入れてここに哲學を構成した。其結果次の如き表となる。(此表は書によつて多少の變更がある)



(II) 先驗哲學

自然哲學は自然から靈知に至る過程を説くものであるが、更に靈知自身の演繹を説かなければならない、是又知的直觀を要するもので、大體フイヒテの知識學の順序に従つて居るが、更に之に美の論を以てした所に特色を有する。而して此美論がシェリングの哲學の基調をなすものなのである。

蓋しカント哲學は美的判斷力の批判を以て理論的及實踐的の兩種理性批判を調和したものであるが、フイヒテは實踐理性の優越のみを説いたので、美論の方を繼承したものは文學者のシラーであつた。遊戯衝動即ち藝術を以て形式衝動即ち道德と質料衝動即ち快樂とを調和しようとした。此説は羅曼派文士の間にて益發展したが、シェリングは之に哲學的形式を與へたものである。其説は三部に分れて居る。第一部は理論的自我の演繹で、感覺から直観、直観から反省、反省から判斷に至る三段に分けて論じてある。第二部は實踐的自我の演繹で衝動から意志に至るまでを説き、歴史哲學等をも附論してある。以上は大抵フイヒテの知識學と同様であるが、第三部は兩者の調和として審美門といふべきものである。美感の對象は目的無くして生ぜられて然も目的ある如く見えるものであるが、自然は即ち然か觀ぜられるもので、之を自己中に發見した場合に美的直観となり、意識と無意識との合一となる。天才は即ち特に此直観を有するもので、靈知にして而して自然である、而して其の作品が即ち藝術である。斯くして理論的自然と實踐的目的とは此自然美及更に一層根本的なる藝術美によつて調和せられたのである。

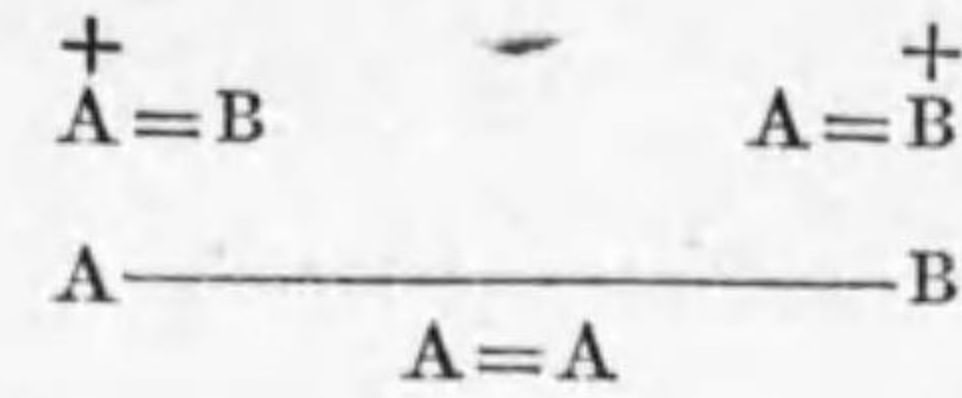
三 第二期——同一哲學

自然哲學に於てフイヒテの閑却した自然に對する説明を補ひ、而して之を靈知と結合して説くことによつて藝術を極致とする先驗的觀念論を説くことを得た。シェリングは今又更に進んで此兩者を結合する新立脚地を求めようとする、蓋し是れ當時羅曼派の空想を重んじ、一切を一に歸せんとする氣運に一致するものである。

シェリングは既に自然と自我とを對立せしめたが、其間に共通の基礎がなければならぬ。フイヒテは之を絶對的自我と呼んだが、シェリングは自我の語を避け、單に「絶對者」(das Absolute)或は絶對的理性或は又神と言つた。此にスピノザ説が復活した觀がある。而して更に之を活力的原理と見る所にライブニッツ的な所もある。シェリングがカントより溯つて寧ろ反對のスピノザに近づいたことは、其の『我が哲學體系の叙述』がスピノザの『エチカ』の筆法に倣つたものである所からも察知せられる。

シェリングの絶對論の根柢には知的直観の説がある。然し是はフイヒテに於ける如く自我の自己直観ではなく絶對者の直観である。是れ全くカントに取つて禁ぜられた果實であつたの

である。然し直觀的精神は一絕對者の官能であり發現であるから、此直觀は同時に絕對者自身の自己直觀である。斯くして主觀及客觀の同一としての絕對者の概念が生ずる。即ち絕對は主觀及客觀の完全な無差別の合一である。主觀客觀の對立は精神と自然觀念性と實在性と對立と同義になるから、絕對者は觀念的でも實在的でもなく、兩者の絕對的歸一或は無差別である。之を磁石に喩へることが出来る。其の兩端に兩極を表し、中間は一切對立の合一であるが、絕對者も亦然かなるべきである。故に此絕對者は神祕家の神のやうなものである。此關係を次の如く表はすことが出来る。



上圖中

- A=A……無差別
 - A=B……分量的差別
 - A(=S)……主觀的
 - B(=O)……客觀的
 - + A=B……精神
 - + A=B……自然
- の意とする

斯くして此線上に種々の程度を以て物心の諸現象が排列せられるのである。有限物の差異は自然的及精神的要素の分量的差別に存する。此にスピノザと異なる所が生ずる。蓋しスピノザに在つては有限物は全然異つた二つの領域に分れるが、シュリングにあつては絕對的理性は二つの領域に分れ、兩要素の何れかが増減して或は自然の列となり或は精神の列となる。即ち自然に於ては實在的要素が重くなり、精神にあつては觀念的要素が勝る。かくして中間の無差別點に達するもので、此發展の諸階段を「ポテンツ」(Potenz) (力の段階)と名づける。今其の兩列を表示すれば

—— 實在的要素 —— 物質(空間)、光、有機體
 —— 觀念的要素 —— 道德的自己意識、理論的自己意識、美的自己意識

以上の間にも中間の段階がある。而して兩列の現象は皆一に偏する。有機體の極たる人はなほ物的な所があり、觀念的列の最後たる藝術に於てもなほ觀念的要素が勝つて居るから、眞の綜合は特殊の現象に於ては不可能で、ただ現象の總體即ち宇宙(Universum)に於てのみ見られるもので、是は畢竟絕對の完成した自己發現である。絕對的有機體と絕對的藝術品との歸一である。斯くしてシュリングは世界を神にして又藝術的だとした。「ブルーノ」はブル

一ノを主人公とした對話篇であるが、其中にブルーノの説に擬して此宇宙觀を説いてある、蓋し史上ブルーノは宇宙の生體なる事と反對の合一とを唱へて、正しく此説に類して居るからである。

『ブルーノ』は對話篇たる點に於てブルーノの書とも體裁を同くするが、溯つてプラトン或は寧ろ後世の新プラトン説の影響を示すものである。此點に於てシェリングの「ポテンツ」論は「イデア」論とも見られ、即ち其説が結局實在的よりは觀念的要素に勝つ事を示して居る。

四 第三期——宗教哲學

シェリングは既に絶對に於て萬物を合一せしめ、即ち汎神論を説いたが、此に問題が生ずる、即ち如何にして世界が神から出たか、といふことである。エッセンマイヤ(Eschenmayer 自一七五〇)は『哲學より非哲學への移り行き』(Die Philosophie in ihrem Übergange zur Nichtphilosophie. 1803)に於て觀念が神より生ずると説く結果、哲學が宗教に入らねばならぬことを説いた。シェリングは之に刺衝せられて一八〇四年『哲學と宗教』を著し、其の同

一哲學の範圍を擴大して哲學と宗教とを同一視せんとし、ここに理性主義を脱して非理性主義に入り、接神論を説くやうになつた。

絶對を神と同義と見ると、此絶對の自己認識は觀念で、即ち神性の永久的自己客觀化である。然し神から觀念が墮落(Abfall)することは神の本質からは理會し難い。即ち必然に認識せられる事實ではない。故に絶對から有限の生ずることは不合理であつて原的事實である、之を認識し記載し得るのみである。是れ觀念が絶對的たらんとする希求から生じたもので、其中に墮罪の特質を具へて居る。即ち世界の發生は觀念の本質上可能であるが必然でなく、一の絶對的自由行動である。

是に於て自由の論が宗教哲學上重要なものとなる。一八〇九年の自由論に關する論文に於て之を説いて居る。蓋し自由を無條件的隨意の意味とすれば認識上肯定し難いから(スピノザの説の如く)、自由の概念を變更しなければならぬ。即ち神に制約せられることを許さねばならぬ。然して又フイヒテのやうな觀念論の立場から一切を自由とすれば特に人の自由を論ずることが出来なくなるであらう、蓋し此に所謂自由とは善と共に惡をなし得る自由であるからである。斯くして兩者を合すれば神中に惡のある理を説かねばならぬ。

從來の惡に關する説明を見ると、大別して二となる。其の一たる消極觀は惡を以て善の制限に過ぎずとするし、他の積極觀の中、神が共同原因だと見る内在説と神外に原因があるとする二元論とがある。是等は何れも不完全であるから内在説と二元論とを結合し、神の中に神ならざるものが存在すしなければならぬ。是れ昔ヤコブ・ペーメの説いた所である。即ち神中に自然無意識的なものがあつて、是が暗黒な基礎となり、神に其の示現を迫る所の刺衝を生ぜしめる。是が悟性で明にせられない暗い意志である。其の標的は悟性で、意志中の意志である、即ち神の類像を示現せんとする作用で、之によつて神の原的統一は分裂し、特殊個體の意志が跋扈し此に惡を生ずる。此の原的惡が人心中に現れて所謂惡業を生ずる、即ち個體的意欲の專横が、惡の根源であるが、人は其の自由によつて之を轉じ全體的自然に從ふやうになることが出来るのである。

以上、絶對即ち神の向下して差別界に趣く途を説いたが、次ぎには神人の關係及び神の發達を説くを要する、是れ神話及び天啓の哲學の題目である。シェリングは神話に關する研究を以て其の高等學校の卒業論文とした。今年に及んでまた之に歸する觀がある。然し此部分には哲學史的興味に乏しいから之を省略する。

五 シェリング哲學の影響

シェリングの哲學は一時種々の點に於て學界に影響した。先づ其の自然哲學は Dielfens の地質學、Oken の生物學、Schubert, Carnus の心理學等に影響し、其の同一哲學は Hegel, Truxer, Krause 等の説と關係し、宗教哲學は Bader, Schleiermacher 等を誘つた。クラウゼは萬有在神論 (Pantheismus) を説き、バーデルは接神論を説いた。シェライエルマッヘルは哲學倫理等諸方面の著書があり、實在と思惟との同一に歸すること等を説いたが、殊に有名なのは其の宗教論である。宗教の本質を絶對的倚依感情に置いた。以下之を略説する。

六 シェライエルマッヘル

シェライエルマッヘル (Friedrich Ernst Schleiermacher) は一七六八年ブレスラウに生れ、神學哲學等を修め、初めハレの牧師、教授となり、後伯林に移り牧師となり教授となつた。其の著には宗教に關するものも多いが、又哲學に關するものも少なくない。其の問題は一言にすれば、生きた基督教信仰と獨立自由の學的研究との調和を圖らんとしたものである。

其の著書には宗教に關する講演 (Ueber die Religion, Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern. 1789) 其他獨語錄、諸說教集、基督教信仰論等がある。初めの講演に於て宗教の本質を説き之が爲めに辯護を試みた。カントと同じく神學的獨斷論の學的妥當性を拒んだが、人性中に宗教に對する素質、即ち無限永久なるものに對する感情の存することを認め、所謂神に對する端的な倚依感情が即ち宗教の基礎にあるとせられる。而して此無限なるものをスピノザに於ける如く有限悠忽的なるもの、中に看出しカント及フィヒテに反して實在論を執つた。かくして學問も藝術も結局實在的意義を有して宗教と合一するとせられる。哲學上の著述は「辯證學」(Dialektik)と題せられる。此語の意味は「論證の術」といふことで、即ち論理學認識論形而上學等を總稱するものであり、其説の立脚地は思惟と存在との一致を基礎とする所に存する。此書の先驗的部門は知の理念を其自身にて考察し、技術的或は形式的部門は其の運動の狀即ち成生を論ずる。知に形と質との別があるが、知の形は同時に存在の形でもあるとする所にカント、フィヒテ等の觀念論を越ゆる所を示す、然もヘーゲルの辯證法に於ける純粹思惟の説には反對する。結局觀念論と實在論との合一を説くものであるが、其の基礎を神に置く所に其の哲學が徹頭徹尾神學的宗教的なることを示す。然も其神は

概念的ならず、又所謂人格的なるを要せず、たゞ生ける神たることを要すとす。
別に又「倫理學」の著もあるが、之に於ても理性と自然との合一の點から考察し、自然法と道德法とは根本的に差別がないと見て居る。

●ユライエルマッヘルは羅曼派文士との交遊深く、又プラトン對話篇の翻譯者として著名である。

第四節 論理的觀念論

一 ヘーゲルの傳記及び著書

ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel)は一七七〇年シュトゥットガルトに生れた。父は此地の官吏であつた。一七八八年テュービンゲン大學に入り神學及び自然科學哲學等を修め、神學寮の舍生として後年の哲學者シェリング及び詩人ヘルダリンと親しく交り其の影響を受けて居た。一七九三年から九六年までベルンに、之より八〇年までフランクフルトに家庭教師となつて傍攻學に努めた。此間宗教上政法上の諸論文を草したが、漸次哲學問題に

意を傾け、専らシェリングの説に従つて居た。一八〇一年シェリングに招かれてイエナ大學の講師となり、共に雑誌を發行したりして居た。後に助教となつたが其頃シェリングは他に移り、ヘーゲルの思想も漸次獨立して來た。其結果は一八〇七年出版の『精神現象論』(Phänomenologie des Geistes)に於て現れて居る。此書は實に其前年イエナがナポレオン軍の砲撃を受ける前夜急遽脱稿したものであつた。此戰亂の結果、イエナ大學は一時閉鎖されたので、ヘーゲルは暫くバンベルクに新聞記者となり、後ニュールンブルクの高等學校校長となり、此地に於て『論理學』(Wissenschaft der Logik)を著した。一八一六年ハイデルベルク大學の教授となり、再び學界の人となり、翌年「哲學概論」(Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse)を出版した。一八一八年柏林大學に聘せられて一八三一年歿時に及んだ。此間名聲隆々として一世を風靡したが、著書の出版は一八二〇年の「法律哲學」(Grundlinien der Philosophie des Rechts)のみである。歿後門人知友協力して其の講義遺稿等を編纂し全集十八卷二十二冊を出版した。

二 總 說

(一) 立 脚 地

ヘーゲルは初めシェリングと合同して居たが、漸次分離するに至つたのは兩者の性格學風の自ら然らしめた所である。此事は精神現象論の緒言に述べた所で明かである、即ち其中に次の意味の文句がある。曰く論者の絶對は(一)短銃より射出せられたやうである、(二)暗夜に牛皆黒しといふやうだ、而して(三)論者の學系は赤緑二色のみを有する畫家が人物畫には赤色、風景畫には綠色と定めたものやうであると。(一)は其の説の直接智を、(二)は其の無差別同一觀を、(三)は其の想實二列の圖式的峻列を諷したものである。ヘーゲルは之に對して(一)理性主義(二)觀念論(三)發展説を主張し、シェリング、ヤコビ等の直觀哲學、カント、フイヒテの反省哲學に對して之を總合せんと試み、之によつて理性主義の絶頂に達するを得たのである。

(二) 方 法

此目的を遂行する方法を辯證法(dialektische Methode)とす。此語は本來對話談論の義を有する dialegomai, dialegesthaiからつくられた語で、一概念の定立(These)は其自身の中から之に對立する否定概念の反定立(Antithese)を生出し、兩者相對立すること恰かも二對

話者の如くなり、其中より、前の否定概念は更に又否定せられて第三概念の綜合(Synthese)を生じ、更に又新たな否定と其の否定とを發展し行くものと見るのである。是が絶對を認識する論理的方法であるが、同時にまた絶對自身の發現方法とも看做される。かくて一概念は其次の概念によつて否定せられ又取り入れられる。此事を獨逸語 aufheben(止揚、揚棄等と譯せられる)にて表はし各は次のもの、das Moment(動力要素、契機)となるのである。斯くして概念は理念(Idee)に至つて一體系をなすが、之を全體として一括すれば、絶對精神がたゞ論理的に自體的發展をなすものである、之を an sich(即自)とす。此精神が一轉して他者となり、自然に對するもの、即ち für sich(對自)となり之より「他」(anderes)となるものを總括して自然といふ。更に又内に返り己に歸すれば An und für sich(即自且對自)となる、之を狹義の精神(Geist)とす。かくして全哲學は論理學、自然哲學、精神哲學に分れる

(三) 序 說

此の如き概念發展に達するまでの意識の發達を叙するものが「精神の現象學」である。故に此書は全哲學の序說の如き役目を有する。先づ直接なる意識狀態から發し、其の意味を辯證法的に確定することによつて次第に高度の狀態に進み、終に哲學的意識に達するものと見

三 論 理 學

(一) 序 說

論理學は純粹理念の學で、一切の思惟及び實在の根基たる概念を發展するものであるが、此思惟の法則は範疇であるから、論理學又範疇の演繹をするものと言はれ得るのである。而して哲學は對象の思惟的考察であるから、論理學は哲學の一部であつて然も其の基礎たるものである。然も此論理學は思惟と共に實在を論ずるものであるから、同時に形而上學と稱せられる。

此論理學の立脚地は思惟の客觀性に對する態度によつて定まる。是には三種ある。(一)獨斷的——即ち客觀的思惟を初から假定すること、其は懷疑主義によつて破碎せられたが然し其の立場は教訓的である。(二)經驗的批評的——前者は懷疑主義に導くもの、後者は辯證

法的であるが、然しまだ主觀的觀念論で絶對的觀念論とならぬ所に缺點がある、且つ所謂批評は水中に入らずして游泳を學ばんとするものに過ぎない。(三)直接智——之を間接智と全然別種とすることは不可である。即ち此間接智にも直接智にも偏せざる所に論理學の新態度が存するもので、是が即ち辯證法である。

辯證法に於て概念の發展を説くに當つて、之を三點から考察する、即ち其の「何が」「何か」ら「何の爲に」の三視點で、之から論理學は「ある(有、存在)」「もと(本質)」「わけ(目的、概念)」の三部に分れる。而して是は根本の思惟作用から次第に發展するが、然し其の發展は全然論理的で毫も時間的意義はない。其の端初は實に「ある」といふことである。

(II) 論理學の構造

今先づ論理學の各部門を列記する。(大體『エンチクロペデー』に従ふ)

第一有(Sein)論は性質、分量、質量(Qualität, Quantität, Maß)の三部に分れる。性質は有、定有、對自有(Sein, Dasein, Fürsichsein)に分れ、分量は純粹量、定量、度に分れ、質量は特量、實量の質、本質の成生に分れる。

次に第二本質(Wesen)論は實存の根據としての本質、現象、「論理學」には自己反省として

の本質)、現象、現實の三部に分れ、其中に物、現象、諸關係範疇等を包括する。

終に第三概念(Begriff)論は主觀的概念、客觀、理念の三部に分れる。主觀的概念は概念共もの、判斷、推理に分れ、客觀は機械制、化學作用、目的關係に分れ、理念は生命、認識、絶對理念に分れる。

以上の中、有と本質とに關する初二部門を客觀的倫理學と名づけ、概念の部門を主觀的論理學と稱する。而して後者の第一部は狹義の論理學の問題を辯證法的に演繹したるもの、第二部は自然哲學、第三は精神哲學の根本に關するものと見られる。而して有論に於ては範疇中性質より分量に及び、本質論に於ては關係と様相とを演繹して居る。

今是等の諸段階を詳論することなく、たゞ初の有論の一節を擧げて其の論法を示さう。

(III) 有、無、成の辯證法的關係

論理學の出發點たる「有(ある)(Sein)は最简单、最抽象的、最直接であるが、然も最發展せず、決定せられないから無内容、空虚である、此點から言へば「有」は即ち「無(な)(Nichts)」といふ意味をもつことになる。即ち此に有の定立は自己の中から自己を否定して無となるのである。然も是等は互に矛盾するが故に之を解除するものは無を否定すると共に又前の有を

も否定し、然も兩者を保存するものでなければならぬ。是は即ち「成」(なる)(Werde)である。成は即ち前二者の綜合である。

然しながら成は又常に自己を否定する。「成」の否定は「成」が既に終つたことである。「な」が「なつた」「なつてある」状態になるので、是を「定有」(Das Sein)といふ、即ち「有」が或る規定を受けることである。即ち此に性質が現れるのであるが、此の一定の性質を以て存在するものは他の存在と區別せられる。區別は然し關係を豫想する。斯くして一のもの其自身を否定する他のものと對立する。一は他と區別せられる限り有限であるが、兩者の對立關係には限界がない。是は一見無限のやうであるが、實はたゞ限界がないことで、定まる所がないから之を惡無限(schlechte Die Dichtigkeit)といふ。之に反して眞の無限に於ては自己に對するものは他にあらずして又自己であり、隨て自己が自己に限界せられる場合である、之を對自有(Fürsich ein)といふ。是に於て實在性は否定せられて觀念性が現れ、性質上の變化は實在しないことになる。即ち「一」はたゞ「一」として「他」から區別せられるのみで、性質の變化はやんで分量の増減のみとなり、こゝに分量の範疇に移るのである。

(四) 論理學の體系

以下分量其他に就ても同様の論法が妥當する。即ち有無成の關係が辯證法の公式と目せられ得るのである。

今次に所謂大論理學(L)により論理學各段の細目を擧げ、間々概論[E]に見えた名稱を對照する。(一々の譯語は繁雜に渉るから略す)

I. Die Lehre vom Sein

A. Bestimmtheit

(Die Qualität [E])

- a) Sein(1) Sein, (2) Nichts, (3) Werden.
- b) Dasein(1) D. als solches, (2) Die Endlichkeit, (3) Die Unendlichkeit.
- c) Fürsichsein(1) F. als solches, (2) Eins u. Vieles, (3) Reputation u. Attraktion.

- a) Die Quantität... (1) Die reine Quantität, (2) Kontinuierliche u. diskrete Grösze, (3) Begrenzung der Q.
- b) Das Quantum... (1) Die Zahl, (2) Extensives u. intensives Quantum, (3) Die quantitative Unendlichkeit.
- c) Das quantitative Verhältnis... (1) Das direkte Verhältnis, (2) Das umgekehrte Verhältnis, (3) Potenzverhältnis. (Der Grad [E])

B. Die Grösze

(Die Quantität [E])

(Der Grad [E])

C. Das Masz

- a) Die spezifische Quantität... (1) Das spez. Quantum, (2) Spezifizieren-
des Masz, (3) Das Fürsichsein im Masze.
- b) Das reale Masz... (1) Das V. selbständiger Masze, (2) Knotenlinie
von Maszverhältnissen, (3) Das Maszlose.
- c) Das Werden des Wesens... (1) Die absolute Indifferenz, (2) Die
Ind. als umgekehrtes V. ihrer Faktoren,
(3) Uebergang in das Wesen.

II. Die Lehre vom Wesen

A. Das Wesen als

Reflexion in ihm selbst
(D.W. als Grund d. Existenz [E])

- a) Der Schein (1) Das Wesentliche u. d. Unw., (2) D. Schein,
(3) Die Reflexion.
- b) Die Wesenheiten od. Reflexionsbestimmungen... (1) Die Identität,
(2) Der Unterschied, (3) Der Widerspruch.
- c) Der Grund (1) Der absolute Grund, (2) Der bestimmte G.,
(3) Die Bedingung.
- a) Die Existenz ... (1) Das Ding u. seine Eigenschaften, (2) Das Be-
stehen des Dinges aus Materien, (3) die
Auflösung des D.
- b) Die Erscheinung... (1) Das Gesetz der Erscheinung, (2) Die er-

B. Die Erscheinung

- c) Das wesentliche Verhältnis... (1) Das V. des Ganzen u. der Teile
schein ende u. d. ansichseiende Welt.
(2) V. des Kraft u. ihrer Aeuszerung, (3) V.
d. Innen u. Aussen.

C. Die Wirklichkeit

- a) Das Absolute ... (1) Die Auslegung des Absoluten, (2) Das absol-
ute Attribut, (3) Der Modus des Absoluten.
- b) Die Wirklichkeit... (1) Zufälligkeit, od. formelle Wirkl., Mögl.,
u. Not. (2) relative Notwendigkeit od. reale
W. M. N., (3) absolute Not.
- c) Das absolute V. ... (1) Verhältnis d. Substantialität, (2) V. d.
Kausalität, (3) Die Wechselwirkung.

III. Die Lehre vom Begriffe

- a) Der Begriff (1) Der allgemeine B., (2) D. besondere B., (3)
Das Einzelne.
- b) Das Urtheil (1) D. U. der Daseins, (2) D. U. des Reflexion
(3) D. U. d. Notwendigkeit, (4) D. U. des
Begriffs,
- c) Der Sohn (1) D. S. des Daseins, (2) D. S. d. Reflexion, (3)
D. S. d. Notwendigkeit.

- B. Die Objektivität
(Das Objekt [E])
- a) Der Mechanismus... (1) Das mechanische Objekt, (2) Der Prozess, (3) D. absolute Mech.
 - b) Der Chemismus... (1) Das chemische Objekt, (2) Der Prozess, (3) Uebergang des Chemismus.
 - c) Die Teleologie... (1) Der subjektive Zweck, (2) Das Mittel, (3) Der ausgeführte Zweck.
- C. Die Idee
- a) Das Leben... (1) Das lebendige Individuum, (2) Der Lebensprozess, (3) Die Fatale.
 - b) Die Idee des Erkennens... (1) Die Idee des Wahren, (2) Die Idee des Guten.
 - c) Die absolute Idee.

四 自然哲學

理念が純粹概念及び其の實在性の絶對的統一體として自己を定立する時に、そは此形に於て全體として自然である。即ち自然は理念の他在 (Anderssein) である。是に於て論理學は自然哲學に進むのである。

ヘーゲルに取つては自然は恰かも理念或は精神の否定であるから、其中には理性の作用は存せずして偶然の世界となるのであるが、然し結局精神に向ふ點に於て論理的發展を示して居る。かくして自然哲學は力學、物理學、有機體學の三部に分れ、其中に於て諸自然科學が論理的統一を得て居る。有機體即ち生體に於ては個體と全體とが密着不離の關係を有し、個體は理念の全體生活に對する通過點に他ならぬから、死滅することは當然で、此に理性の詭計が存するのである。斯くして向外的な自然生活は轉じて向内的精神生活に入る。

今次に『概論』によつて其の細目を擧げる。

Die Philosophie der Natur.

- I. Die Mechanik
 - A. Raum u. Zeit, B. Die Materie u. Bewegung, C. Die absolute Mechanik.
- II. Die Physik
 - A. Die Physik der allgemeinen Individualität, B. Die Physik der besonderen Individualität, C. Die Physik der totalen Individualität.
- III. Die Organik
 - A. Die geologische Natur, B. Die vegetabilische Natur, C. Der tierische

五 精 神 哲 學

理念が自然の他在的狀態となり、更に之を否定して再び自己内部に向へば、此に絶對的な精神に至る。然も之にも亦三段の發展段階がある。(一)主觀的或は個體的、(二)客觀的、或は一般的(三)絶對的或は神的の三精神である。

(一)個體の心的生活發展は初め自然の生活體と聯關する所から次第に之と分離して純粹の精神生活を表現する所に進む。之を(イ)人性論(生理的心理學の類)、(ロ)精神現象論、(ハ)心理論(理論的、實踐的、自己意識的自由意志)の三段に分ける。此最後の段階に於て精神は漸く個體を離れて全體の類的となり、同時に自己を客觀化する。

(二)客觀的精神の論は廣義の法の哲學を形成する。之に三段がある。(イ)抽象法或は自然法は自由ならんとする精神の外的生活を確立する要件で、即ち客觀的精神の即自的狀態である。其中に又所有權、契約權、刑罰權の三段があり、即自、對自、即且對自の三段を形成する。(ロ)以上の合法性に對する道德は自由精神の内的生活に關するもので、之に決意及答責

志向及幸福、善及良心の三段がある。(ハ)以上内外兩生活の合一は人倫(Sittlichkeit)(前の道德即ち Moralität は主觀道德と解せられる)に於て顯れる。其段階は家族、社會、國家の順序を経て居る。國家に於て客觀的精神は完成するが、一の國家が其任を達し畢る時に他の國家となり、此に國家興亡の世界史が成立するので、之を論ずるものが歴史哲學となる。其の中に論ぜられる世界史の時期は東洋的、希臘的、羅馬的、日耳曼的に區別せられ、其の中に辯證法的關係を示して居る。

(三)客觀的又一般的精神の個々の内容を全體に統括し合一せしめて思惟すれば、絶對精神となる。之に藝術の直觀、宗教の表象、哲學の概念の三段が區別せられる。(イ)美は絶對精神の直觀に表はれて、理念及び現象(形相)の完全な合一を含むものとせられた場合である、而して其が藝術に於て現はれたものを本質的とし、自然美は其の辯證法的要素に他ならぬとする。而して此の美の形式には象徴的(symbolisch)(形相が理念に勝つ)、古典的(klassisch)(兩者素朴的に合一する)、羅曼的(romantisch)(理念が形相に勝つ)の三類があり、是が東洋的、希臘的、基督教的となり、又建築、塑像、繪畫、音樂、詩歌の藝術として表はされる。(ロ)宗教の本質は絶對的精神の表象に表はされたものであるが、初めはなほ直觀的、隨て

藝術的性質と合し、漸次之から離れ行く。其の發展の段階を見れば、(イ)自然宗教(印度埃及等)(ロ)精神的個性の宗教(猶太の莊嚴、希臘の端麗、羅馬の智惠)(ハ)絶對的或は基督教の三段となる。

(三)表象より進んで概念となれば哲學となる。哲學は哲學發展の歴史に於て其の論理的諸性質を發展するもので、最後に出た哲學體系は即ち其以前の一切を包括し之によつて哲學體系其自身の完結をなすものである。

今次に其の細目を擧げる。

Die Philosophie des Geistes.

I. Der subjektive Geist.

- A. Die Anthropologie { a) Die natürliche Seele
b) Die fühlende Seele
c) Die wirkliche Seele
- B. Die Phänomenologie { a) Das Bewusstsein
b) Das Selbstbewusstsein
c) Die Vernunft
- C. Die Psychologie { a) Der theoretische Geist
b) Der praktische Geist
c) Der freie Geist

II. Der objektive Geist

- A. Das Recht { a) Das Eigentum
b) Das Vertrag
c) Das Recht gegen das Unrecht
- B. Die Moralität { a) Der Vorsatz
b) Die Absicht u. das Wohl
c) Das Gute u. das Böse
- C. Die Sittlichkeit { a) Die Familie
b) Die bürgerliche Gesellschaft
c) Der Staat

III. Der absolute Geist

- A. Die Kunst
- B. Die geoffenbarte Religion
- C. Die Philosophie

第五節 論理的觀念論の反對

一 心理主義——フリース

ヘーゲルの全盛期に於ても多少反對を試みる者があつた。之を大別すれば一は其の觀念論に對するもので、一は其の理性主義に反するものである。前者は寧ろ羅曼派の哲學に算へることは出来ないが、後者の論を導く爲に此中に併論することが便利であらう。蓋しカント哲學は羅曼派諸家を経て觀念論的方面から經驗論と遠ざかつて來たが、然し其說中に實在論的經驗論的要素がないではない。之に關して最有力であつたのはベネケ (Friedrich Eduard Beneke 自一七九八至一八五四) である。蘇國派に従ひ、其他次に述べるフリース等に從つて思辨を排した。即ち本有觀念論や能力説を排し、內的經驗によつて一切の心的現象を説明した。心的過程或は之を外界の刺戟を適應する原力となし、之によつて一切の心的現象を説明した。心的過程或は根本過程を四種に分ける、即ち刺戟を受容すること、新しい心的單元力或は原力を形成すること、刺戟及能力の調整移讓及び同種類の心的複合體の相互的牽引と融合等である。ベネケ

は此處から道德教育等を論じたが、其の所説が時の教育家の危險視する所となり、柏林大學の講師を免ぜられ、快々不平の生涯を送り、後誤まつて溺死した。

フリース (Jakob Friedrich Fries 自一七七三至一八四三) はハイデルベルク及びイエナの教授となり、『新理性批判』『心理學』(Neue Kritik der Vernunft; Handbuch der psychischen Anthropologie) を著した。カントの批判書に於て説いた先天認識の關する研究は後天的の人性を基礎として説かれなければならぬ。斯くして批判は心理的基礎の上に立つものでなければならぬとした。此説を心理主義 (Psychologismus, Anthropologismus) とす。フリースは此立脚地から思惟の根本を感情に歸した。其の諸論(例へば法理哲學)は多く時の哲學界の最高權威とせられたヘーゲルに反對するものであつた。

二 多元的實在論——ヘルバルト

以上の諸説と關聯し最も有力と看做されるものはヘルバルトである。ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart 自一七七六至一八四一) は一八〇二年ゲッティンゲンに講師となり、一八〇九年ケーニヒスベルクで教授となり、一八三三年、ゲッティンゲンに教授となつた。著書極めて多く、全

集十二卷、哲學に密接なものとしては『形而上學』『哲學概論』等がある。

ヘルバルトは精確を尙び、嘗てフイヒテの講に慊らず、終生羅曼派の形而上學に反し、自らカントの直系を以て居つた。哲學を以て概念の學としたが、其の概念は一般的經驗や經驗的科學の中に存するものであるから、之を必然的關係を有するもののやうに改めなければならぬ。斯くして概念の細工が哲學の主なる事業である。而して哲學を分けて(一)論理學(二)形而上學(三)美學の三部とする。論理學は全然形式的なものである。形而上學は方法論、實體論、集合學、形態學(Methodologie, Ontologie, Gyn echnologie, Etologie)の四部分に分れる。

經驗界は現象である。現象の奥には實在がある、即ち假相のある限り其は實在を指示するものである、即ち斯くして物自體を論ずることが出来るであらう。即ち概念を細工し仕上げること、其方法を關係の方法(Methode der Beziehung)とす。蓋し普通の判断は既に矛盾して居る、「aはbなり」を $a \parallel b$ といふ意味にすれば矛盾である。故に之を説くにはaそのままならず、aの或る關係a1がbだとすればよい、即ち $a : a1 \parallel b$ とする。此理を推して諸問題を解する。例へば實體と屬性との關係に於て $a \parallel b, a = c, a \parallel d, \dots$ とす矛盾を $a :$

$a1 \parallel b, a : a1 \parallel c, a : a2 \parallel d, \dots$ とすれば可。斯くて一切の性質は關係で知られる。絶對的の定立は不可認識である。「實在的」(das Reale)は性質がないから變化もない、然も各現象に相當する、故に多元的である。變化は此「實在的」が他の妨害に對する自家保存によつて生ずる現象に他ならない。

此「實在的」が現象となるのであるが、是は其の偶然相(Zufällige Ansicht)である。之を論ずるものが集合學及形態學であつて、前者は恒常的のものを後者は現象を論ずる、其の應用として自然哲學及心理學等がある。自然界の根基即ち物質運動空時等に關する矛盾は之を偶然相から見れば解釋し得られる。即ち例へば現象的空間に對して叡智的空間を設けるやうにすれば、其の難點を説く事が出来る。精神界の基本たる自我も諸多の作用を有するといふ點に於て亦矛盾を含むが、之を觀念の群列と見れば解釋する事が出来る。即ち觀念の連結發生消滅等を以て一切の精神現象を説明し得るので、以て舊時の能力心理學を破し得べく、又此觀念と識域との關係によつて數學的計算を施すことが出来るとした。今日の實驗心理學に比すれば許多の空想思辨を交へて居るものであるが、然も經驗的心理學を學として説く事を試みたものといふことが出来る。

次に經驗に就て評價を試みれば美醜の判断が生ずる。此判断は經驗的實體の間に存する關係について生ずる所のものである。而して此の美的判断の「種」として道德的判断が存する。其の標準には所謂五道念がある、即ち内的自由、完全、好意、正義、應報である。

此の倫理説や心理説を基礎として學としての教育學が成立する。而して是が最も多くヘルバルトの名聲を高からしめたものである。

三 非理性的觀念論

(一) ショーペンハワー

ヘルバルトやベネケ等の説は分析が精密で、よく羅曼派哲學の弱點を衝く所があるが、其の着想の奇抜と結構の雄大とに於ては缺ける所があつた。之に反して同じく羅曼派の立脚地にあつて然も巧に新時代の科學を取入れ、遠く印度思想を加味し、加ふるに文辭の妙を以て一世に雄視したものはショーペンハワーである。ショーペンハワーの専ら敵とした所はフィヒテ以後の諸家で、特にヘーゲルに對して非理性主義を唱へた。而して其の根柢には認識論上の觀念論を執り、かくして自らカントの直系だと思つて居た。其の非理性主義は實にベーメ

以來獨逸思想の一特色をなすもので、既にフィヒテ、シェリング諸家の中にも存して居たのであるが、反て之を知らなかつたのである。

ショーペンハワー(Arthur Schopenhauer)は一七八八年ダンチヒに生れた。父は富商で其子に業を繼がしめる爲に伴つて諸國を旅行せしめた。然し父の歿後、其の好む所の學に向ひ、一八〇九年ゲッティンゲン大學に學生となり、此でシュルツェ(『エーネシデムス』の著者)からカント及びプラトンを尊崇すべき事を鼓吹せられた。後轉じて伯林大學に入つたがフィヒテの講義に不満であつた。一八一三年『充足理由の四根に就て』(Über die vierfache Wurzel des Satzes vom zueichenden Grunde)を提出して學位を得、一八一九年主著『意志及び表象としての世界』(Die Welt als Wille und Vorstellung)第一卷を公にした。一八二〇年伯林大學に講師となつたが、ヘーゲルに拮抗せんとして意を得なかつた。著書も講義も人々の注意を惹かなかつたので、不平滿々常に大學教授の哲學を罵倒して居た。一八三一年フランクフルトに退隱したが、此頃より次第に名聲が高くなつた。時勢は科學を基礎とした厭世觀を迎へるやうになつたのである。斯くして文壇の耆宿となつて一八六〇年歿した。著書は前記二書の他、隨筆集(Paregia und Paralipomena)や『自然に於ける意志』等數種ある。且全

集は既に早くから二種あつたが、最近には故ドイッセンを中心としたショーペンハーワー協會で完全な出版を試みて居る。

(II) 哲學の部門

人の特徴は理性を有することにある。今之によつて世界を觀すれば其の不思議に驚かさるを得ない。存在と死滅とは驚異の念を惹起し、之を其の普遍性で解釋せんとする所に人の特色が存する。是れ其の「形而上的動物」(animal metaphysicum)と言はれる所以である。此の解釋の欲求を形而上的需要といふ。哲學は此需要を充たし、以て諸科學の根柢に存する不可解なものに明にせんとするものである。是は四部に分れる、即ち(一)我々に發現する世界及び(二)世界其自體を知り、(三)之より一時的及び(四)永久的に解脱する道を講じなければならぬ。主著(第二卷は第一卷の諸問題を細説したもの、終りにカント哲學の批評を附してある)は恰かも此四篇に分れて居るのである。

(III) 表象界

第一篇は「世界は我が表象なり」といふ句を以て始まつて居る。蓋し此句の正しく説く通り、世界は我が認識するによつて我に對して存在するものである。故に此の表象としての世

界は主觀に對する客觀である。主觀と客觀とが相對立する。主觀は單一で世界の擔保者であり、客觀は雜多で空時中に存し因果律に支配せられる。空時によつて世界は雜多となるから之を個別原理(Principium individualitatis)とす。因果律は感覺中にも存するもので經驗に先立つて居る。但しカントは之を説く爲に十二範疇を列擧したが、是は多きに過ぎるもので、之を約して「充足理由原理」(Principium rationis sufficientis)に歸することが出来る。然るに一切の表象界を四大別し得るから、之を四種に分ける、所謂四根である。即ち

- (一) 直觀的表象——因果律(物理的)——成生の理由原理(Pr. r. s. fiendi; Satz des zureiche der Grundes des Werdens)——原因、刺戟、動機
z. G. des Erkennens)
- (二) 抽象的概念——論理的理由及歸結——認識の理由原理(Pr. r. s. cognoscendi; S. d. des Seins)
- (三) 經驗界の形式——時空(數學的)——實在の理由原理(Pr. r. s. essendi; S. d. z. G. de Motivation.)
- (四) 內感の直接對象——意志(道德的)——行動の理由原理(Pr. r. s. agendi; S. d. z. G. de Motivation.)

要するに表象界即ち現象は是等四根特に時空によつて個々別々となり、因果律によつて束縛せられる。故に其の真相は知ることが出来ない、變幻的である。即ちカントの言つた通り先天的觀念性を有して經驗的實在性を有する、と言へるのである。但しショーペンハウアーのカント解釋は其の眞を得ざるものと言はれて居る。

(四) 意志界

然るに世界は其自身に於ては必しも主觀に對する現象ではない、之を知るには知的直觀即ち内觀を要する。今自己の意識を内觀すると、其の一切作用の基礎として意志が存する事を知り得る、是れ其第四根で説いた所である。意識全體は其本質の自己發現である、故に其の本體は意志又は性格である。今此の内觀の結果を以て類推すると、意志は直ちに世界萬有の眞相とする事が出来る、而して現象界の諸作用は皆其の根抵に存する。力即ち意の發現である。固より之には程度があつて、自然力や動物の衝動の時は無意識である。此意識は即ち「物自體」であるから、萬物は即ち此意志の發現である。而して此意志は因果外であるから、之が感覺界に現れるにも因果的ではない、即ち感覺界は意志の客觀化に他ならない。此意志はフイヒテの實踐的自我とは異なつて道德的意義を有たない、ただ生きんとする意志 (Wille)

zum Leben) である。時空等の制限を脱するものであるから、一而全である、而して之を大別して自然力、衝動、動機 (Naturkraft, Reiz, Motivation) となす。

低級の意志は漸次高級意志の發現に移らうとして相闘争する、而して高級の發現は常に低級の發現を犠牲にする。斯くして引力から漸次諸物理作用を経て高級發現の意志となり、之と共に大腦が發達して知力が生ずる。故に知は寧ろ意より後に生ずるものである。此説は主意説にして又唯物論的心理説といはねばならぬ。

世界全體は一大意志の發現として調和して居るが、個體は其中にあつて常に闘争して已まない。故に世界は苦痛を本體とするもので、快感は消極的概念であるとする、是が其の厭世觀の生ずる所以である。而して此苦痛から解脱するを要することとなる。

(五) 美學

解脱の第一法は表象界に於てなされるものである。蓋し表象は個體的發現であるが、之よりも一般的な發現があり、プラトンの所謂觀念 (Idee) に當る所がある。即ち是は意志の直接發現で、類型である。隨て個體に存する苦痛はないから、之を觀じて一時表象を脱する事が出来れば、一時の解脱をなし得るであらう。此の如き觀念は美に於て顯れる、何者、美の客

體は個體性を没して常住の相を現するから。斯る客體に對する主體も亦純粹無意志的認識主觀とならなければならぬ。斯くて觀美の境に在れば我我を忘れて全然物の中に没し去る。物も亦此場合はただ類型となつて作用する。斯くて暫く現世個體間の苦痛を脱する事が出来るのである。

(36)

此域は何人も達する事を得るが、然し最も長く之に止り得るものは天才に限られて居る。蓋し天才は世界の苦を感じる事が鋭くして又我を没する力も強い。觀念を知る事が深くして反て個物に通じない、是れ狂者と壁一重といはれる所以である。

美的感情は莊嚴(崇高)と端麗(優美)とに二分せられる。所謂滑稽美は概念の矛盾から生ずるもので知に關するものである。

美は藝術に至つて最完全に現れる。此藝術を分つて次の諸類とする。即ち(一)無機界——建築、水道(二)植物界——庭園術、山水畫、(三)動物界——動物、彫刻、繪畫、(四)人類界——塑像、(五)人類界——詩歌、(六)意志界——音樂。

(六) 道德及宗教

此の如くして一時解脱する事は出来るが、永久ではない。是に於て第四に永久の解脱の爲

に苦の因たる意志の個體發現を根絶する事を要する。意志の發現は肯定である。故に之を否定することによつて苦を滅し得る譯である。其の爲めに作用する知は動機(Motiv)とならずして靜機(Quies)となるものである。知は意の爲に世界の害惡と空虚とを示し、又萬物唯一の理を傳へる。斯くて先づ同情の徳が生ずるが、更に深刻な方法は意志の斷滅であつて、之を聖者の境遇とする。斯くて萬物同一の理を覺り全く無に歸する。印度に所謂「是れ爾なり」(Tat tvam asi)の境地から涅槃(Nirvana)に入るのである。

(361)

第六章 近代の哲學

第一節 總 說

ヘーゲルは獨逸唯心論の極であつて、又獨逸をして十九世紀前半の哲學の覇權を占むるに至らしめた所以である。然るにヘーゲルの歿後暫くにして時勢一變し、ヘーゲル派が分裂して其中から正反對の唯物論が出るやうになり、自然科学が盛となつて哲學の思辨は其の威信を失つた。是に於て哲學は一時屏息して僅に特殊の研究と史的考證との間に隠れて居た。而して此間自然科学から哲學に入らんとするものがある。之を實證主義(Positivism)と云ふ。十九世紀中葉以後の思想は皆然うであつた。而して此思想は特に英佛に於て既に早く發達して居たから、先づ此二國の状態を略叙しよう、但し哲學史の範圍は大體前章に止めて、其以後は最近哲學として別に論ずるを普通とするから、以下ただ大體の人名等を列記するに止める。なほ十九世紀末期から二十世紀に至つて哲學は又新たな意味を有して來たが、是は現代に

屬するものである。之に就てもたゞ重要な人名書名等を列記して置くのである。

第二節 佛 國

一 十九世紀前期

佛國革命は啓蒙思想を實現し、一切を破壊したが、教會中には之に反對して保守的權力を維持する者があり、文學者中にも之を擁護するものがあつた。文學者中にはシャトープリアン(Chateaubriand 自一七六九 至一八四八)が『基督教の精神』(Génie du Christianisme)に於て加特力教を辯護し、スタール夫人(Madame de Staël 自一七六六 至一八一七)は獨逸哲學を導入して宗教的精神の必要を説いた。是等によつて十八世紀に對する反動が次第に現れ來つたが、更に宗教的權威を主張するものにはボナール、ジョセフ・ドウ・メイストル、ラムネー等(Louis Vicomte de Bonald 自一七四〇 至一八四〇) (Joseph de Maistre 自一七三三 至一八二一) (Robert de Lamennais 自一七八二 至一八五四) がある。一切を神に歸するが故に、(ラムネーの如く)人知に對して懷疑的態度に出るものもあり(ドウ・メイストルの如く)教會萬能説を唱へて人心を所動的と見る結果、反て又コンヂヤック

の感覺論を傳へるに至つた。此のコンヂャック主義は一面十八世紀思想の繼續に當るもので、之を心理的生理的方面に導いたのはカバニス (Pierre Jean Georges Cabanis 自一七五七至一八〇八) である。生活感情及び本能に重きを置き、生理的立場から意識に高下の別を説いて幾分唯物論的見解を示したが、然し寧ろたゞ生理と心理との關係を説くことに重きを置いたといふべきである。更にドウ・トラシー (Destutt de Tracy 自一七五四至一八三六) はロックやコンヂャック等に見る如き觀念起原に關する研究を「イデオロギー」即ち觀念學 (Idéologie) と名づけた。隨て是等の學者をイデオログ (Idéologue) と呼ぶが、然し此語は往々にして輕視 (ナポレオンの如く) の意に用ゐられても居た。是等の中に於て最も有力なのはメイヌ・ドゥ・ピラン (Maine de Biran 自一七六六至一八二四) である、心の能所二性を説き、自己活動の意識即ち意志作用を以て一切認識の基本とし、デカルトの「我思惟す故に我あり」の代りに「我意欲す故に我在り」と唱へた。或は其の認識に形質二面を分つ點等よりカントに比するものもある。斯くして「イデオログ」中に在つて既にコンヂャックを超脱した觀がある。實際其説は、初はコンヂャック説に屬し、中頃意志本位の哲學に入り、終りには神祕的基教的によらんとした。其の遺著は近來種々出版せられて新に人々の注意を惹いて居る。

是等のコンヂャック主義に對して哲學的立場から明白に反對したものはロワイエ・コラー (Royet Collard 自一七六三至一八四五) 及びビクトル・クザン (Victor Cousin 自一七九二至一八六七) がある。前者はスコットランドの常識哲學を佛國に導き、後者は之に獨逸哲學を加へた。殊にクザンは獨逸に學んで親しく當時の學者と交はり其説を佛國に導くことに功があつたのみならず、大學教授、文部大臣等となり、哲學を一般に普及し、殊に高等學校の課程とすることに努めた。其説は古今諸説に就て採長補短を謀り所謂折衷學風を立てるものであつた。

以上の心理學派に對して社會學派とも名づくべきものがある。サンシモン、フリーリエ、ルー、ブルードン等種々の社會論者中、殊にサン・シモン (Saint Simon 自一七六〇至一八二五) の社會改革案等を祖として之に科學的根據を與へんとしたコント (Auguste Comte 自一七九八至一八五九) は實に近代社會學の祖と稱せられ、又實證主義の新學風を樹立したものと云はれる。コントは初め巴里の工業大學に於て數學物理學等の基礎學科を修めて後、事を以て退學を命ぜられ、サン・シモンに私淑して終に一般哲學に新案を提出した。之を實證哲學と名づけて有志の人々に對して講義をしたが、後之を『實證哲學講義』(Cours de philosophie positive) 六卷として出版し、續いて其の立場から諸書を公けにした。其の書の初にある學術三段階説と科學統治系論

とは基礎的な説明として著名である。即ち學的知識は神學的或は假設的、形而上學的或は抽象的、科學的或は實證的の三段の順序を経て發達するものとし、而して實證的科學中基本的なるものに六種あり、抽象的なるものから次第に具體的特殊的に進むものとし、之を數學、天文學、物理學、化學、生理學、社會學の順序で排列した。其の力を盡した所は社會學理論の建設であつたが、後年初の理性主義を變じて感情尊重の思想を加へて、人間教といふ一種の宗教的團體を生ずるに至つた。

(366)

二 十九世紀後期以後

以上は十九世紀の中期に屬するものであるが、後期より二十世紀に至つては更に新に獨英等の影響を受けて種々の方面に發達した。是等は近代中の最近代であつて、普通歴史の範圍外に屬するものであるが、今其の主要なるものを表示すれば次の如くなる。

(I) 唯心論(クザン派)

此中にはジャンネー(Paul Janet 自一八二二至一八九九) ラズインン(Felix Ravaisson-Mollien 自一八一三至一八〇〇) スクレタン(Charles Secrétan 自一八一五至一八九五)等がある。ジャンネーは哲學史等の著述があり、其の

倫理學は早く我邦に知られて居る。ラズインンはミュンヘンでシェリングの講義を聞き其の影響を受けた。其のアリストテレス研究は著名である。幾分クザンの折衷説に對して批評的態度に出て居るが、彼自身やはりシェリングの他にアリストテレス、ライブニッツ等の説を折衷して居る。スクレタンも亦シェリングを聴講し、自由の哲學を説いた。

(II) 不可知論及蓋然論

コントの實證哲學は直接にはラフィット(Pierre Lafitte 自一八二二至一八〇三)及びリットン(Erme Littre 自一八〇一)等の學徒を有するのみであつたが、其の精神は一方には人間教となり、他方には間接に文學宗教史等の研究家の中に傳はり、不可知論蓋然論を生じた。其中にあつて著名なるものはテーヌとルナンとである。テーヌ(Hippolyte Taine 自一八〇七至一八九三)は巴里美術學校の美學美術史の教授である。コント及びミルの實證主義より出發したが、スピノザ、ゲーテ、ヘーゲル、ギコ、ヘルデル等の影響をも受け、多少形而上學的傾向を有し、必然論的世界觀を心理現象に應用し、藝術文學等に對する環境説を執つた。其の英文學史は此説を通俗的に示したものとて普く知られて居る。ルナン(Ernest Renan 自一八二七至一八九三)は巴里のコレヂ・ドゥ・フランスの東洋學教授で其著『耶蘇傳』は著名である。其哲學説は一見調和し難きカント、

(367)

ヘーゲル、ハミルトン、コント等を合したるものであるが、其の興味は寧ろ歴史的方面に存して居たので、隨て蓋然論の立脚地に歸するのである。

(三) 社會學及心理學

然しながら佛國多數の學者の興味は一時哲學形而上學よりは社會學心理學等の科學に向つて居た。社會學はコントに發して次第に更に科學的となつた。生物學的社會學のエスピナス (Alfred Espinas 自一八四二至一九〇三) は動物社會の考察に基づいて社會を定義して個體をして共通行動をなさしめる永續的支持とした。之に接近したものに人類學的社會學があり、ダーキン説を應用する。是等の學説は人類を單に解剖學的に考察し、或は社會を極端に有機體に比較するので、之に反對するものが生ずることは又當然である。こゝに心理學的人類學の代表者たる タルド (Gacriel Tarde 自一八四三至一九〇四) の社會現象を模倣の法則によつて説明するものがある。更に又之に對して實在論的社會學を代表するデュルケイム (Emil Durkheim 自一八五八至一九一七) は個體意識に對する集合意識の特性を説いて、歴史的社會形態の比較から社會型を別々に之によつて社會分業論、自殺論等を説く。是等實證的社會學を應用して倫理學、未開民族心理等を説くものにレヴィ・ブリュール (Lévy-Bruhl 自一八五七至一九三九) がある。

心理學も佛國に於て特異の發達をなし、デルボーフ (Delboeuf 自一八三六至一八九六) シヤネー (Pierre Janet) リボロー (Theodor Ribot 自一八三九至一九一七) ビネー (Alfred Binet 自一八五七至一九一七) デューマ (G. Dumas) 等がある。主として高等心理作用を研究し、又別に病的現象に就て論究するものがある。

(四) 進化論

十九世紀中葉に於て特に勢力を有した進化論を承けて之をプラトン哲學より導き來つた觀念論と結合し諸種の問題を論究したものはフィエー (Alfred Fouillée 自一八三八至一九一四) である。觀念論自身力が有することを唱へて諸種の問題を解く。其の女婿ギュー (Jean Marie Guyau 自一八五四至一八八八) も同様の立場から哲學倫理美學方面の著述を出して居る。

(五) 批評主義

一方にはカント哲學の影響によつて佛國哲學は學的に發達した。此新批評主義を代表する者はルヌギエ (Charles Renouvier 自一八一八至一九〇三) である。哲學の出發點を表象に求め、實在も之を離れては認識し難しとする。表象は凡て分量的であるが、分量は有限であるから、宇宙も其の大小共に無限ではあり得ないし、又現象界に於ては絶對の始原と自由の行動が存するとして居る。ルヌギエは又カントの範疇表を改訂して、九綱二十七目を定めた。

